

成 法 寺 遺 跡

財團法人 八尾市文化財調査研究会報告51

I 成法寺遺跡 (第7次調査)

II 成法寺遺跡 (第8次調査)

III 成法寺遺跡 (第14次調査)

1996年 3月

財團法人 八尾市文化財調査研究会



成 法 寺 遺 跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告51

I 成法寺遺跡 (第7次調査)

II 成法寺遺跡 (第8次調査)

III 成法寺遺跡 (第14次調査)

1996年 3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しています。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、成法寺遺跡第7次調査・第8次調査（平成3年度）、第14次調査（平成6年度）の遺物整理等が完了し、報告書を刊行する運びとなりました。成法寺遺跡は、八尾市の中央部に所在する弥生時代から近世にわたる複合遺跡であります。第7・8次調査では、飛鳥～奈良時代において、井戸や多量の土器が出土した溝が検出され、当時の生活を知るうえで大変貴重な調査であります。また第14次調査では埋没古墳が発見されています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、これらの発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多人なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した成法寺遺跡の発掘調査報告書であり、平成3年度の第7次調査（SH91-7）・第8次調査（SH91-8）、平成6年度の第14次調査（SH94-14）の報告を集録したものである。
1. 内業整理は各現地調査終了後に着手し、平成7年10月31日をもって終了した。
1. 本書の構成・編集は、第7・8次調査は坪田真一、第14次調査は原田昌則が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図（昭和61年8月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成5年10月1日改訂）を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。
1. 本書で用いた方位は、第7・8次調査が現地実測図と2,500分の1地形図から起こした座標北、第14次調査が磁北を示している。
1. 造構は下記の略号で表した。

掘立柱建物—SB	井戸——SE	土坑——SK	ピット・小穴—SP
溝——SD	落ち込み—SO	自然河川—NR	
1. 遺物実測図の断面は、須恵器を黒、石製品・木製品・土製品を斜線とし、他は白とした。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

序

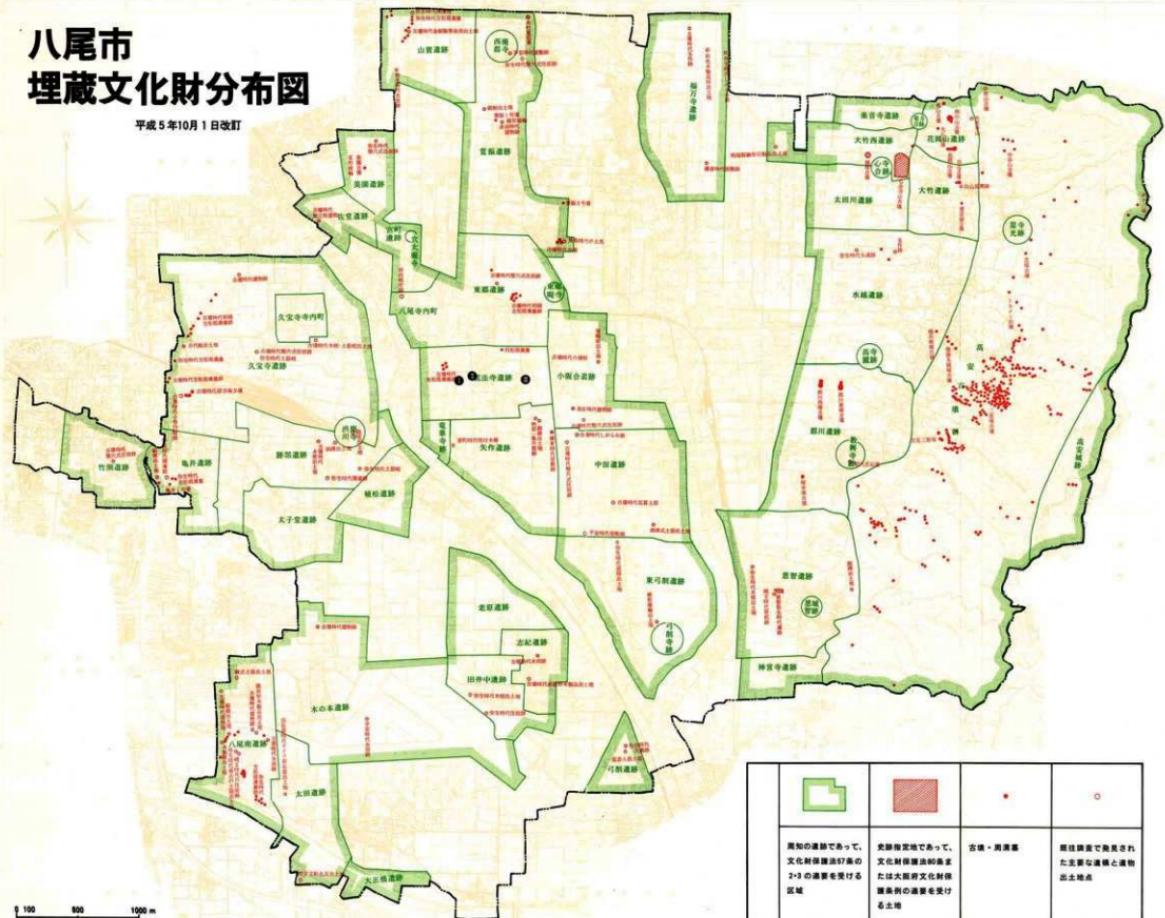
八尾市埋蔵文化財分布図

I 第7次調査（SH91-7）	1
II 第8次調査（SH91-8）	33
III 第14次調査（SH94-14）	83

報告書抄録

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成5年10月1日改訂



I 成法寺遺跡第7次調査（SH91-7）

例　　言

1. 本書は、八尾市清水町2丁目2-5に所在する八尾市立成法中学校内で、プール建設に伴って実施した成法寺遺跡第7次調査（SH91-7）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第119号 平成2年12月19日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市長から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は、当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成3年8月1日に着手し、同年9月7日に終了した。調査面積は約690m²である。
1. 現地調査には、坂下 学・能勢直樹・濱田千年・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理は上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び図版は坪田が行った。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第2章 調査経過.....	4
第3章 調査概要.....	4
第1節 調査方法.....	4
第2節 基本層序.....	6
第3節 検出遺構と出土遺物.....	7
第4章 まとめ.....	32

挿図目次

第1図 成法寺遺跡調査地位置図 (S = 1 / 5000)	2
第2図 地区割図 (S = 1 / 400)	5
第3図 基本層序 (S = 1 / 40)	6
第4図 第1次面平面図 (S = 1 / 200)	7
第5図 第2次面平面図 (S = 1 / 200)	8
第6図 第3・4層出土遺物 (S = 1 / 4)	10
第7図 S D209出土遺物 (S = 1 / 4, 1 / 6)	11
第8図 第3次面平面図 (S = 1 / 200)	12
第9図 S E301枠組み模式図	13
第10図 S E301平・断面図 (S = 1 / 30)	14
第11図 S E301枠板① (S = 1 / 10)	15
第12図 S E301枠板② (S = 1 / 10)	16
第13図 第3次面遺構出土遺物 (S = 1 / 4)	17
第14図 S B301平・断面図 (S = 1 / 50)	21
第15図 第5層出土遺物 (S = 1 / 4)	22
第16図 第4次面平面図 (S = 1 / 200)	23
第17図 S K402・S P401平・断面図 (S = 1 / 50)	24
第18図 第4次面遺構出土遺物 (S = 1 / 4)	25
第19図 S D402出土遺物① (S = 1 / 4)	26
第20図 S D402出土遺物② (S = 1 / 4)	27
第21図 S D404出土遺物① (S = 1 / 4)	28
第22図 S D404出土遺物② (S = 1 / 4)	29
第23図 第6・7層出土遺物 (S = 1 / 4)	30

表 目 次

表1 成法寺遺跡調査一覧表	3
---------------------	---

表2 第2次面溝 (S D201~208) 法量表	9
表3 第3次面土坑 (S K301~309) 法量表	18
表4 第3次面溝 (S D301~336) 法量表	18
表5 第3次面ピット法量表① (S P301~333)	19
表6 第3次面ピット法量表② (S P334~391)	20

図版目次

- 図版1 4区 第1次面 (南から)
 4区 第2次面 (南から)
- 図版2 1~3区 第3次面 (北から)
 4区 第3次面 (南から)
- 図版3 3区 第3次面 S B301周辺 (北西から)
 4区 第3次面 S E301 (東から)
- 図版4 4区 第3次面 S E301 (東から)
 4区 第3次面 S E301井戸枠 (東から)
- 図版5 3区 第4次面 (北から)
 4区 第4次面 (南から)
- 図版6 3区 第4次面 S K402北西壁
 4区 第4次面 S D403断面 (南東から)
- 図版7 4区 第4次面 S D402断面 (南東から)
 4区 第4次面 S D402土器出土状況 (南東から)
- 図版8 第4層、S D209、S K309、S P302、S P373出土遺物
- 図版9 S E301、第5層、S K401、S K402出土遺物
- 図版10 S D402出土遺物
- 図版11 S D402、S D404出土遺物
- 図版12 S D404、第6・7層出土遺物

第1章 はじめに

成法寺遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では光南町1～2丁目・清水町1～2丁目・南本町1～4丁目・高美町1～2丁目・松山町1丁目・明美町1丁目・陽光園1丁目がその範囲とされ、東西約1.1km・南北約0.6kmに拡がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地しており、北側で東郷遺跡、東側で小阪合遺跡、南側で矢作遺跡に接し、西側には長瀬川が北流している。

当遺跡は昭和56年5月、八尾市教育委員会が光南町1丁目29番で実施した試掘調査により確認された遺跡で、以降八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期からの遺跡であることが知られている。

これまでの調査成果を時代毎にまとめると次のようになる。

弥生時代中期では遺跡北東部⑫で方形周溝墓が検出されている。全容は不明であるが、一辺約13mを測り、埋葬施設として木棺3基・土器棺2基が確認されている。その西方の⑧では、この時期の遺物がまとめて出土し、自然流路が想定されている。また⑧の南側の遺構確認調査⑩では、南北60m・東西40mにわたって濃密な遺物包含層が確認され、集落の中心部である可能性が指摘されている。

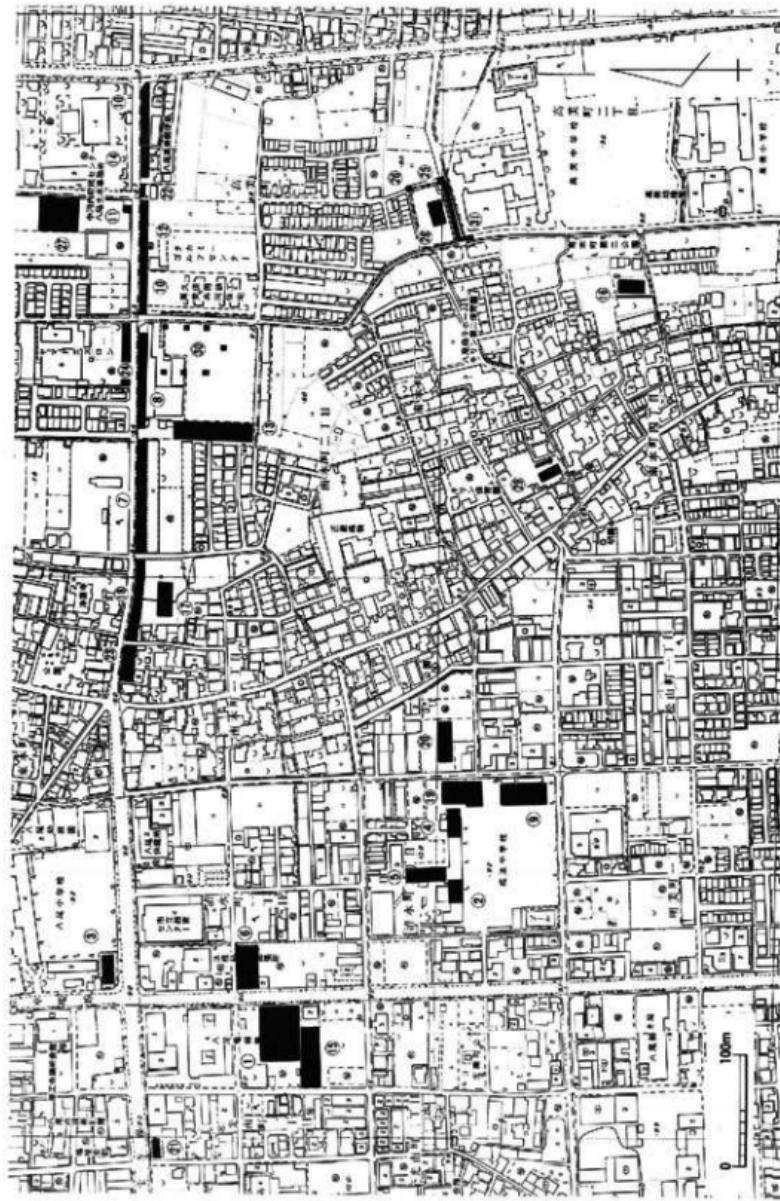
弥生時代後期から終末期では北東部⑭と北西部①⑮⑯で集落遺構が検出され、⑭⑯の溝や、⑯の土坑からは多量の土器が出土している。また⑪⑫では砂層から弥生時代後期頃の土器が出土している。

古墳時代前期庄内式期では、居住域としては①⑤⑦⑪⑯で溝・土坑等が、また墓域としては周溝墓が①⑦⑪⑯で検出されている。⑦のものは円形周溝墓と考えられており、当地域では他に類例のないもので、周辺の方形周溝墓との関連が注目されている。続く布留式期では⑧⑫で竪穴住居・掘立柱建物からなる居住域が確認され、庄内式期から布留式期には居住域が移動すると考えられている。また⑯では南東-北西方向に平行する溝が検出されている。布留式期の墓域は今のところ確認されていない。

古墳時代中期では北東部⑭⑯で竪穴住居等の居住域が検出され、東方の小阪合遺跡にも続くようである。墓域は不明であるが、⑯でこの時期の凹筒埴輪を転用した埴輪円筒棺1基が検出されている。

古墳時代後期では西部の①⑤で掘立柱建物、⑮⑯では溝・土坑等が検出されている。

飛鳥-奈良時代では④⑨⑯で掘立柱建物・井戸・土坑等が検出され、⑯の溝からは多量の土



第1図 成法寺遺跡調査地位置図 (S = 1 / 5000)

器が出上している。また祭祀関連遺物も多く、⑩の井戸から1点、⑪の埋没河川からは3点の墨書き上面器が、また⑫では土馬が出土している。

平安時代では⑬で後期に比定される上坑等が検出されている。

鎌倉時代では⑭⑮⑯で井戸等が検出され、⑯の東西方向の溝は屋敷地を区画する溝である可能性がある。⑯では、当該地が、立石街道が信貴街道に分岐する道沿いにあたることから、検出された溝が信貴街道の側溝である可能性が指摘され、その時期は鎌倉時代前半に遡るとされている。

室町時代では⑰で中期の遺構が検出され、その状況から当地は溝で囲繞された屋敷地であった可能性が高い。また中世頃のピットや農耕に関連する溝は⑯⑰で検出されている。

近世では西部の⑯で18世紀後半の建物、南に接する⑰では井戸等が、また⑱では陶磁器・銅錢・土人形等を埋納したピットが検出されている。遺跡北部中央にあたることから、西・東部で検出されている弥生時代～古墳時代の遺構はみられず、自然河川によって削平されているようである。そしてこの河川上面では、中世以降に集落が営まれるようになる。この河川は南北方向の流路をもち、遺跡中央を縱断していると考えられ、現在の地割りにも明瞭に影響を残しているものである。

番号	遺跡名・調査名	調査年月	調査主体	文 庫
①	成法寺	昭和26年7月～9月	市教委	「成法寺遺跡・八尾市光町丁目29号地の発掘調査」八尾市教育委員会 1983.3
②	成法寺	昭和34年8月	市教委	「八尾市西堀文化財発掘調査報告書 1980.8～1981年尾」八尾市教育委員会 1983.3
③	貯蔵	昭和34年3月	市教委	同 上
④	成法寺第1次(SH82-U)	昭和34年6月～7月	市教委・研究会	「成法寺遺跡」(附)八尾市文化財調査研究会報告33 1991
⑤	成法寺第2次(SH82-II)	昭和34年7月	研究会	同 上
⑥	成法寺	昭和34年7月	市教委	「八尾市西堀文化財発掘調査報告書」八尾市教育委員会 1983.3
⑦	成法寺	昭和34年11月～12月	府政委	「成法寺遺跡発掘調査報告書・1」大阪府教育委員会 1986.3
⑧	成法寺	昭和34年7月～10月	市教委	「成法寺遺跡発掘調査報告書・2」大阪府教育委員会 1987.3
⑨	成法寺第3次(SH87-3)	昭和34年5月～7月	研究会	「成法寺遺跡」(附)八尾市文化財調査研究会報告33 1991
⑩	成法寺	昭和34年6月	市教委	同 上
⑪	木製箱35号(TG88-26)	昭和34年1月	研究会	「八尾市文化財調査研究会報告 1988年度」(附)八尾市文化財調査研究会報告16 1988
⑫	成法寺	昭和34年10月～12月	市教委	「成法寺遺跡発掘調査報告書・3」大阪府教育委員会 1988.3
⑬	成法寺第4次(SH88-4)	昭和34年11月～12月	研究会	「成法寺遺跡」(附)八尾市文化財調査研究会報告33 1991
⑭	成法寺	平成2年9月～10月	市教委	「成法寺遺跡発掘調査報告書・4」大阪府教育委員会 1990.3
⑮	成法寺第5次(SH89-5)	平成2年10月～11月	研究会	「平成2年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」(附)八尾市文化財調査研究会報告35 1992
⑯	成法寺第6次(SH90-6)	平成2年2月～3月	研究会	「成法寺遺跡」(附)八尾市文化財調査研究会報告33 1991
⑰	成法寺(90-256)	平成2年3月～4月	市教委	「八尾市内遷移平成2年年度発掘調査報告」八尾市教育委員会 1992.3
⑱	成法寺	平成2年5月～9月	市教委	「成法寺遺跡発掘調査報告書・5」大阪府教育委員会 1992.3
⑲	成法寺第7次(SH91-7)	平成2年8月～9月	研究会	今田報告
⑳	成法寺第8次(SH91-8)	平成2年9月～10月	研究会	今田報告
㉑	成法寺第9次(SH92-9)	平成2年10月～11月	研究会	「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書・6」(附)八尾市文化財調査研究会報告36 1993
㉒	成法寺第10次(SH92-10)	平成2年1月	市教委	「成法寺遺跡発掘調査報告書・7」大阪府教育委員会 1991.3
㉓	木製(TG93-1)	平成3年7月～6年1月	市教委	同 上
㉔	成法寺第11次(SH92-10)	平成3年11月	研究会	「附記近八尾市文化財調査研究会報告42」(附)八尾市文化財調査研究会報告42 1994
㉕	成法寺第12次(SH92-11)	平成3年1月	研究会	「成法寺遺跡発掘調査報告書・8」(附)八尾市文化財調査研究会報告42 1994
㉖	木製第42次(TG93-42)	平成3年12月	研究会	「平成3年度」(附)八尾市文化財調査研究会報告42 1994
㉗	成法寺第13次(SH93-12)	平成4年9月	研究会	「附記近八尾市文化財調査研究会報告42」(附)八尾市文化財調査研究会 1994
㉘	成法寺第13次(SH94-13)	平成4年4月	研究会	「平成4年度」(附)八尾市文化財調査研究会報告42 1995
㉙	成法寺第14次(SH94-14)	平成4年8月	市教委	「八尾市内遷移平成4年度発掘調査報告書」八尾市教育委員会 1995.3
㉚	成法寺第14次(SH94-14)	平成4年11月～7年1月	研究会	今田報告

調査作業：市教委＝八尾市教育委員会 市教委＝大阪府教育委員会 研究会＝当該調査研究会

表1 成法寺遺跡調査一覧表

第2章 調査経過

平成2年、八尾市長山脇悦司氏から、八尾市清水町2丁目2-5に所在する八尾市立成法中学校のプール建設の届出書が、八尾市教育委員会文化財室（現文化財課）に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたり、周辺の調査成果からも発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

今回の調査は、同中学校敷地内での5度目の調査にあたり、既往の調査成果から古墳時代・奈良時代の集落域の拡張が予想された。

こうして調査を開始したが、調査の中盤、井戸・掘立柱建物といった飛鳥～奈良時代の集落遺構が検出され、これを一般に公開する目的で、平成3年8月25日、現地見学会を開催した。当日は発掘調査の作業状況を公開し、約120名の見学者が来訪した。



現地見学会（平成3年8月25日）

第3章 調査概要

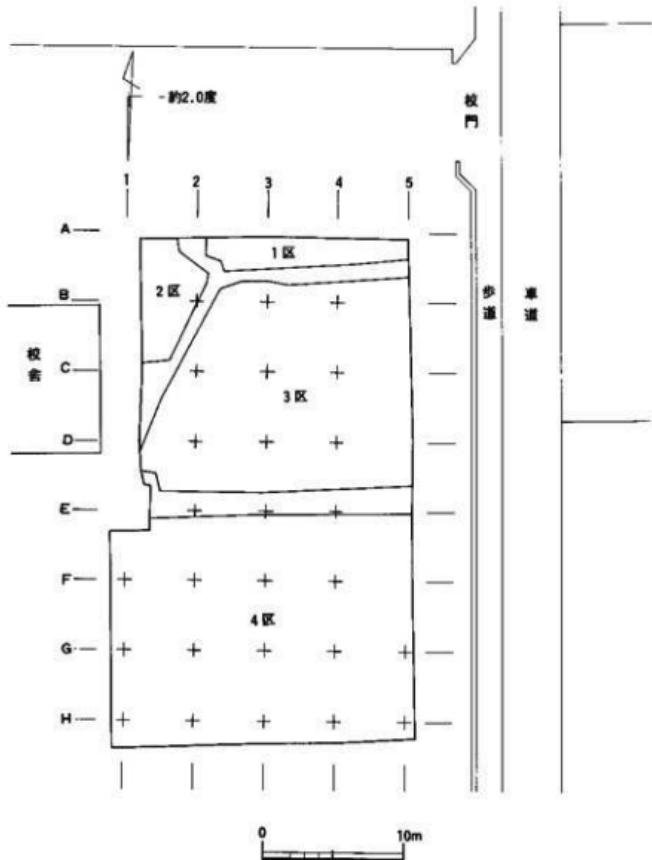
第1節 調査方法

調査においては、機械掘削を開始した段階で、調査対象地内に水道管等の既設埋設物数本の存在が判明した。協議の結果この撤去是不可能であり、この部分を畦状に残しての調査となつたため、調査区は四分割されることになり、とくに北部の調査区平面形は不定形なものになつている。

地区名は北から1～4区とした。調査は南部の4区と北部の1～3区とに分け、調査進行状況に応じて交互に実施することとし4区から着手した。

調査は4区で現地表下約1.2m、1～3区では4区の状況を参考に約1.6mまでを機械掘削とし、以下の0.3m～0.6mを人力掘削により実施した。また調査終了後、調査区南西角を機械により深掘りし、下層の堆積状況を断面で確認した。

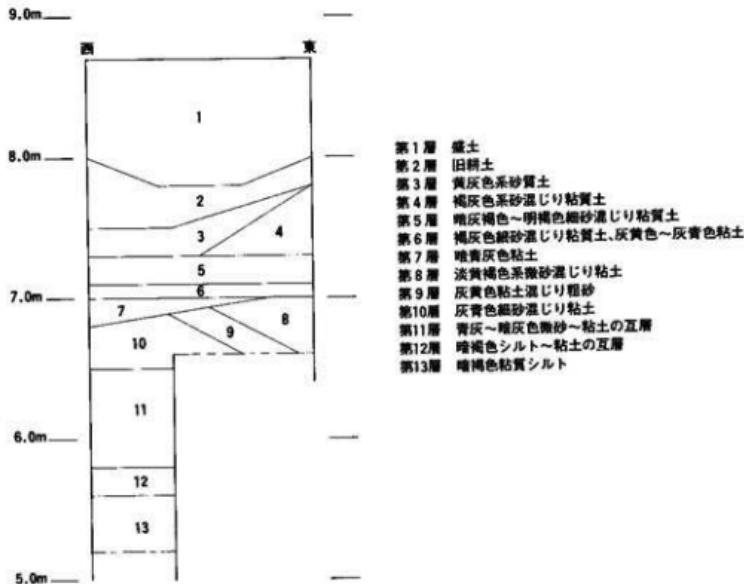
地区割は、調査区平面形に合わせて5m方眼を任意に設定した。そして南北ラインに数字（西から1～5）、東西ラインにアルファベット（北からA～H）を冠し、地区名は北西交点番号に代表させた。なおこの方眼の南北ラインは北から西に約2.0度振っている。



第2図 地区割図 ($S = 1/400$)

第2節 基本層序

第1層は校庭造成時の盛土、第2層は旧耕土である。第3層は中世～近世の遺物を含んでおり、整地層と考えられる。北壁にはみられない。第4層は中世までの遺物を含んでいる。ほぼ第3層・第4層の上面が第1次面で、標高は約7.5mを測る。第5層は北西部の2区では黄灰色系の粘土となっている。主に飛鳥時代の遺物を含んでおり、この上面が第2次面で、標高は約7.3mを測る。第6層は3区西部では褐色系細砂混じり粘質土のほぼ安定した堆積がみられるが、他では灰黄色～灰青色粘土が複雑に堆積している。飛鳥時代までの遺物を含んでおり、この上面が第3次面で、標高は約7.1mを測る。第5・6層にみられる灰黄色～灰青色粘土は整地に伴うものと考えられる。第7層は調査区南西部にみられ、古墳時代後期～飛鳥時代の遺物を多く含んでいる。第8～10層上面が第4次面で、標高は7.0m～6.8mを測る。第8層以下は粘土～砂の互層となっており、遺物は出土していない。河川の堆積と考えられ、ほぼ溝水していた状況が窺える。なお第11層以下は調査区南西角の下層確認による。



第3図 基本層序 ($S = 1/40$)

第3節 検出遺構と出土遺物

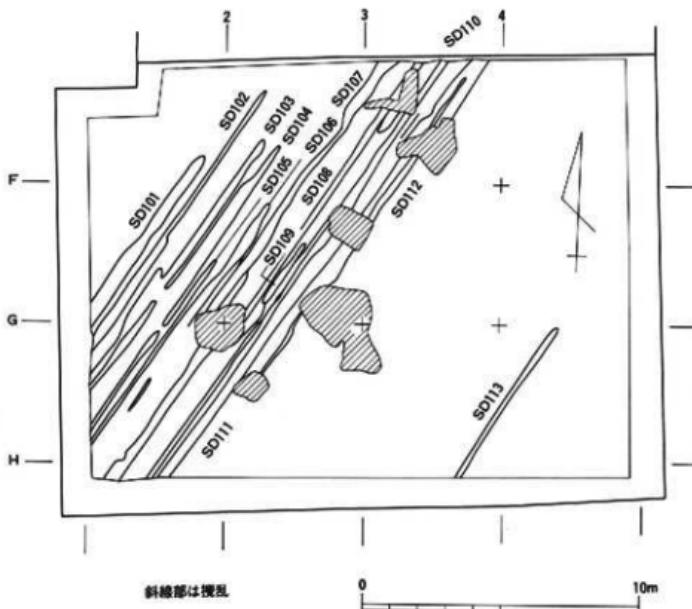
4区では4面の遺構面（第1～4次面）を確認した。また1～3区ではこのうち第3・4次面を調査した。このため平面図は、第1次面については4区のみとなっている。なお1～3区の第3次面については、4区での第2次面に相当する遺構も含んでいる。また第4次面まで掘り下げた段階で検出したピット等のうち、出土遺物等から本来上面からの遺構と判断されるものがあり、これらは第3次面の遺構としている。

各遺構面の時期は出土遺物等から判断して、第1次面—近代、第2次面—奈良時代～中世、第3次面—飛鳥～奈良時代、第4次面—古墳時代前期（布留式期）に比定される。

なお飛鳥～奈良時代の土器についての記述は、次項「II 第8次調査 第2章第5節」の分類に準じている。

（第1次面）

4区で検出したが、西部では第3層上面（第2層旧耕土直下）で、東部は西部に機械的にレベルで合わせ、第3・4層をやや削平した段階で検出した遺構である。



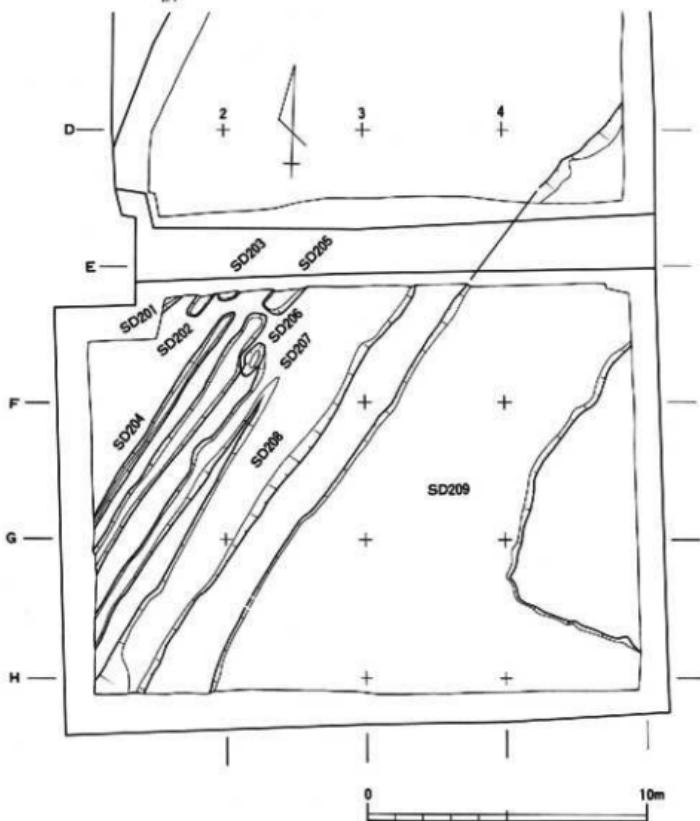
第4図 第1次面平面図 ($S = 1/200$)

北東—南西方向に平行にのびる溝13条（SD101～113）を検出した。溝の方向は北から東に約33度振っている。溝の全部の掘削は実施していないが、断面は逆台形で、幅20cm～50cm・深さ5cm～10cmを測り、埋土はいずれも灰黄色細砂混じり粘土の単層である。SD101～112は西半部に密集しており、間隔は20cm～90cmを測る。SD112と113の間隔は約7.5mである。

これらは農耕に関連する溝と考えられ、時期は層位的に、また出土遺物からも、ごく近代と考えられる。

第3層出土遺物（1～4）

1はミニチュア瓦器羽釜で、足釜と思われる。2は中国製白磁碗、3は14世紀代に比定される備前すり鉢である。4は灰釉輪で、底部無釉、高台は貼り付けによる。



第5図 第2次面平面図 ($S = 1/200$)

〈第2次面〉

4区で調査を実施し、北東-南西方向に平行に伸びる溝9条（SD 201～209）を検出した。

SD 201～208

溝の方向は第1次面のものと同様であり、またSD 101～112と重複する位置関係にある。

このことから第1次面のSD 101～112はこのSD 201～208の上を整地した後に掘り直された溝と捉えることもできる。

SD 201～203・206は、全容が不明であるが一応溝の痕跡とした。SD 207とSD 208は、北部では合流し、一条の溝となっている。

溝の断面はほぼ逆台形で、幅20cm～50cm・深さ5cm～10cmを測り、法量等は表2にまとめた。埋土は、SD 201～205が灰黄色砂質土、SD 207が淡褐色砂質土、SD 208は上層暗灰黄色細砂混じり粘質土・下層暗灰褐色細砂混じり粘質土である。

出土遺物は少量で、SD 202・208から中世墳までの土器片が出土しているが、図化しえるものはなかった。

SD	201	202	203	204	205	206	207	208
幅	—	47	80	38	68	60	65	183
深さ	19	16	11	14	14	20	8	15
間隔	40	—	—	40	—	—	0～70	(cm)

表2 第2次面溝（SD 201～208）法量表

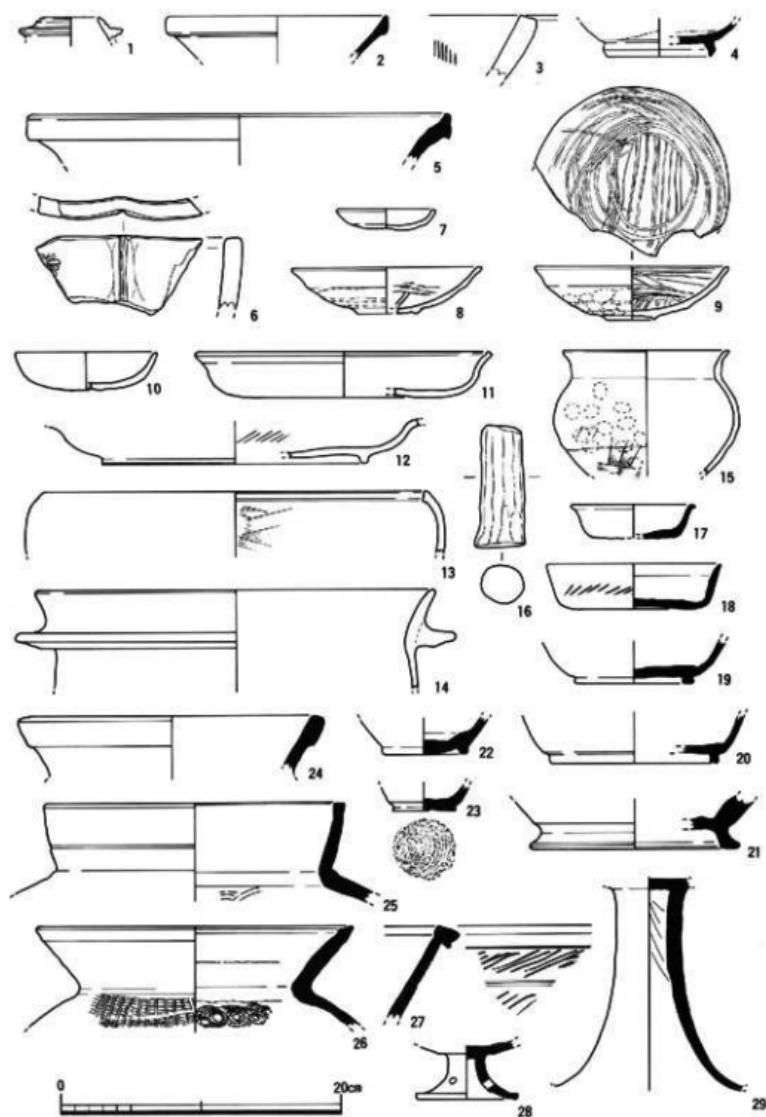
SD 209

3区南東部に續き、検出長約26m・幅約6mを測る。南部では東岸が東方に屈曲しており、南端では幅15m以上となる。方向はSD 201～208とはほぼ一致しており、SD 208との間隔は約1.3mを測る。深さ20cm～50cmを測り、底部のレベルは北部がやや低くなっている。埋土は上層が灰褐色砂混じり粘質土、中層が灰色系の細砂～粗砂、下層が明灰黄色粘土である。また両肩部付近には褐色系粘土が堆積する。下層の上面では砂の堆積する小穴やくぼみが、特に南部において多数認められた（図版1）が、これがロードキャストと呼ばれる現象であろうか。

出土遺物（30～40）には、古墳時代前期（布留式期）・後期、飛鳥時代、奈良時代のものがある。須恵器杯身（31～33）は底部外面灰かぶりで、33は自然釉が溜る。34は平瓶の可能性が高い。壺（35）は底部回転糸切りによるもので、奈良時代末以降のものであろう。壺A d（36）は焼成時の変形が著しい。

土師器杯B b（39）は飛鳥杯Cにあたるもので、径高指数は約34を測る。内面の暗文は不明である。底部外面に黒斑を有する。

小型壺（40）は、口縁部～体部外面ヘラミガキ、底部外面ヘラケズリと思われる。古墳時代



第6図 第3・4層出土遺物 (S = 1/4)

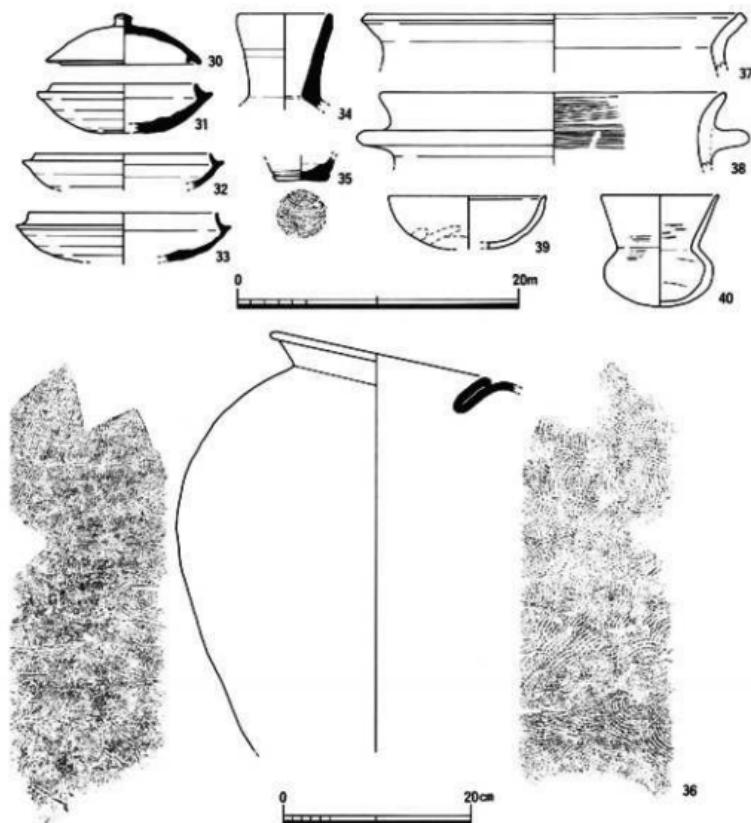
前期（布留式期古相）に比定される。

なおSD209が第3次面SE301を避けるように屈曲していることは、意図的なものとも考えられる。SD209が本来第3次面の造構で、長期にわたり機能していたため第2次面でも検出されたと捉えるのが妥当であろう。出土遺物からもそれが窺える。

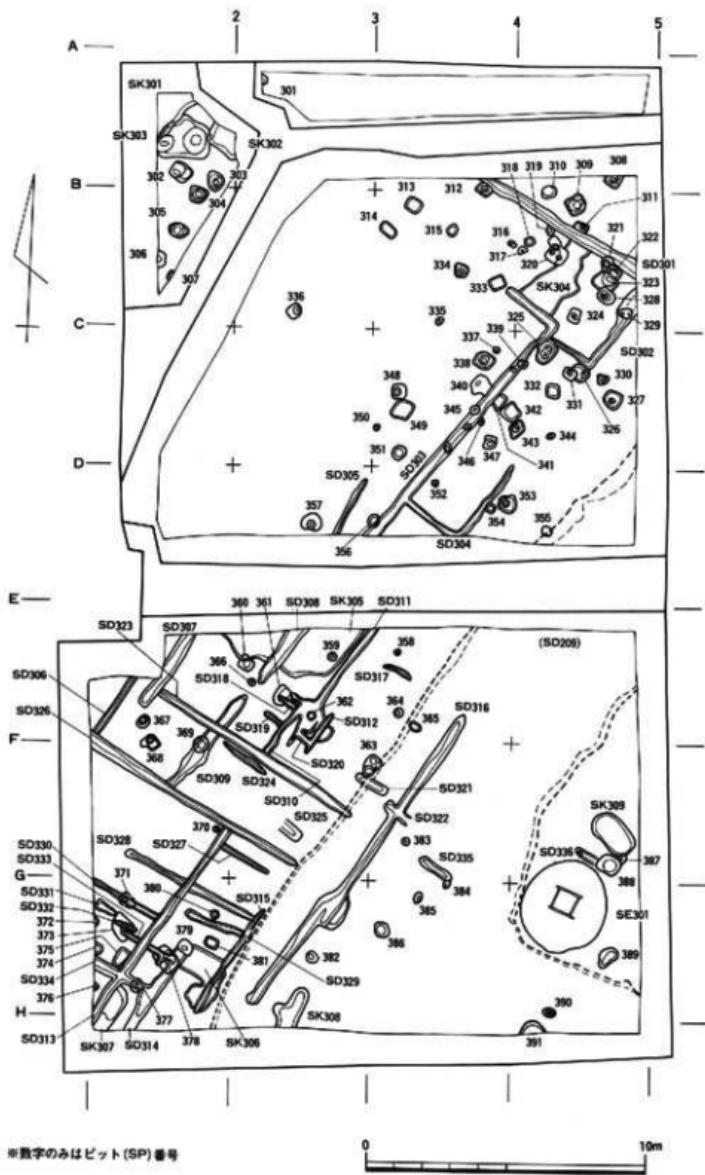
第4層出土遺物（5～29）

第2次面を覆う第4層からは、飛鳥時代～奈良時代の土器を主として、14世紀前半までの土器が出土しており、後者は第2次面の溝群廃絶の時期を示すものである。

5は東播系須恵器鉢。瓦器火鉢（6）は平面輪花状を呈し、外面に菊花文スタンプを施すも



第7図 SD209出土遺物（S=1/4, 1/6）



第8図 第3次面平面図 ($S = 1/200$)

ので、14世紀前半に比定されているものである。^註 瓦器碗（8・9）は内面に平行+渦巻き状暗文を施し、13世紀中葉～後半頃のものであろう。土師器杯B c（10）・皿A a（11）の暗文は不明である。11は底部外面をヘラケズリする。皿B a（12）は内面に一段の放射状暗文を施す。16は器種不明の土師器で、端部のみ火を受けたためか黒色を呈する。何かの支脚であろうか。須恵器杯身A（18）は口縁部外面に櫛による刺突文を巡らせる。形態から壺の蓋かもしれない。小型の壺（23）は底部回転糸切りによるものである。

〈第3次面〉

井戸1基（S E 301）・土坑9基（S K 301～309）・溝36条（S D 301～336）・掘立柱建物1棟（S B 301）・ピット91個（S P 301～391）を検出した。

4 F～G区に位置するS E 301他の遺構は、当初第2次面で検出しえたものである。

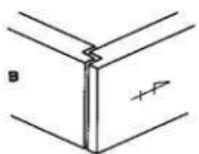
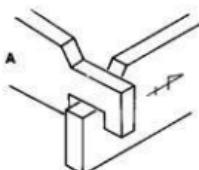
S E 301

4 F～G区で検出した。掘方平面形はほぼ円形で、直径約3.4mを測る。検出面からの深さは約1mを測る。井戸枠は方形横板組、いわゆる井籠組によるものである。^註 下から四～五段目までが遺存しており、五段目は四段目の外側に組まれている。平面規模は内法で最上段が一辺約75cm、最下段が一辺約65cmを測り、検出部の深さは約80cmを測る。

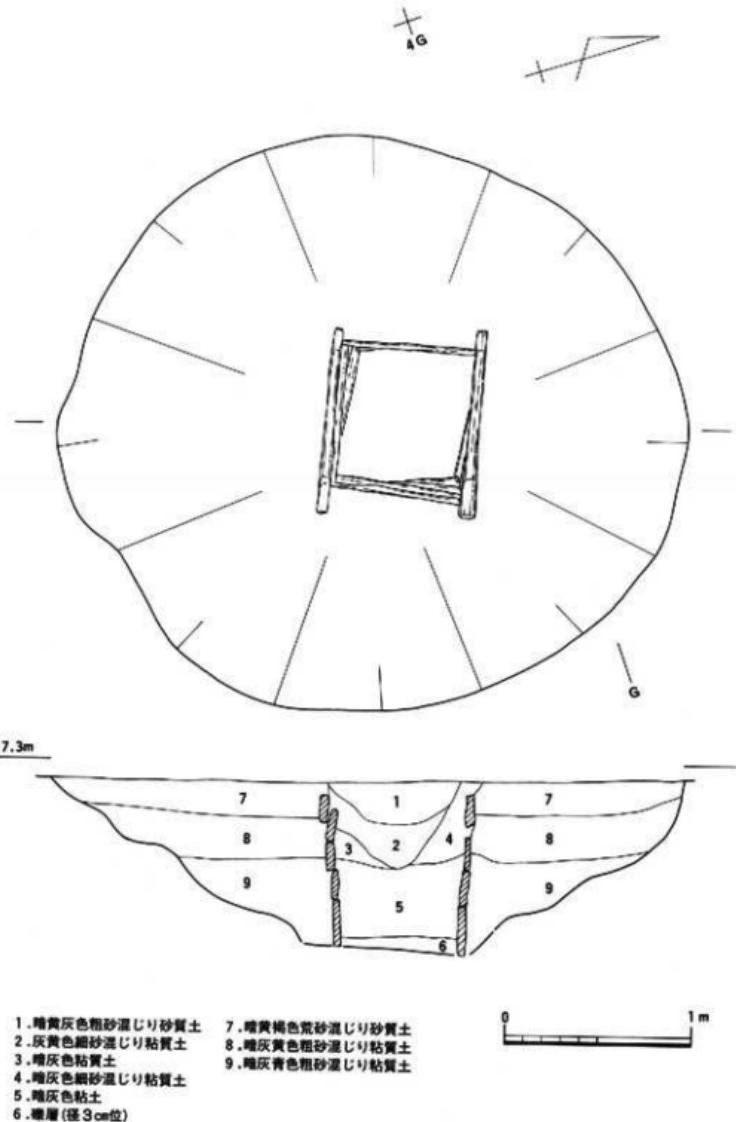
枠の角の組み合わせ部分については二種類の方法が採用されている（第9図、図版4下）。下から四段目までは両端内面に段をつけた板を用い、北辺・南辺を東辺・西辺で挟むように合わせている（B）。五段目は板の遺存が悪く明確ではないが、おそらく（A）のような組み合わせと考えられ、東辺・西辺の板上に北辺・南辺の板を置いている。^註

枠材の板は長さ75cm～100cm・幅12cm～26cm・厚さ1cm～4cmを測り、五段目の板が長い。四段目以下の両端内面の段の間隔は約72cmに統一されている。最下段には、幅が広く長さ80cm掘のものを使用している（41～44：東・西・南・北）。転用材も使用されており、枘穴を有するもの（49：南辺三段目）や、小穴（釘穴か？）を有するもの（50：東辺三段目）はおそらく建築材であったと思われる。

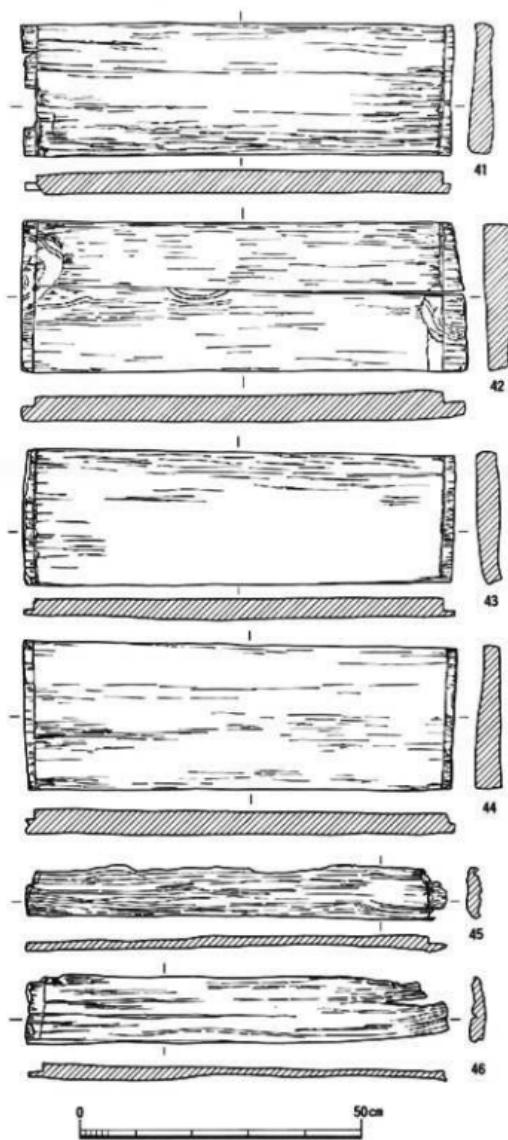
枠内埋土は上から暗黄灰色粗砂混じり砂質土・灰黄色細砂混じり粘質土・暗灰色粘質土・暗灰色粘土で、この下には径約3cmの礫が約10cmの厚さで敷かれている。掘方埋土は上から暗黄褐色粗砂混じり砂質土・暗灰黄色粗砂混じり粘質土・暗灰青色粗砂混じり粘質土である。



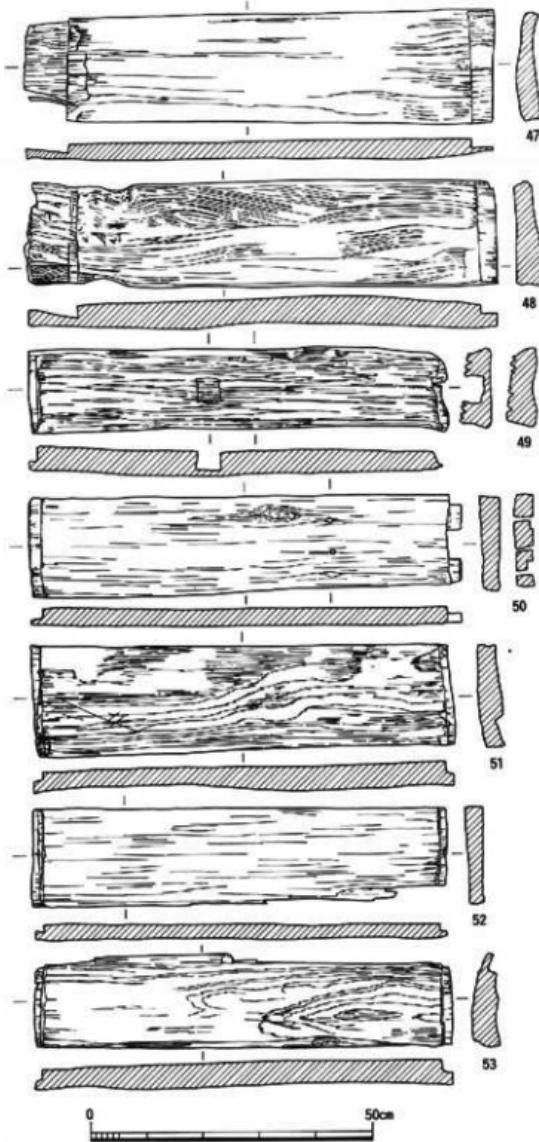
第9図 S E 301枠組み模式図



第10図 S E 301平・断面図 ($S = 1/30$)



第11図 S E 301枠板① (S = 1/10)



第12図 S E 301枠板② (S = 1 / 10)

出土遺物は少量で、圓化したものも少ない。井戸枠内のものには土師器坏B b (54)・須恵器平瓶 (55)などがある。54は暗文を施していない。これらは奈良時代初頭までに比定されるものである。また取り上げられなかつたがひょうたんが出上している。

掘方からは古墳時代後期頃の須恵器杯蓋 (56) の他、飛鳥時代頃に比定される土師器・須恵器片、古墳時代前期(布留式期)頃の土器 (57・58) が出土している。

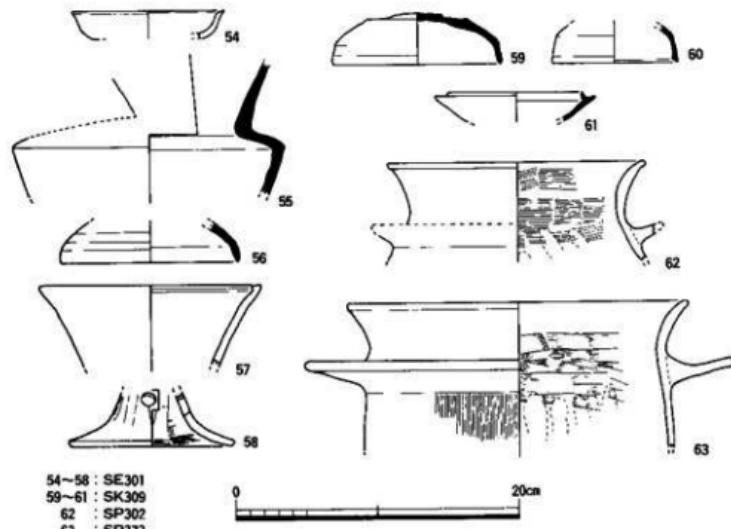
S K 301~309

S K 303はピットが重複したものであろう。S K 304・305・306・307は浅い落ち込み状を呈する。法量等は表3にまとめた。

出土遺物は少量で、S K 303から奈良時代頃の土器片、S K 309から古墳時代後期～飛鳥時代に比定される須恵器杯 (59～61) が出土している。杯蓋 (59) は天井部外面ヘラ切り未調整である。

S D 301~336

北東～南西方向のものと、これらにはほ直交する方向のものがあり、また直角に屈曲するものもみられる。切り合いの認められるものもある。規模は幅20cm～50cm、深さは約10cmまでのものが多い。断面逆台形・皿状で、埋土はいずれも灰褐色細砂混じり粘質土である。法量等は表4にまとめた。



第13図 第3次面遺構出土遺物 (S = 1/4)

S K	地区	平面形	法量	深さ	備考	(cm)
301	1 A	不明	205×120以上	9		
302	1 A	不明	156×85以上	11		
303	1 A	不定形	198×157	20	S K301・302に切られる	
304	4 B	不定形	276以上×130	10	S D301・303に切られる	
305	2 E	不定形	508×173以上	21	S D308に切られる	
306	1 G	不定形	210×152以上	8	S D315に切られる	
307	1 G～H	不定形	178以上×59以上	17	S D313に切られる	
308	2 G～H	溝状	147以上×60	15		
309	4 F	長円形	177×99	40	59～61出土	

表3 第3次面土坑(S K 301～309) 法量表

S D	地区	検出長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	備考
301	3 A～4 B	6.3	46	9	
302	4 B～4 C	3.1+1.8	28	7	直角に屈曲。S D303に切られる
303	4 B～2 D	2.3+9.9	39	10	直角に屈曲
304	3 D	3.2+2.0	24	5	直角に屈曲。S D303と接続
305	2 D	2.3	21	8	
306	1 E	2.5	20	4	S D326に切られる
307	1 E	3.1	49	13	
308	2 E	2.4	49	15	S D303と接続?
309	2 E～1 F	4.3	48	12	S D323に切られ、S P369を切る
310	2 E～2 F	2.4	24	5	S D323に切られる
311	3 E～2 F	5.4	26	5	
312	2 E～2 F	1.7	24	7	
313	1 F～1 H	8.7	33	10	S D333と接続
314	1 G～1 H	3.5	44	11	S D332・333と接続
315	2 G～1 G	4.6	25	6	
316	3 E～2 G	13.0	45	6	S D322と接続
317	3 E	1.1	18	3	
318	2 E	0.8	22	6	S D310に切られ、S P361を切る
319	2 E	0.8	20	8	S D310に切られる
320	2 E	0.5	29	6	S D312と接続
321	2 F～3 F	1.2	36	27	
322	3 F	1.1	35	9	S D316と接続
323	1 E～2 F	8.1	41	8	S D307に切られる
324	1 F～2 F	1.9	24	8	
325	2 F	0.8	43	18	
326	1 E～2 F	8.6	41	13	S D306・309・313を切る
327	1 F～2 F	1.9	19	7	S D313に切られる
328	1 F～2 G	5.2	28	12	S D313に切られる
329	1 G～2 G	2.2	28	12	S D315に切られる
330	1 G	2.7	25	10	S D313に切られ、S P371を切る
331	1 G	0.9	25	13	
332	1 G	0.9	20	13	
333	1 G	1.9	21	13	S D313に切られ、S P378を切る
334	1 G	2.0	41	10	S D313と接続し、S P377を切る
335	3 F	1.4	30	23	
336	4 F	0.9	29	9	S P388に切られる

表4 第3次面溝(S D 301～336) 法量表

ピット

調査区の全域に分布しており、特に3区東部が密で、1区と3区西部では希薄である。平面形は、方形・円形・不定形に分けられる。

埋土は灰黄色系粘質土～粘質シルトで、S P 340・349は炭を多く含んでいる。

S P 320には3か所、S P 325には2か所の柱痕が認められる。またS P 321～323・328のように切り合っているものもあり、これらは柱の立て替えによるものであろう。

掘立柱建物を構成するようなピットの配置はS P 323～S P 327の一ヶ所が確認できた。他にS P 360～S P 363は建物と同じ方向に一列に並ぶもので、何らかの関連が考えられる。法量等は表5にまとめた。

ピットからの出土遺物は少量で、岡化したのはS P 302からの62、S P 373からの63の2点の羽釜である。62は体部最大径が口径を凌ぐもので、鍔はやや上向きに伸びる。時期は7世紀前半までに比定されよう。63は7世紀後半以降通例にみられる形態で、長めの鍔を有する。両方とも牛駒山西麓の胎土のものである。^{註6}

S P	地区	平面形	掘方法量	柱部径	深さ	備考 (cm)
301	2 A	円形	28以上×23		6	
302	1 A	方形	76×58	55×45	26	62出土
303	1 A	不定形	73×64	36×32	28	
304	1 B	方形	60×58	44×38	22	
305	1 B	円形	75×53	50×42	28	
306	1 B	円形	67×30以上		25	
307	1 B	円形	38×18以上		14	
308	4 A	方形	55×40以上	28以上×21	26	
309	4 B	方形	69×65	58×41	30	
310	4 A～B	円形	54×44		35	
311	4 B	方形	52×32以上	22×14	14	S D 301に切られる
312	3 A～B	方形	54×43	25×22	19	S D 301に切られる
313	3 B	方形	58×52		12	
314	3 B	長方形	67×40		11	
315	3 B	不定形	51×37		9	
316	3 B	不定形	31×20		24	
317	4 B	不定形	36×25		20	
318	4 B	方形	38×33		16	
319	4 B	円形	32以上×31		16	S D 301に切られる
320	4 B	方形	71×68	25×20	21	柱根部3か所
321	4 B	円形	52以上×43	34×26	43	S D 301を切る
322	4 B	方形	48×31以上	43×21以上	34	S P 321を切る
323	4 B	方形	81×70	48×43	37	S P 322を切る
324	4 B	方形	51×40	28×18	6	
325	4 C	不定形	92×63以上	47×31	32	柱根部2か所
326	4 C	方形	67×59	26×19	27	S D 302に切られる
327	4 C	方形	62×61	19×15	16	
328	4 C	方形	64×49	18×17	6	
329	4 C	不定形	49×34		24	S D 302に切られる
330	4 C	不定形	46×44	30×25	23	
331	4 C	方形	48×35	21×20	26	S P 326を切る
332	4 C	方形	51×51		9	
333	3 B	方形	56×47		7	

表5 第3次面ピット法量表① (S P 301～333)

S P	地区	平面形	掘方法量	柱部径	深さ	備考	(cm)
334	3 B	方形	54×52	27×26	37		
335	3 B	円形	32×25		28		
336	2 B	方形	53×48	29×28	27		
337	3 C	円形	26×24		16		
338	3 C	方形	65×60	34×25	37		
339	4 C	円形	38×36		8	S D 303に切られる	
340	3 C	不定形	67×43以上		43	S D 303に切られる	
341	3 C	方形	49×29以上		3	S D 303に切られる	
342	3 ~ 4 C	方形	60×58		46		
343	3 ~ 4 C	方形	55×48	32×28	24		
344	4 C	円形	30×23		4		
345	3 C	円形	33×31		17	S D 303を切る	
346	3 C	円形	29×21		11		
347	3 C	方形	49×45	45×33	6		
348	3 C	方形	55×50	40×30	24		
349	3 C	方形	72×65		15		
350	3 C	円形	24×21		16		
351	3 C	円形	54×47		46		
352	3 D	円形	27×24		3		
353	3 D	方形	65×60	27×23	32		
354	3 D	方形	33×32		8	S D 304を切る	
355	4 D	円形	36×34		15		
356	3 D	円形	51×45		22	S D 303に切られる	
357	2 D	円形	74×63	33×31	21		
358	3 E	円形	23×22		11		
359	2 E	円形	33×30		24	S K 305を切る	
360	2 E	方形	52×50		32	S K 305に切られる	
361	2 E	不定形	71×66		31	S D 318に切られる	
362	2 E	円形	35×34		3		
363	2 ~ 3 F	方形	42×40		12		
364	3 E	円形	22×19		15		
365	3 E	円形	45×33		15		
366	2 E	円形	27×25		31		
367	1 E	円形	51×39	32×27	25		
368	1 E ~ F	方形	54×45	29×25	10		
369	1 E ~ F	円形	60×52		22	S D 309に切られる	
370	1 F	円形	27×24		19		
371	1 G	円形	65×44		11	S D 330に切られる	
372	1 G	円形	38×14以上		15		
373	1 G	不定形	80×70		36	63出土	
374	1 G	円形	45×24以上		18		
375	1 G	不定形	72×41		13		
376	1 G	円形	32×17以上		17		
377	1 G	円形	50×44		27	S D 333に切られる	
378	1 G	方形	97×75		39	S D 332に切られる	
379	1 G	方形	54×48		23	S D 314を切る	
380	1 G	円形	34×30		21		
381	1 G	方形	52×41		13		
382	2 G	円形	50×44		30		
383	3 F	円形	30×30		28		
384	3 G	円形	36×27		23		
385	3 G	円形	47×32		28		
386	3 G	方形	58×50		26		
387	4 F	円形	38×35以上		32	S K 309に切られる	
388	4 F	方形	81×70		26	S P 387を切る	
389	4 G	不定形	87×50		13		
390	4 G	円形	50×34	35×20	20		
391	4 H	円形	100×48以上		8		

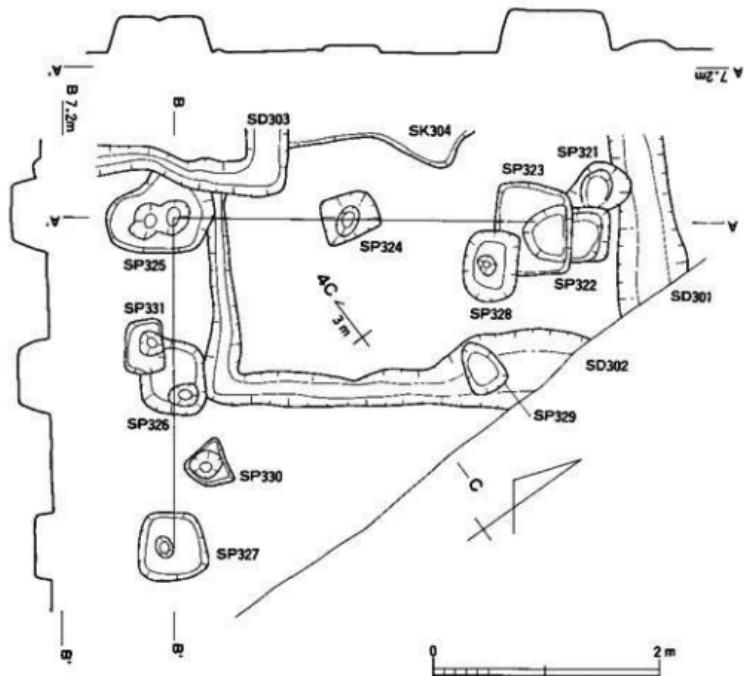
表 6 第3次面ピット法量表② (S P 334~391)

S B 301

4 B～C区で建物の西半部を検出した。S P 323～327で構成されており、規模は東西2間以上×南北2間以上で、柱間距離は東西方向約1.5m・南北方向約1.7mを測る。建物主軸は北から東に約37度振っており、これはS D 302・303等の溝にはほぼ平行するものである。

柱穴平面形は一辺40cm～70cmのほぼ方形で、深さ20cm～30cmを測る。柱穴埋土は主に、柱部が灰黄色細砂混じり粘質土、掘方が黄褐色～黄灰色の砂質土～シルトであり、S P 324の柱部埋土は灰黄色細砂である。柱穴から遺物は出土していない。

なお南側第3次調査で検出された3棟の掘立柱建物との距離は約45mを測る。これらの掘立柱建物はいずれも2間×2間の純柱で、主軸は北から東に約23度振るものであり、当建物とは方向にやや差がある。



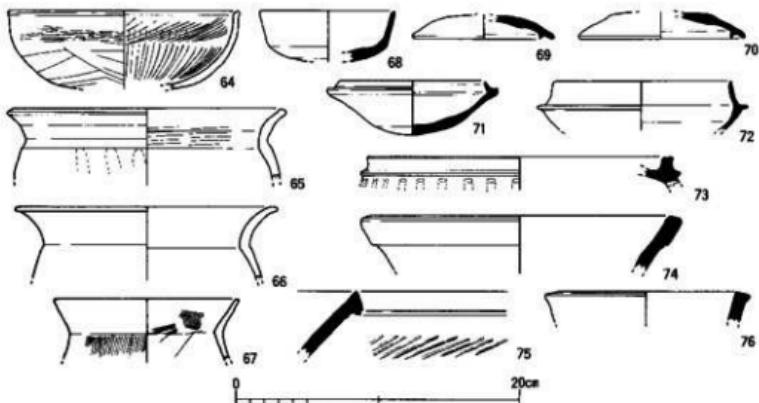
第14図 S B 301平・断面図 (S = 1 / 50)

第5層出土遺物

古墳時代後期～飛鳥時代の土師器（64～67）、須恵器（68～76）がある。

土師器杯B a（64）はb1手法によるもので、底部外面を5～6分割してヘラケズリし、内面には二段の放射状暗文を施す。径高指数は約35で、飛鳥IIの頃のものであろう。

須恵器杯壺A（70）は天井部外面に自然釉が溜る。円面鏡（73）は、圓足鏡に分類されるもので、長方形スカシを有する。壺E（75）は、口縁部外面にヘラ描き直線文を施す。76は器種不明であるが、鉢Fかもしれない。



第15図 第5層出土遺物（S=1/4）

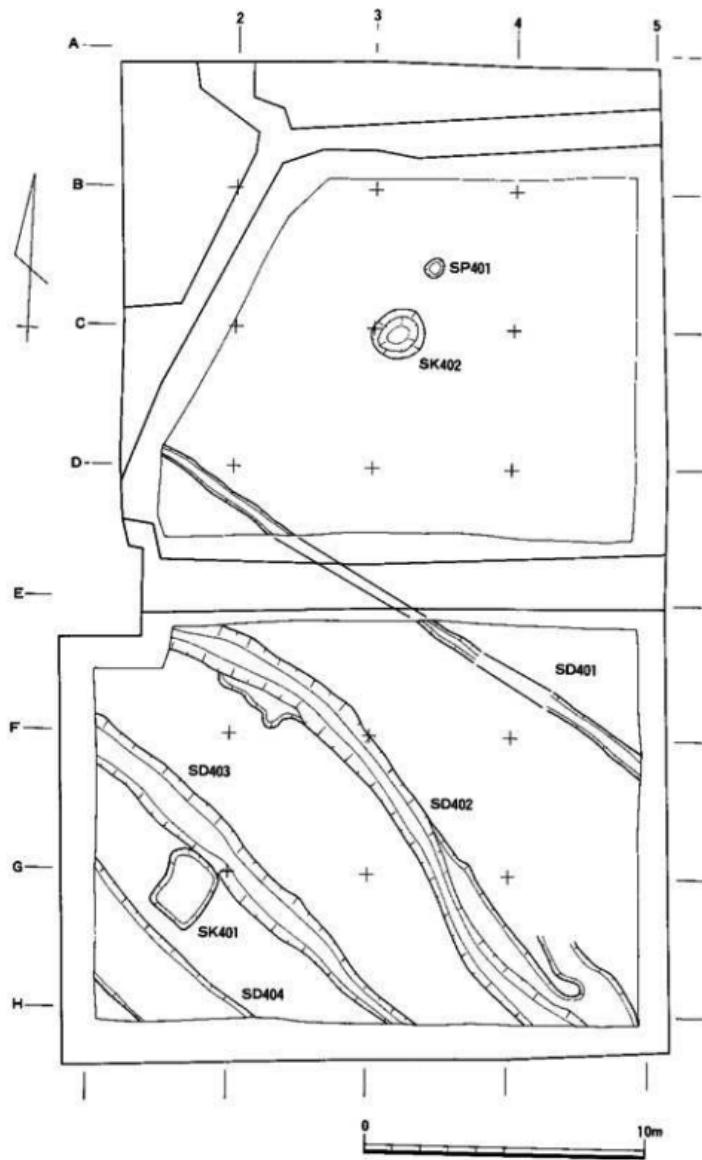
（第4次面）

土坑2基（SK 401・402）・溝5条（SD 401～405）・ピット1個（SP 401）を検出した。溝はいずれも北西～南東方向のものである。

SK 401・SD 402～404については、当初SD 402より南西側を落ち込みとして捉え掘削した（第7層）。そしてこの第7層を除去した段階で検出したのがこれらの遺構である。SD 402とSD 404の肩では20cm～30cmの比高差があり、南西部が低くなっている。

SK 401

1F～G区で検出した土坑で、SD 403を切っている。平面形は長方形に近いもので、規模は約2.4m×1.9m、深さ約20cmを測る。埋土は暗黄灰色細砂混じり粘質土で、上部には第7層が落ち込んで堆積している。



第16図 第4次面平面図 (S = 1/200)

遺物は須恵器横瓶(77)の他、古墳時代前期(布留式期)の土器片が出土している。77は口径12.3cm・復元器高27.6cm・長径34.3cm・短径24.9cmを測る。調整は外面平行タタキ後、粗に回転カキ目を加え、内面同心円タタキ、口縁部回転ナデである。

SK 402

3B～C区で検出した土坑で、平面形はほぼ円形を呈し、直径約1.8m・深さ約60cmを測る。埋土は上から暗灰褐色細砂混じり粘土・灰褐色細砂混じり粘土・灰黒色粘質シルト・灰青色粘質シルトで、中位に炭を多く含んでいる。形状から素堀り井戸である可能性がある。

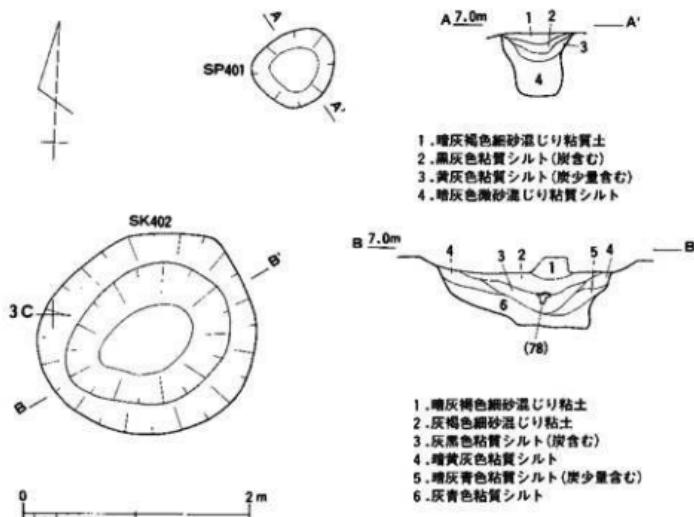
出土遺物は小片のみで、図化したものは高杯脚部(78)のみである。脚部外面にハケを施し、内面には指頭圧痕が残る。時期は古墳時代前期(布留式期新相)のものと考えられるが明確ではない。

SD 401

ほぼ直線的に伸び、規模は幅約30cm・深さ約15cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰褐色荒砂混じり砂質土である。遺物は出土していない。

SD 402

やや蛇行しており、規模は幅1m～1.5m・深さ約40cmを測る。底部のレベルは北西部がや



第17図 SK 402、SP 401平・断面図 (S = 1 / 50)

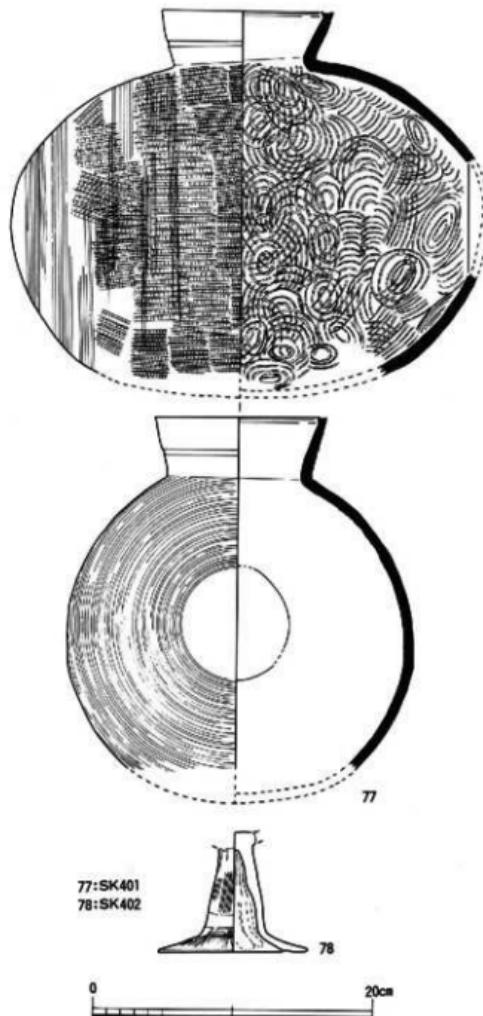
や低い。南部では溝が二又に分流したような状況がみられるが、この分流部分は深さ10cm未満で、溝のオーバーフローにより形成されたものであろう。断面逆台形を呈し、埋土は上から暗褐色荒砂混じり砂質土・暗灰褐色粗砂混じり粘質土・褐色細砂混じり粘質土・灰色細砂混じり粘土・灰青色粘土混じり粗砂で、下部に炭や焼土を多く含んでいる。

出土遺物には、古墳時代前期（布留式期新相）に比定される土器（79～120）の他、砥石（109・110）や板材がある。

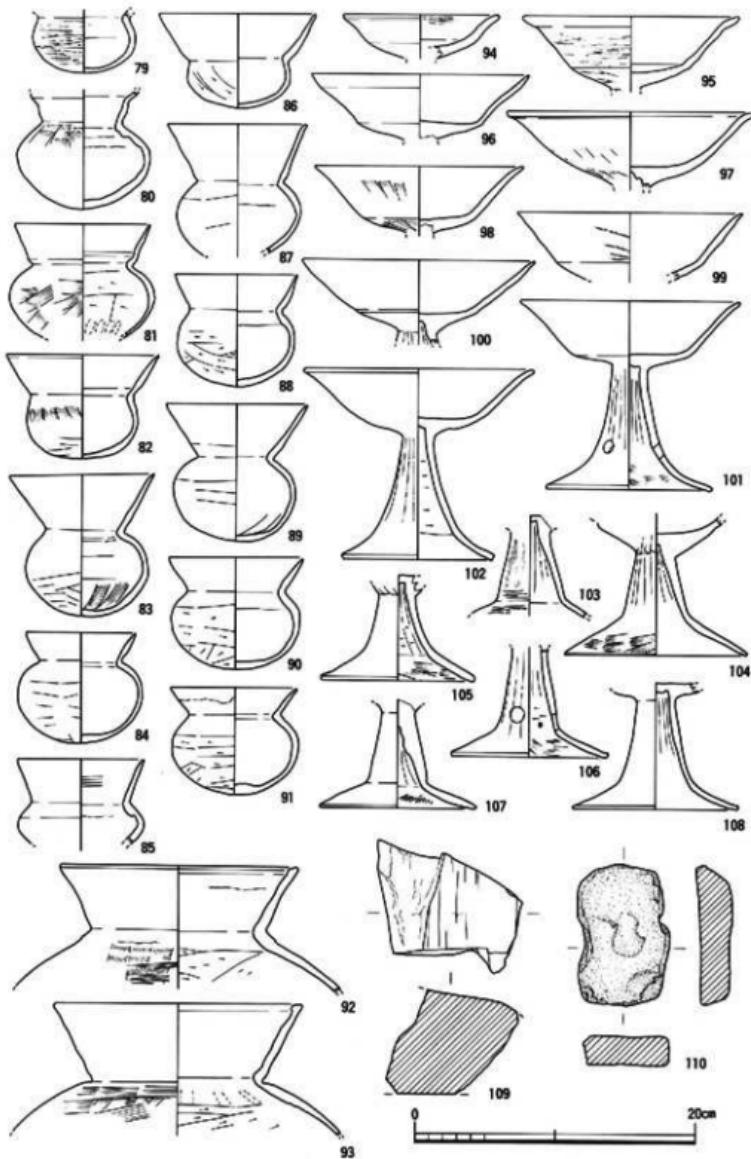
小型丸底壺（79～91）は体部外面ハケあるいはヘラケズリのものが多くを占める。横方向のヘラミガキのものは一点あり（79）、口縁部が屈曲する80も、ハケの後粗なヘラミガキを施している。

壺（92・93）は口縁端部が内側に肥厚し、内傾する端面を成すものである。

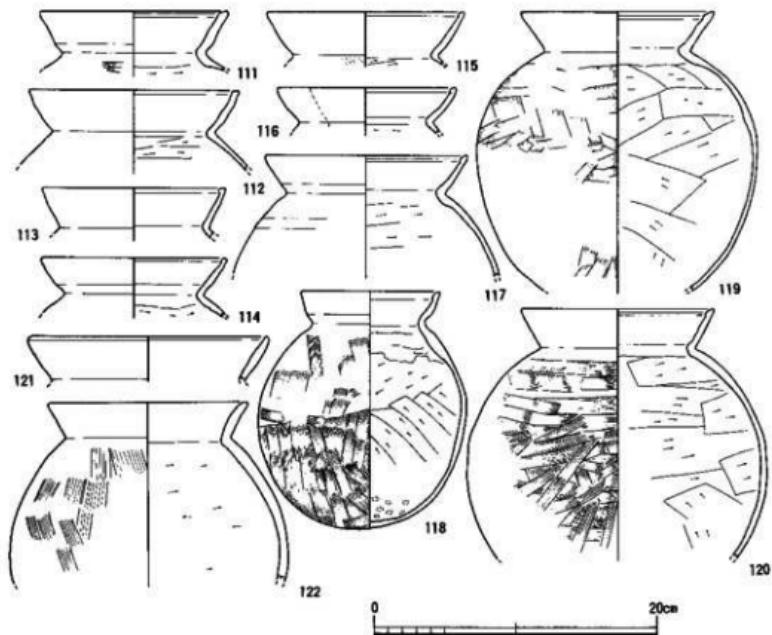
高杯は、杯底部と口縁部の境が屈曲して明瞭なもの



第18図 第4次面造構出土遺物 (S=1/4)



第19図 SD 402出土遺物① (S = 1 / 4)



第20図 SD 402出土遺物② (S = 1 / 4)

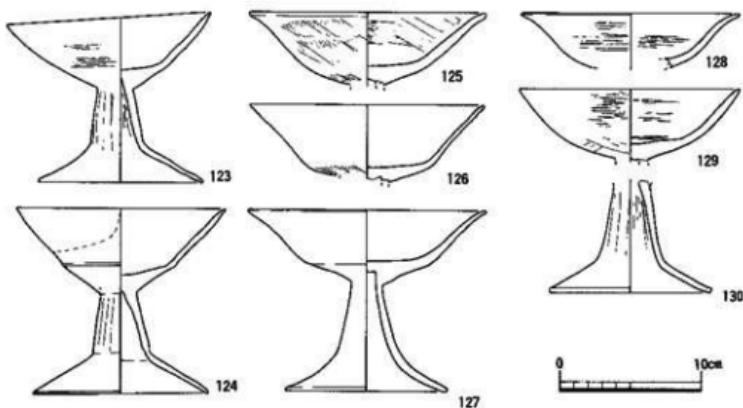
と不明瞭なものがあり、口縁部は直線的なものと外湾するものがある。調整は94の内外面、95・99・103の外面にヘラミガキが施され、他はハケあるいはナデで、95・100は杯底部外面をヘラケズリしている。脚柱部内面は横方向にヘラケズリするものが多い。107は裾部が歪んで変形している。

壺は口縁端部が内傾する面を成すもの（111・112）や、内側に肥厚するもの（113～120）、丸く収まるもの（121・122）がある。117は肩部に二条の沈線を巡らせてている。122は外面に縱方向の荒いハケを施す。

砥石は、109が上下面、110が片面及び側面に使用痕が認められる。110は砂岩。

S D 403

ほぼ直線的に伸び、規模は幅0.6m～1.6m・深さ約40cmを測る。底部のレベルは北西部がやや低い。断面逆台形を呈し、埋土は上層が暗灰黄色粗砂混じり粘土、下層が暗灰青色細砂混じり粘土である。遺物は出土していない。



第21図 SD 404出土遺物① (S = 1 / 4)

SD 404

ほぼ直線的に伸びる溝と考えられる。規模は、幅約2.7m・深さ約25cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰色粘土である。

出土遺物には、古墳時代前期（布留式期新相）に比定される土器がある（123～149）。器種構成は前述のSD 402出土土器とほぼ共通している。

高杯の調整は、128・129がヘラミガキ、123・125・126はハケを施している。124は黒斑を有する。

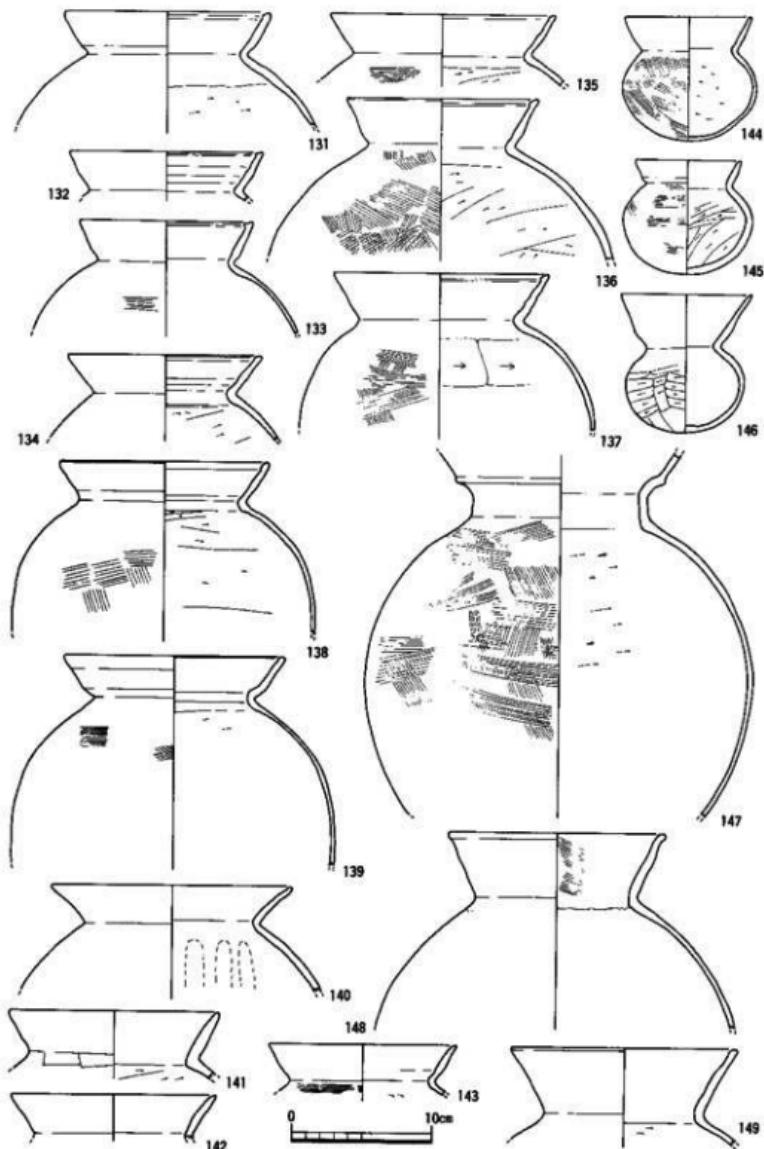
壺は口縁端部が内側に肥厚するもの（131～140）と、丸く収まるもの（141～143）がある。

小型丸底壺（144～146）は体部外面ハケあるいはヘラケズりである。

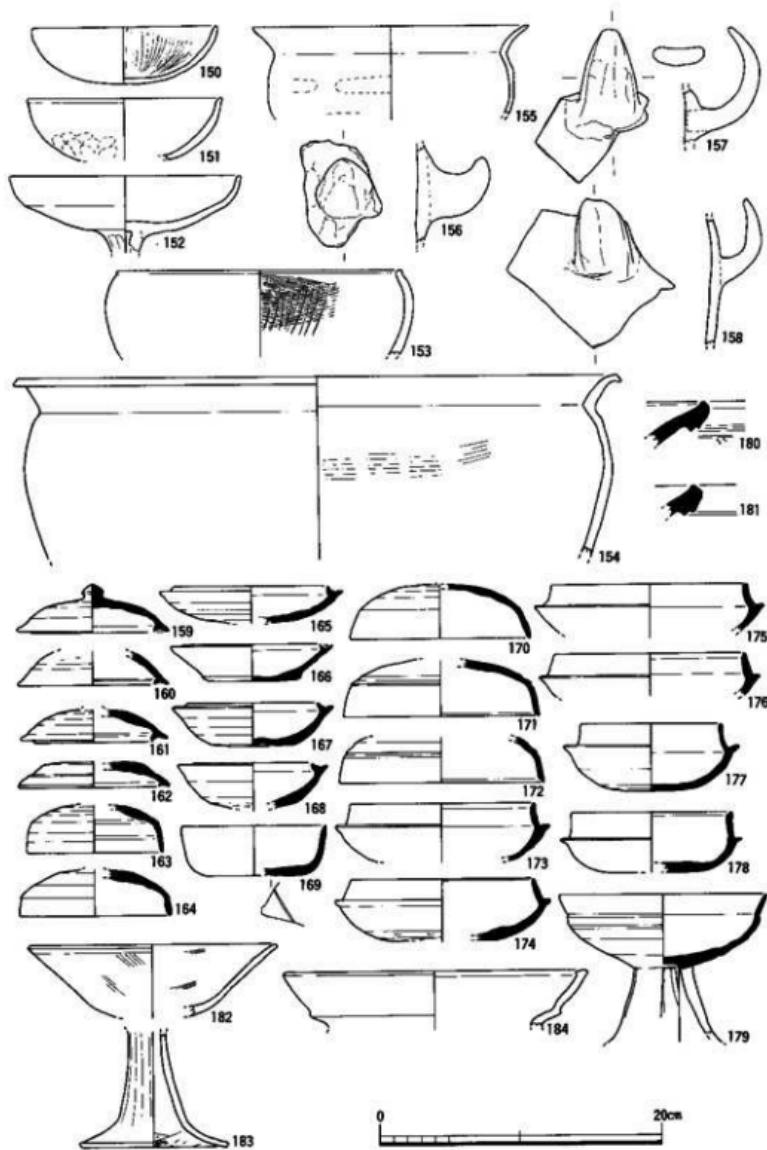
壺は、口縁端部が内側に肥厚するもの（149）と、端部付近で小さく外湾して丸く収まるもの（148）があり、147は複合口縁壺である。

SP 401

3B区、SK 402の北東約1.2mで検出したピットである。平面形は74cm×65cmの歪んだ円形で、深さは55cmを測る。断面逆台形で、埋土は上から暗灰褐色細砂混じり粘質土・黒灰色粘質シルト・黄灰色粘質シルト・暗灰色微砂混じり粘質シルトで、中位に炭を含んでいる。埋土の状況はSK 402に類似している。遺物は出土していない。



第22図 SD 404出土遺物② (S = 1 / 4)



第23図 第6・7層出土遺物 (S = 1/4)

第6・7層出土遺物

飛鳥時代のもの（150～169）と、古墳時代中期～後期のもの（170～179）があり、古墳時代前期（布留式期新相）のものも少量含まれている（182～184）。

飛鳥時代のものでは、土師器杯B c（150）は径高指数約31で、内面一段の放射状暗文を施している。底部外面に黒斑を有する。杯B a（151）・高杯B（152）の暗文は不明である。鉢D（153）は内面ハケ後放射状暗文を施し、外面はヘラミガキと思われる。156は竈の、157・158は瓶の把手と考えられ、157は挿入法によるものである。竈（156）は褐色のいわゆる牛駒西麓産の胎土である。須恵器杯類には、飛鳥杯H（165～168）、杯H蓋（163・164）、杯G（169）、杯G蓋（159～162）がある。160・167は焼成不良で淡灰色を呈する。169の底部外面にはヘラ記号がある。

古墳時代中期～後期のものには須恵器杯類がある。杯蓋（171）の内面中央には円弧タタキが残る。杯身（177・178）がやや古相を呈し、古墳時代中期に比定されるものである。高杯（179）は灰白色を呈する。

古墳時代前期（布留式期新相）のものには高杯（182・183）・複合口縁竈（184）がある。本来はS D 402・404に帰属する遺物であろう。

第4章　まとめ

今回の調査では、周辺の既往の調査と同様、古墳時代前期・飛鳥～奈良時代・中世の遺構・遺物を検出した。

古墳時代前期では布留式期新相の集落域が確認された。遺構としては溝群と土坑がある。溝からは多量の土器が出土しているが、土器の形式にはあまり時期差は認められず一括性の高いものであり、このことから一時的な集落であったことが窺える。土器の量に対して、溝以外の遺構は希薄なものであるといえる。これは古墳時代後期以降に削平・整地が繰り返し行われた結果であろうか。なお南側の体育馆建設時の第3次調査では、古墳時代前期の遺構は確認されていない。当調査地の第4次面は南部ほどやや標高が低くなっていることからも、この溝群が集落の南端を示すものかもしれない。

周辺では、当調査地の西側約60mに位置する校舎建築時に実施した第1次調査で、庄内式期新相の土坑1基・溝4条が検出されている。この溝群は、東西方向のものとやや北に振ったもので平行して伸びており、当調査地の溝群と規模や様相が類似している。時期的には隔りがあるが同様の性格をもつ溝と考えられよう。庄内式期から布留式期への移行にあたって、集落域が東に移動したのかもしれない。

飛鳥時代～奈良時代では、井戸1基・掘立柱建物1棟の他、多數のピットが検出された。第3次調査、第1次調査では掘立柱建物3棟・土坑等が検出されており、当時の集落の拡がりが確認された。掘立柱建物の方向には違いがあり、やや時期差のある可能性がある。

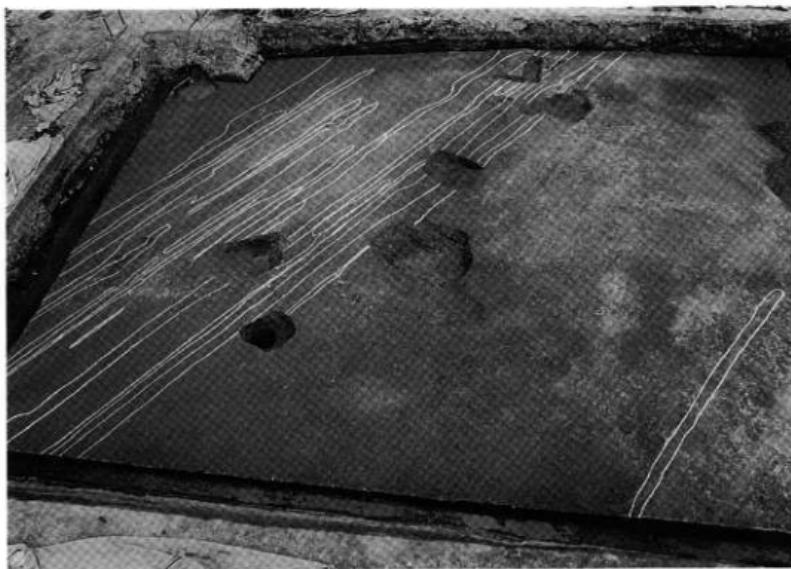
註

- 註1 萩野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌第3号』
- 註2 松田順一郎「足跡とは似而非なるロードキャストについて」(財団法人東大阪市文化財協会「東大阪市文化財協会ニュースVol. 6, No. 2」1994, 8)
- 註3 坪之内 徹「中世南都の瓦器・瓦質土器」(日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究VI』1990年12月)
- 註4 錦原豊一「平城京の井戸とその祭祀」(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1990)
- 註5 宇野隆夫「井戸考」「史林 65巻5号」1982年9月
Aの組み合わせ方は、宇野氏による分類のd類とe類の特徴を合わせたものと捉えられる。
- 註6 中西克宏「生駒山西宮の羽釜」(財団法人東大阪市文化財協会「東大阪市文化財協会ニュースVol. 4, No. 1」1988, 11)

参考文献

- ・(財)八尾市文化財調査研究会「成法寺遺跡」1991年(財)八尾市文化財調査研究会報告33
- ・大阪府教育委員会「神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・IV」1987年3月

図 版



4区 第1次面（南から）



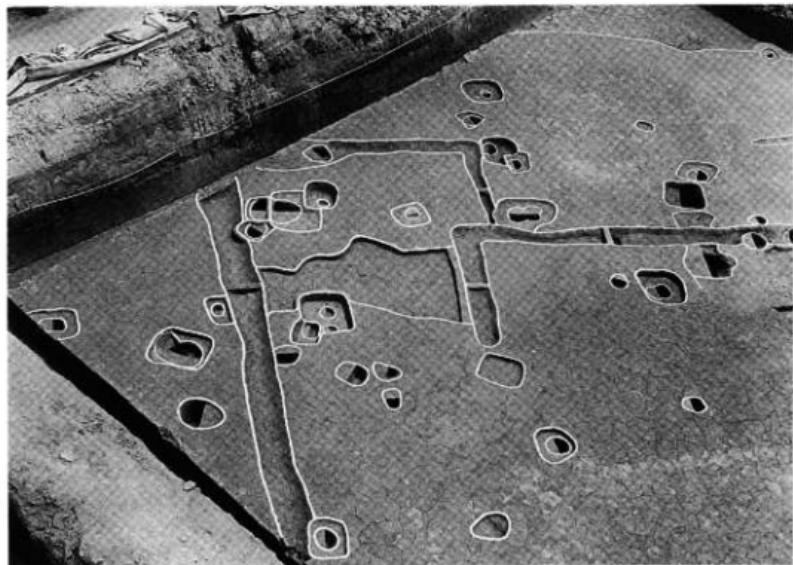
4区 第2次面（南から）



1～3区 第3次面（北から）



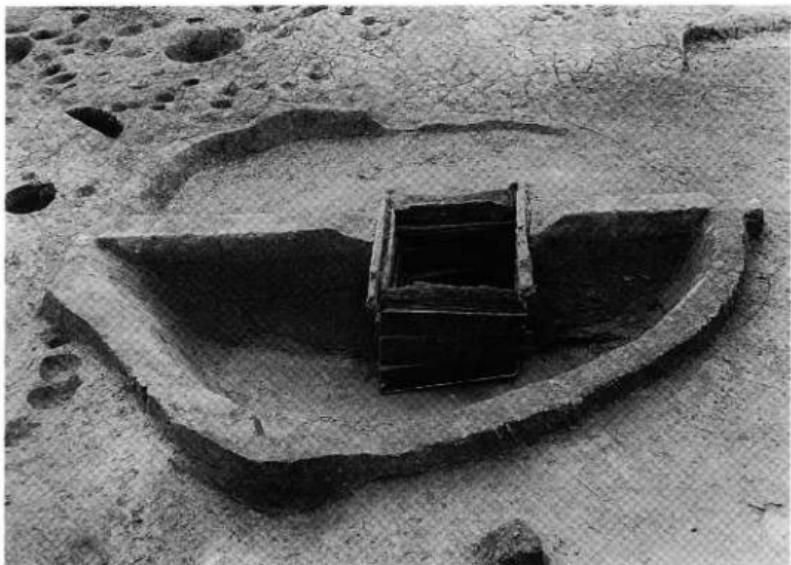
4区 第3次面（南から）



3区 第3次面S B301周辺（北西から）



4区 第3次面S E301（東から）



4区 第3次面S E301（東から）



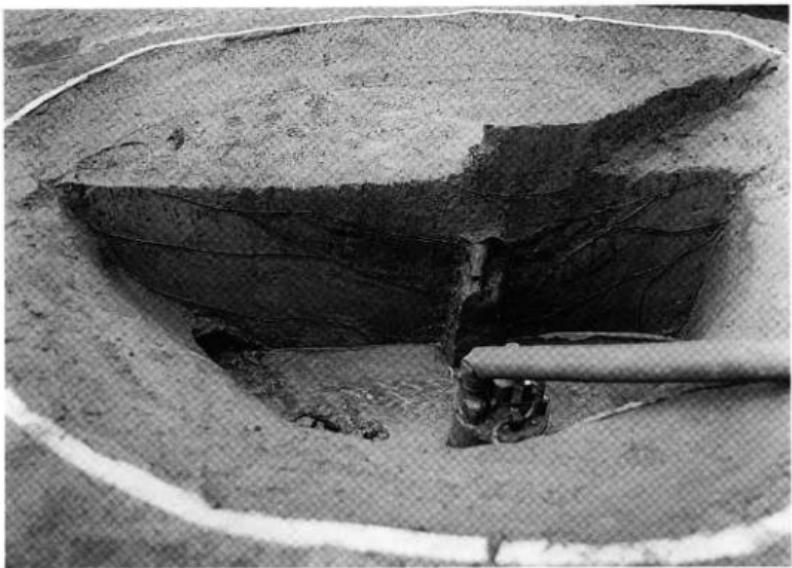
4区 第3次面S E301井戸枠（東から）



3区 第4次面（北から）



4区 第4次面（南から）



3区 第4次面 S K402北西壁



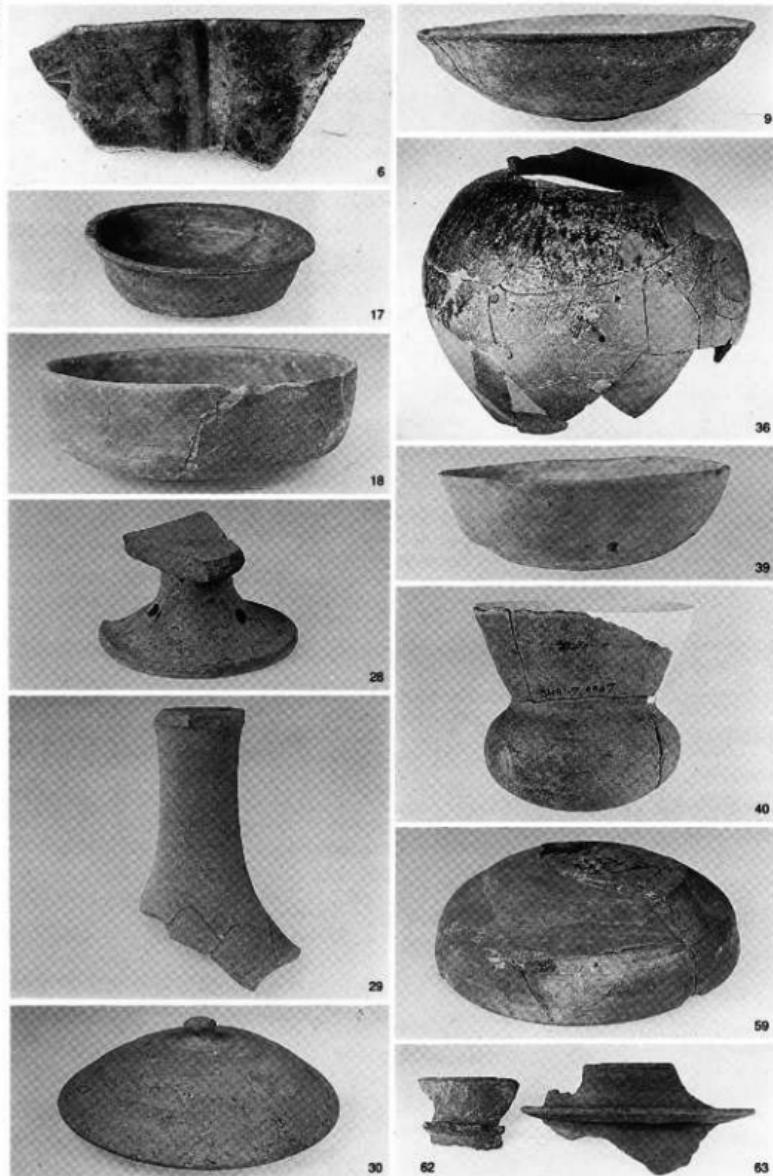
4区 第4次面 S D403断面（南東から）



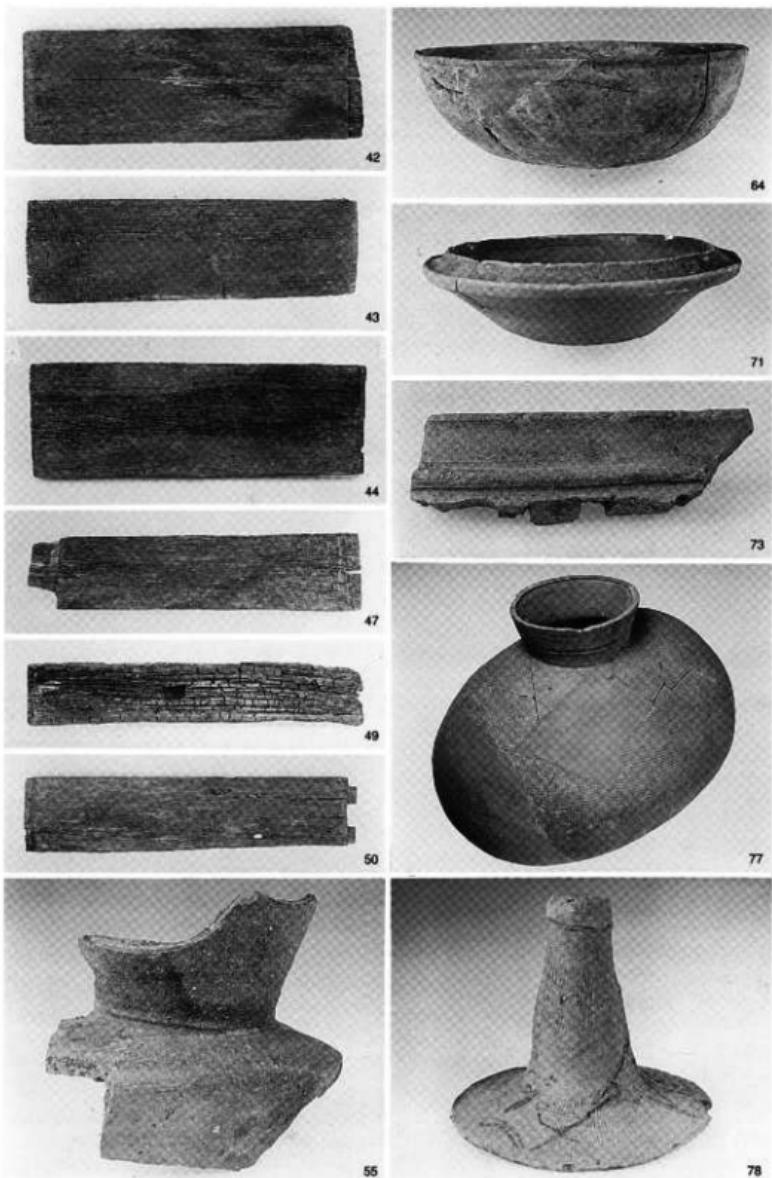
4区 第4次面 S D402新面（南東から）



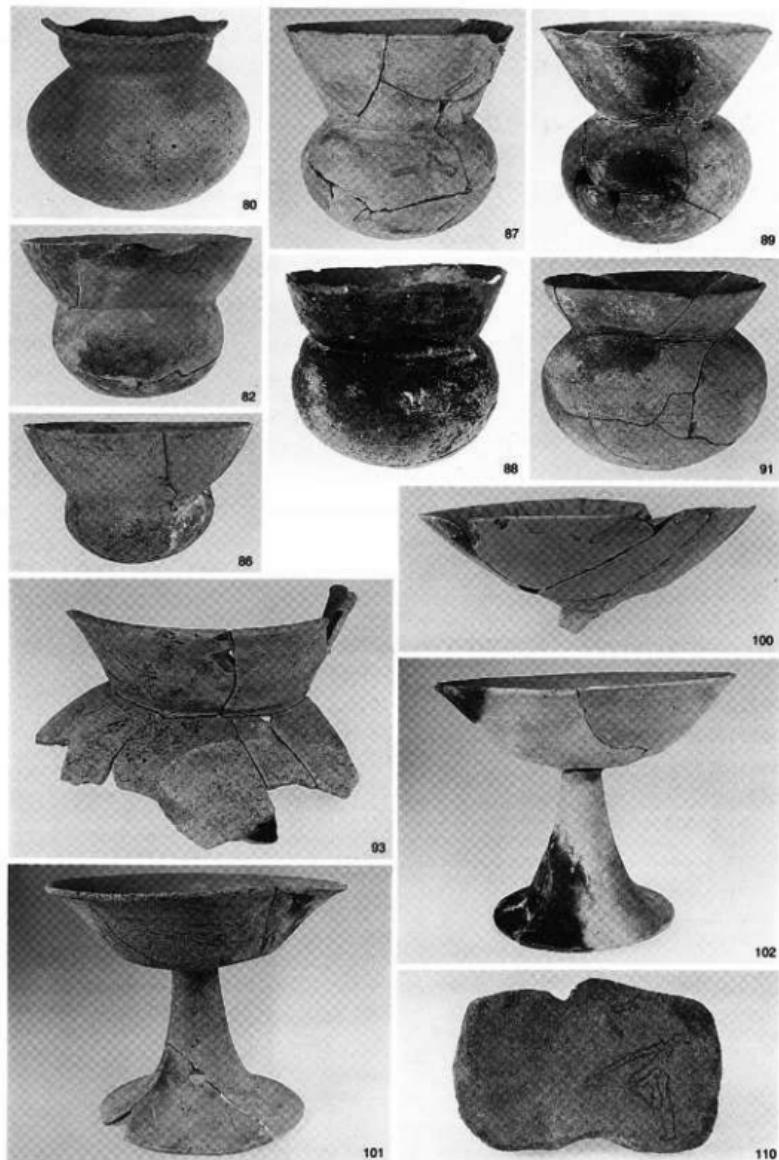
4区 第4次面 S D402土器出土状況（南東から）



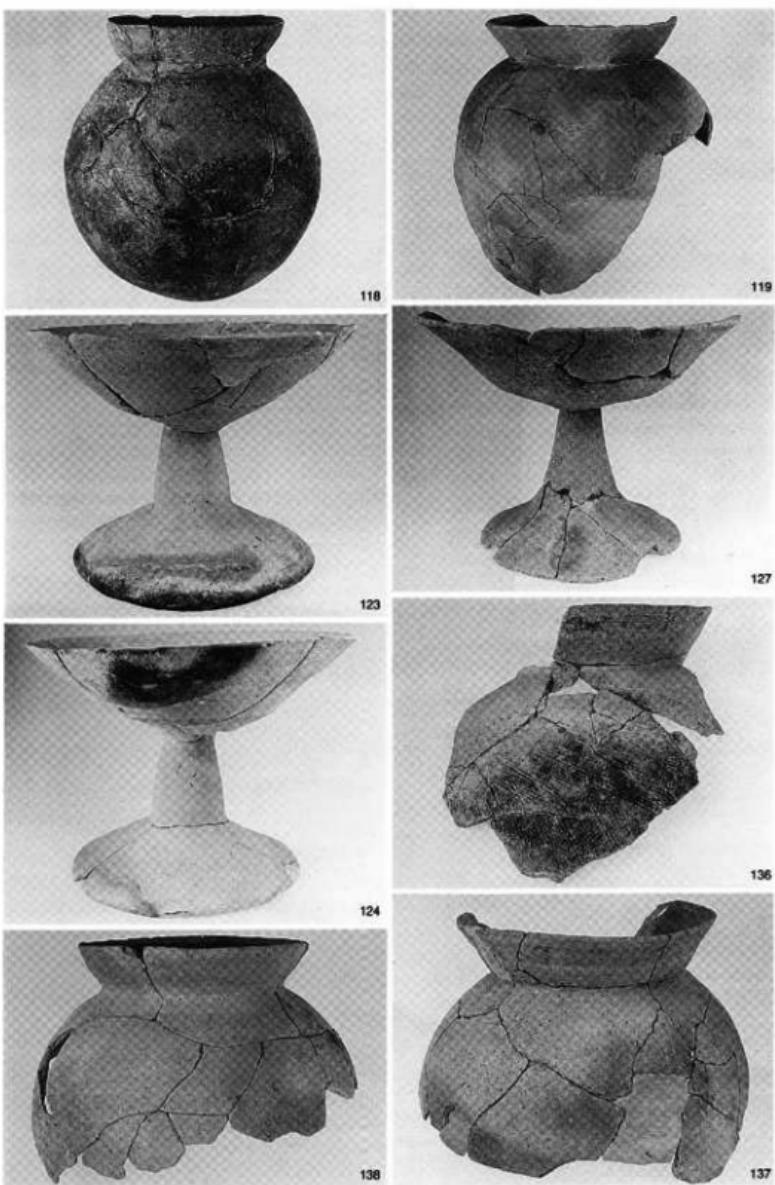
第4層（6～29）、SD209（30～40）、SK309（59）
SP302（62）、SP373（63）



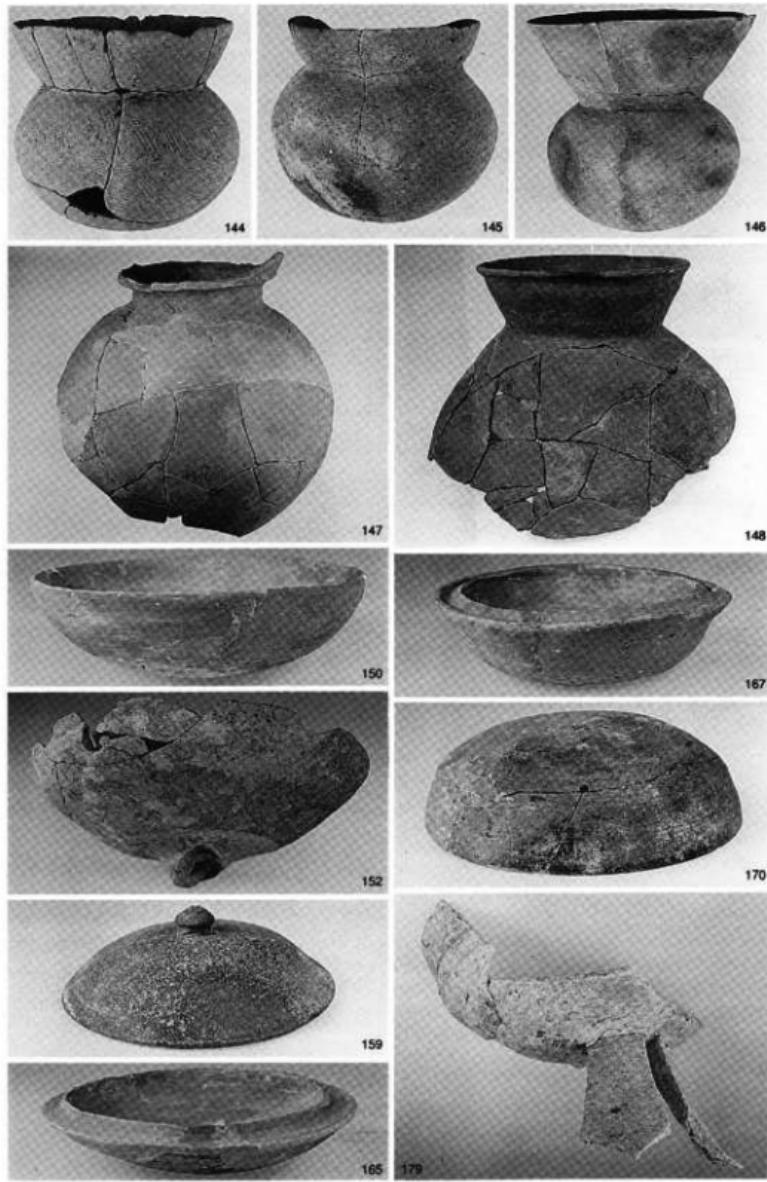
S E301 (42~55), 第5層 (64~73), S K401 (77), S K402 (78)



S D 402



S D402 (118・119), S D404 (123～138)



S D404 (144~148)、第6・7層 (150~179)

II 成法寺遺跡第8次調査（SH91-8）

例　　言

1. 本書は、八尾市南本町2丁目97番地の1で、共同住宅建設に伴って実施した成法寺遺跡第8次調査（SH91-8）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第14号 平成3年4月17日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が安井茂吉氏から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は、当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成3年9月17日に着手し、同年10月6日に終了した。調査面積は約350m²である。
1. 現地調査には、磯上サカエ・坂下 学・能勢直樹・濱田千鶴・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理は上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び図版集は坪田が行った。

本 文 目 次

第1章 調査経過.....	33
第2章 調査概要.....	34
第1節 調査方法.....	34
第2節 基本層序.....	35
第3節 検出遺構と出土遺物の概要.....	35
第4節 出土遺物について.....	40
第3章 まとめ.....	80

挿図目次

第1図 調査地位置図 (S = 1 / 5000)	33
第2図 地区割図 (S = 1 / 400)	34
第3図 基本層序 (S = 1 / 40)	35
第4図 第1次面平面図 (S = 1 / 200)	36
第5図 SK101・102出土遺物 (S = 1 / 4)	36
第6図 第2次面平面図 (S = 1 / 200)	37
第7図 SD201南東壁断面図 (S = 1 / 80)	38
第8図 SD201遺物出土状況平面図 (S = 1 / 60)	39
第9図 SD201出土遺物〈土師器杯A〉(S = 1 / 4)	43
第10図 SD201出土遺物〈土師器杯B・C〉(S = 1 / 4)	45
第11図 SD201出土遺物〈土師器皿〉(S = 1 / 4)	46
第12図 SD201出土遺物〈土師器高杯〉(S = 1 / 4)	48
第13図 SD201出土遺物〈土師器盤〉(S = 1 / 4)	49
第14図 SD201出土遺物〈土師器鉢A〉(S = 1 / 4)	50
第15図 SD201出土遺物〈土師器鉢B～E〉(S = 1 / 4)	51
第16図 SD201出土遺物〈土師器壺A①〉(S = 1 / 4)	53
第17図 SD201出土遺物〈土師器壺A②〉(S = 1 / 4)	54
第18図 SD201出土遺物〈土師器壺A③〉(S = 1 / 4)	55
第19図 SD201出土遺物〈土師器壺B～D〉(S = 1 / 4)	56
第20図 SD201出土遺物〈土師器鍋A①〉(S = 1 / 4)	58
第21図 SD201出土遺物〈土師器鍋A②〉(S = 1 / 4)	59
第22図 SD201出土遺物〈土師器鍋A③、B〉(S = 1 / 4)	60
第23図 SD201出土遺物〈土師器羽釜①〉(S = 1 / 5)	61
第24図 SD201出土遺物〈土師器羽釜②〉(S = 1 / 5)	62
第25図 SD201出土遺物〈土師器甑、竈〉(S = 1 / 4)	63
第26図 SD201出土遺物〈土師器壺〉(S = 1 / 4)	64
第27図 SD201出土遺物〈須恵器杯身A〉(S = 1 / 4)	65
第28図 SD201出土遺物〈須恵器杯身B・C、皿〉(S = 1 / 4)	67
第29図 SD201出土遺物〈須恵器杯蓋〉(S = 1 / 4)	69

第30図	S D201出土遺物〈須恵器鉢〉(S=1/4)	70
第31図	S D201出土遺物〈須恵器壺A~E〉(S=1/6)	72
第32図	S D201出土遺物〈須恵器壺F・G〉(S=1/6)	73
第33図	S D201出土遺物〈須恵器壺、他〉(S=1/4)	75
第34図	S D201出土遺物〈瓦・埴輪〉(S=1/4)	77
第35図	S O201出土遺物(S=1/4、1/6)	79
第36図	成法寺遺跡における飛鳥~奈良時代の主な遺構(1/1000)	81

図版目次

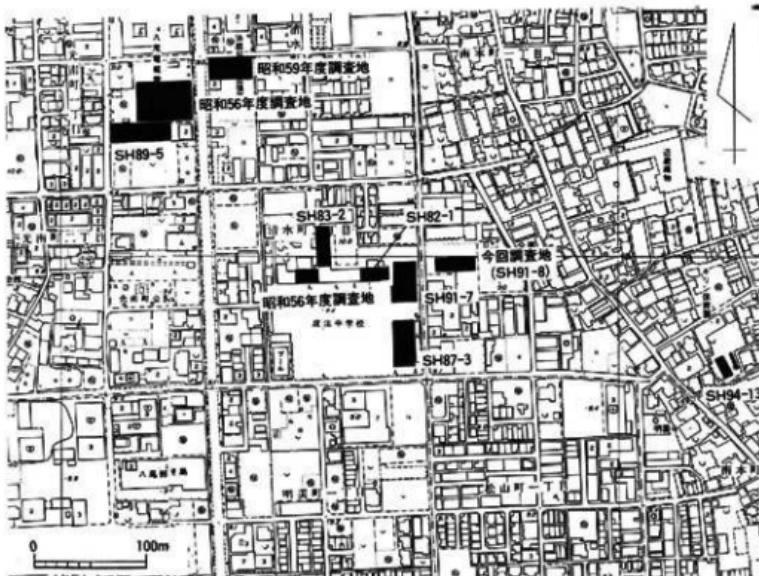
- 図版1 第1次面(西から)
 - 第2次面(西から)
- 図版2 S D201遺物出土状況(北西から)
 - S D201遺物出土状況(南東から)
 - S D201遺物出土状況(東から)
- 図版3 S D201遺物出土状況(北東から)
- 図版4 S D201北西部(図版3-E)下層遺物出土状況(北東から)
 - S O201遺物(343)出土状況(東から)
- 図版5 S D201出土遺物〈土師器〉
- 図版6 S D201出土遺物〈土師器〉
- 図版7 S D201出土遺物〈土師器〉
- 図版8 S D201出土遺物〈土師器〉
- 図版9 S D201出土遺物〈須恵器〉
- 図版10 S D201出土遺物〈須恵器〉
- 図版11 S D201出土遺物〈須恵器〉
- 図版12 S D201出土遺物〈須恵器〉
- 図版13 S D201出土遺物〈須恵器〉
- 図版14 S D201、S O201出土遺物

第1章 調査経過

成法寺遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。

当遺跡では八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～中世にわたる遺跡であることが知られている。詳細については前掲の「I 第7次調査 第1章」に記している。

このような情勢下の平成3年、安井哉吉氏から八尾市南本町2丁目97番地の1における共同住宅建設の届出書が八尾市教育委員会文化財室（現文化財課）に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成3年4月15日に遺構確認調査を実施した。^{註1}その結果、7世紀代の土器が検出され、同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。



第1図 調査地位置図 (S=1/5000)

第2章 調査概要

第1節 調査方法

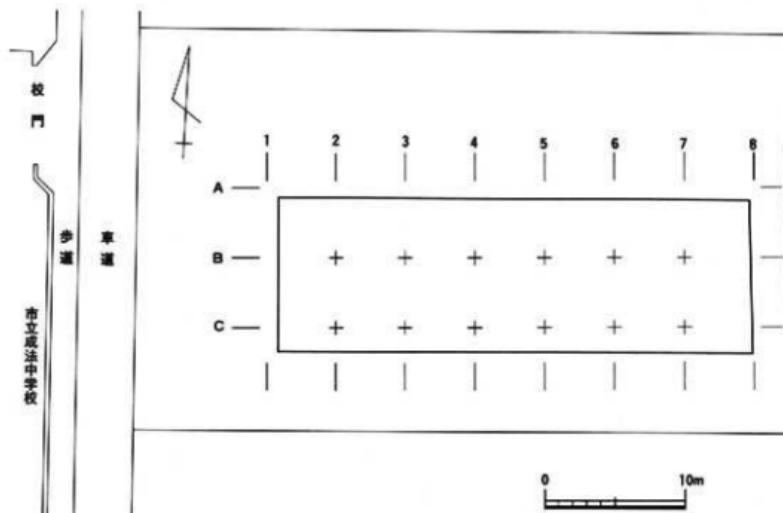
今回の調査は、当調査研究会が成法寺遺跡内で行った第8次調査で、共同住宅建設に伴う調査である。西側の第7次調査地との距離は約20mを測る。

調査では、八尾市教育委員会の試掘データを参考にし、現地表下約0.5mまでを機械掘削により除去した後、以下約0.3mを対象として人力掘削により実施した。その後、調査区の北東角に5m×2m、南西角に5m×3mのトレンチを設定し、機械・人力併用掘削により現地表下約2mまでの下層確認調査を実施した。

地区割は、調査区平面形に合わせて5m方眼を任意に設定した。そして南北ラインに数字（西から1～8）、東西ラインにアルファベット（北からA～C）を冠し、地区名は北西交点番号に代表させた。なおこの方眼の南北ラインは北から西に約3.4度振っている。



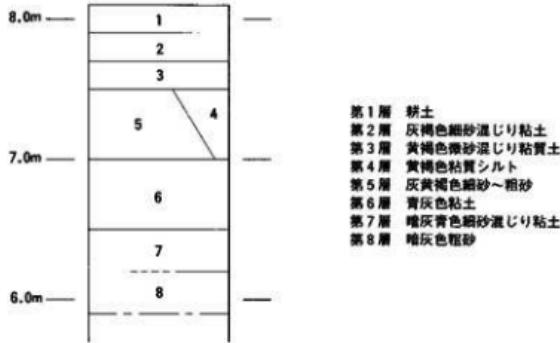
調査前の状況（西から）



第2図 地区割図 ($S = 1/400$)

第2節 基本層序

第1層は耕土である。第2・3層はわずかに中世～近世の遺物を含んでおり、奈良時代の遺物もみられる。第5層の砂層は調査地の北西部から南部・南東部に拡がり、北東部にはみられない。第4・5層がベースとなり、これより上層からの遺構を第1次面遺構、第4層以下から掘り込まれる遺構を第2次面遺構とした。第6層の青灰色粘土層は、当調査区の西側で確認されている占墳時代前期の遺構面を構成する土層と考えられ、レベルもほぼ一致する。調査区の北東角・南西角で実施した下層確認調査では、第4層以下からは遺構・遺物は検出されなかつた。第7・8層は調査区北東角で確認した。



第3図 基本層序 ($S = 1/40$)

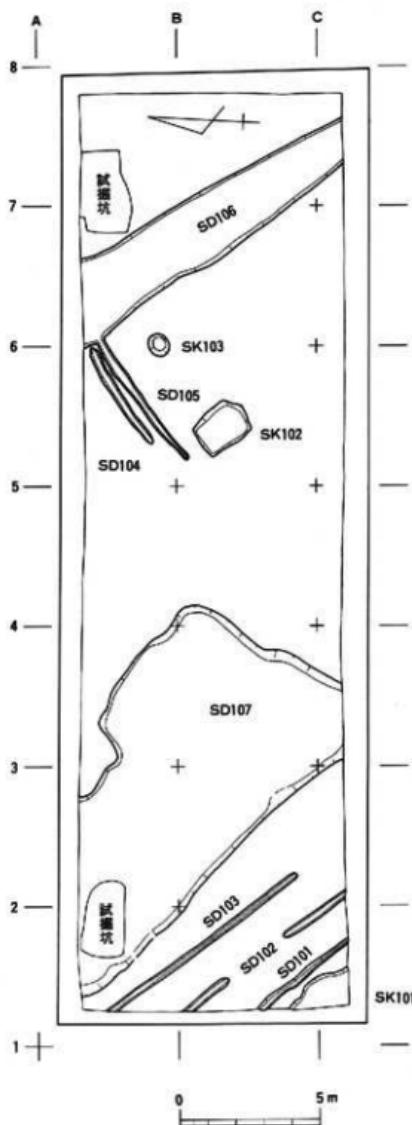
第3節 検出遺構と出土遺物の概要

〈第1次面〉

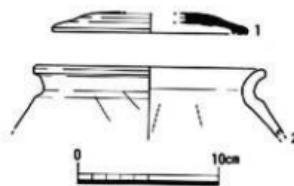
土坑3基（SK101～103）・溝7条（SD101～107）を検出した。第1次面遺構には、第2層・第3層の上面からの遺構が混在しており、第3層をやや掘り込んだ標高7.4m～7.5mで検出した遺構である。

SK101

調査区の南西角、1B～C区で検出したもので、平面形は不明である。深さ34cmを測り、埋土は灰褐色細砂混じり粘土である。後述の溝SD101～103は当土坑埋没後に掘られている。土師器甕（2）が出土しており、平安時代頃のものと思われる。



第4図 第1次面平面図 ($S = 1/200$)



第5図 SK101・102出土遺物
($S = 1/4$)

SK102

調査区の中央東、5B区で検出した。平面形はやや歪んだ長方形を呈し、規模は約2.0m×1.5m・深さ0.7mを測る。断面形状は逆台形で、埋土は上層が黄灰色粘土ブロック混じり細砂、下層が暗青灰色粘土混じり細砂で、一気に埋め戻されたような状況である。形状・埋土の状況から素堀り井戸の可能性がある。

出土遺物は細片のみであり、図化したのは飛鳥時代頃の須恵器杯蓋(1)のみである。明確な造構の時期は不明である。

SK103

6A区、SK102の北東に位置する。平面80cm×70cmの楕円形で、深さは約60cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は褐灰色細砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

SD101~105

幅20cm~30cm・深さ5cm~10cmを測る素堀り溝である。SD101~103は第3層の上面から掘り込まれてい

る。埋土はいずれも灰褐色粘土の単層である。時期は層位的に中世～近世頃と考えられ、飛鳥・奈良時代から近世までの遺物を含んでいる。

SD 106

調査区の東部で検出した北西～南東方向の溝である。方向は北から西に約39度振っている。規模は幅1.5m～2.9m・検出部分での深さ約10cm・検出長11.3m以上で、調査区外に続く。第2層上面からの溝で、南壁断面では深さ約40cmが確認できる。断面皿状を呈し、埋土は暗灰褐色砂混じり砂質土である。北部でSD 105とほぼ直角に接続しており、有機的に関連していたものと考えられる。

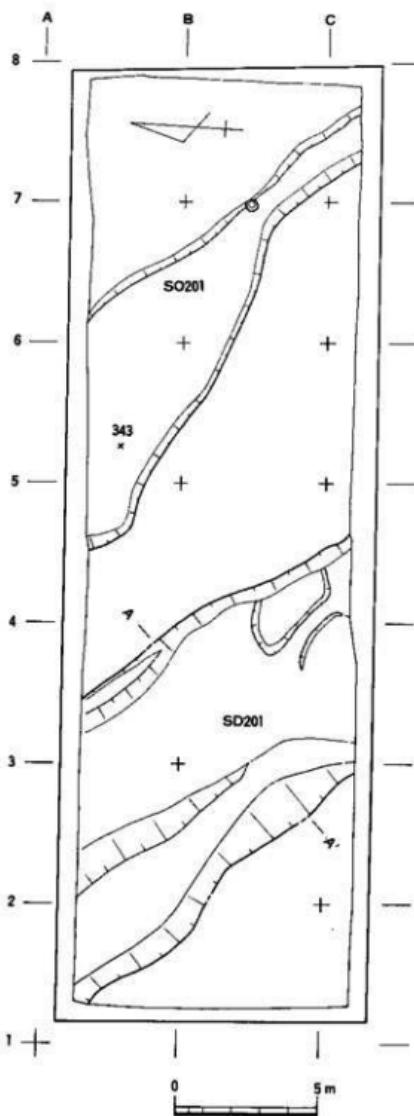
平安時代頃の土師器碗が出土しているが、層位的に近世頃に比定される溝である。

SD 107

調査区の西部で検出した溝で、中央で約7.5mの最大幅を測り、北部では約5.1m、南部では約2.8mと幅が減じている。断面逆台形で、埋土は暗褐色砂質土である。

当溝は第2次面SD 201の上部に位置し、西肩はほぼ一致している。

SD 201の最終堆積部分とも考えられるが、層位的には第2層上面からの溝である。このことからSD 201は、かなり近世まで当地の地割りに影響していたものと思われる。



第6図 第2次面平面図 ($S = 1/200$)

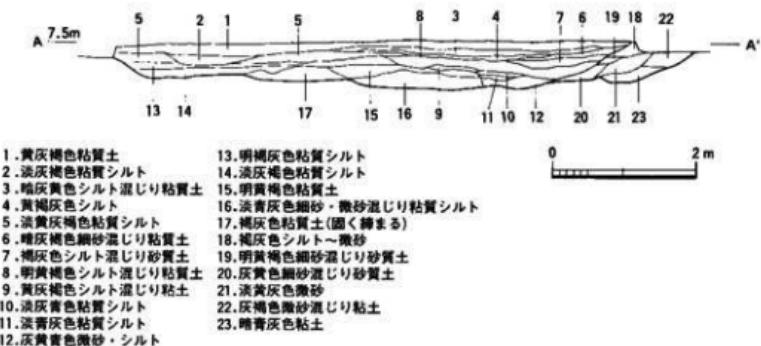
〈第2次面〉

S D 201 (第7・8図)

調査区の西部で検出した北西-南東方向の溝、方向は北から西に約45度振っている。断面図を呈し、規模は幅約8.0m・深さ約0.7m、検出長は約12.6m以上で、調査区外に続く。

溝の西岸から底部にかけての斜面、特に第7・8層中から多量の遺物が出土しており、幅約2mの帯状の土器溜りを形成している。遺物は溝底部にも少量みられるが、ほとんどが底部より浮いた位置から出土している。なお北部では遺物量は希薄になっている。溝中央から東半の出土はわずかである。溝中央のセクションをみると、西で本来のベースとなるのが基本層序第5層の砂層である。そして溝の埋没が進み、第18~19層が肩を形成した時期以降の堆積土に多量の遺物が含まれている。これはこの時点で溝の掘り直しが行われたためとも考えられる。溝の北西部では、これらの遺物を覆う間に縮まった明褐色粗砂混じり粘土層がみられたが、整地層とも考えられる。

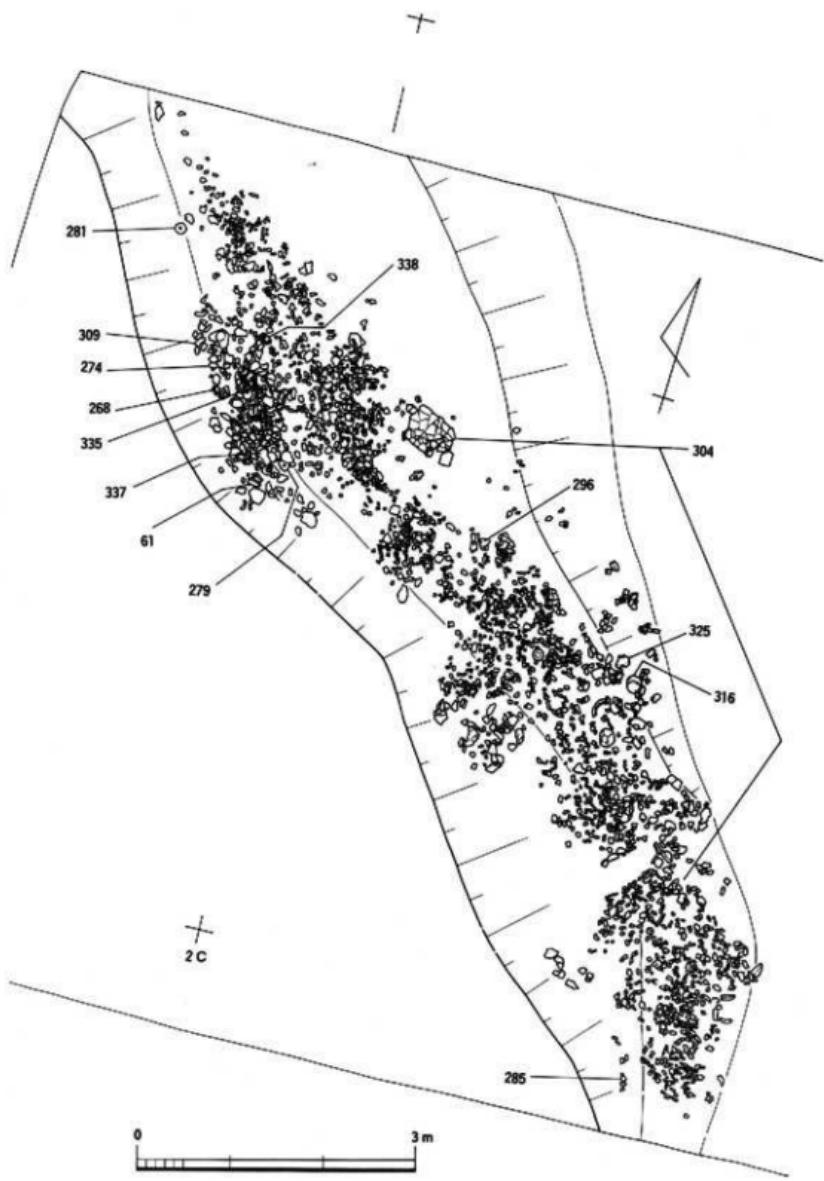
出土遺物には土師器・須恵器の他、少量の瓦・埴輪等がある(3~338)。ほとんど破片であり、完形品は須恵器杯蓋1点(281)・壺1点(318)のみで、特に土師器には細片が多いことが指摘できる。時期は飛鳥時代後期~奈良時代初頭のものが主で、古墳時代後期にさかのぼるものも少量含まれる。遺物の詳細については次節で述べる。



第7図 S D 201南壁断面図 (S = 1/80)

S O 201

調査区の東部に位置する。一辺16.5m以上にわたって南北から北東方向にゆるやかに落ち込んでいるもので、溝の可能性もある。深さは最深部の北東角で約35cmを測る。埋土は上から楕灰色細砂混じり粘質土・灰褐色砂混じり粘質土・明黄褐色粘土(固く縮まる)である。出土遺物については次節で述べる(339~347)。



第8図 SD 201遺物出土状況平面図 ($S = 1/60$)

第4節 出土遺物について

ここでは第2次面の造構であるSD201・SO201の出土遺物について述べる。

器種名は主に藤原宮・平城宮報告に準じた。同器種内の小分類については、形態別にはアルファベット大文字、法量別にはローマ数字、細部形態や色調・胎土の分類にはアルファベット小文字、及び数字を用いた。また藤原宮・平城宮での分類に対照できるものは「平城杯A I」という表現で併記した。径高指数は「(器高／口径) × 100」によるもので、口径には反転復元値、また器高にはほぼ確なものについては推定値も使用している。

なお土師器杯類の調整技法についても、平城宮報告を参考に以下のように設定し、この組み合わせで「a0手法」という表現を用いた。

- a 手法：底部外面をヘラケズりすることなく、成形時の凹凸を残す。
b 手法：底部外面をヘラケズリする。
- 0 手法：ヘラミガキを全く施さない。
1 手法：口縁部外面ヘラミガキ。
2 手法：底部外面をヘラミガキ。
3 手法：口縁部・底部外面の全面をヘラミガキ。

1) SD201出土遺物 (3~338)

出土遺物はほとんどが土師器・須恵器であり、破片総数（接合後）は9737点に及び、内訳は以下のとおりである。これは破片の数であり、個体数とは無関係である。特徴としては小破片が多いといえ、特に土師器煮沸形態のものに顕著であり、このことが土師器片が9割以上を占めるという結果につながっているのであろう。



土器出土状況

土 師 器

須 惠 器

杯・皿類口縁部		杯口縁部	
杯A 120	198	杯A 79	
杯B・C 78	488	杯B 52	245
皿A 152	163	不明 114	271
皿B 11	1817	杯不明 26	280
杯・皿類不明 127	1897	杯C 9	288
杯・皿類底体部 1329	55	皿 5	338
高杯		高杯 3	
鉢・盤	25	杯蓋A 26	
		杯蓋B 21	50
		蓋不明 3	
壺・鍋類口縁部		鉢 口縁部 9	36
壺A 43		底体部 27	
壺B 34	81	壺 口縁部 31	330
壺C 4	109	底体部 299	
鍋 28	281	壺 50	
壺・鍋類不明 172	3094	壺蓋 1	
壺・鍋類底体部 2813	6947	平瓶 口縁部 12	37
羽釜 口縁部 241		底体部 25	
鋤部 252	3853	提瓶 2	
体部 3360		硯 1	
瓶 2		匙 2	
壺 28		不明 27	
壺 34			
· 土師器総数 8908		· 須恵器総数 824	
瓦 3			
埴輪 2		· 破片総数 9737	

S D 201出土遺物一覧

◆土師器杯（3～44）

形態からA～Cの3類に分類できる。

・土師器杯A（3～26）

平坦な、あるいは丸みを帯びた底部から内湾して上外方に伸びる口縁部をもち、平城杯Aにあたる。口径の分布からI～IVに、また口縁部の形態からa～dに分類できる。なお高台を付すもの（平城杯B）は認められなかった。

I（3～18）：口径19.6cm～17.6cm（径高指数27.0）・・・平城杯A I

II（19～21）：口径17.0cm～16.5cm（径高指数24.5）・・・平城杯A I

III（22・23）：口径14.4cm～14.3cm（径高指数24.5）・・・平城杯A II

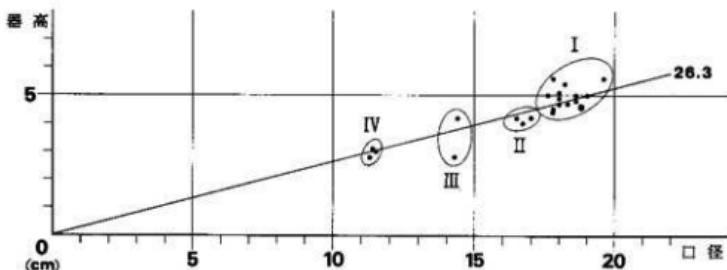
IV（24～26）：口径11.5cm～11.3cm（径高指数26.0）・・・平城杯A III

a：口縁部が直線的、外湾気味に伸びるもの。（4・5・7～16・18・19・21・23～26）

b：口縁端部付近で外反するもの。（6・17）

c：口縁部が全体にやや内湾気味なもの。（22）

d：a形態で、ヨコナデが強いため口縁部に凹凸があり、端部は肥厚する。（3・20）

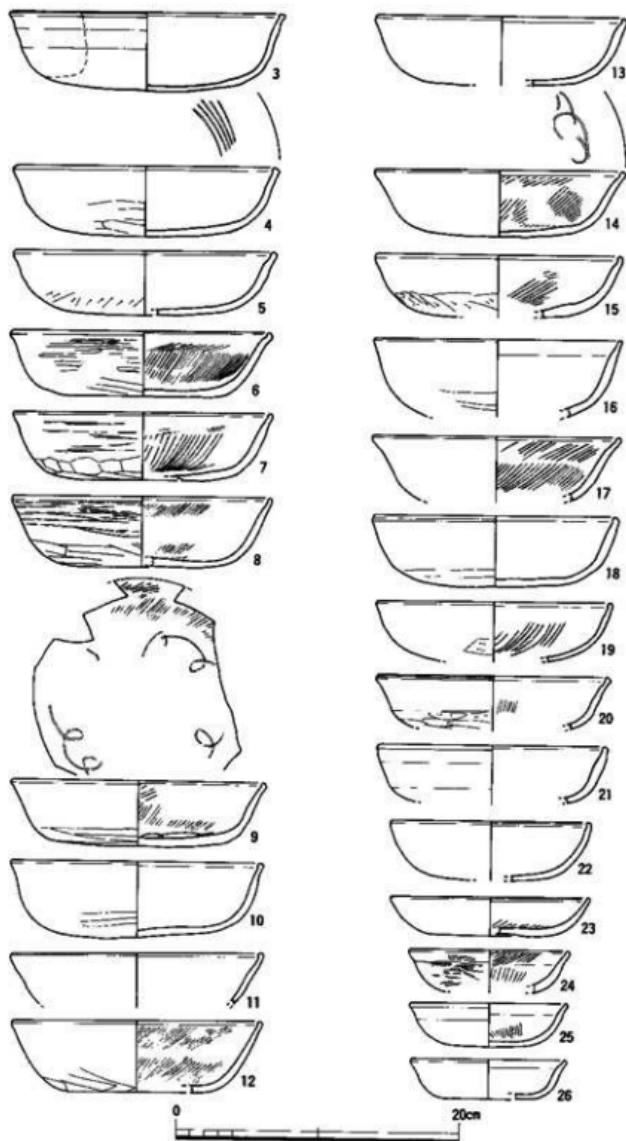


土師器杯Aの径高分布

径高指数をみると最大31、最小20で、ほぼ24から30の間に納まり、平均値は26.3となる。口径ではIのものが多数を占めている。また口径の分布からは、ほぼ明瞭に分化が認められる。なおIIはIに含まれるのかもしれない。

口縁a形態が19点で約8割を占める。口縁端部は内側に巻き込まれるものと、巻き込みが小さくわずかに肥厚する程度のものがある。口径IVのものはすべて後者である。16のみ口縁端部が丸く収まる。口縁d形態のものは口縁端部が外傾する面を成し、20はここに沈線が巡る。

調整技法が確認できたものは全てb手法である。外面のヘラミガキでは1手法のものが図示



第9図 SD 201出土遺物〈土師器杯A〉(S = 1/4)

した4点の他、口径IVの25・26もおそらく1手法で、25は3手法の可能性がある。

図化した24点のうち内面に暗文を施すものは約6割の14点で、施さないものは19の1点、他は表面剥離のため確認できない。暗文の構成は、口縁部は二段、あるいは一段の放射状暗文、また底部に螺旋状暗文が確認できたのは2点である。4は底部に圓線状暗文を施している。

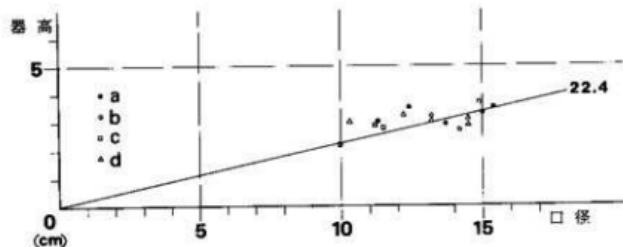
色調は赤褐色系・淡灰褐色系があり、また表面剥離の状態等によってどちらとも言い難いものが多い。胎土との関係では前者の方が砂粒を多く含み、後者の方が精良といえ、7・9はほとんど砂粒を含まない胎土である。

外面に黒斑を有するものが3点ある(3・10・23)。17の内面には煤が厚く付着している。

・土師器杯B(27~42)

丸みを帯びた底部から聞く口縁部を持ち、底部と口縁部の境が不明瞭なもの。おおむね平城杯Cにあたるものと思われる。口縁部の形態からa~dに分類できる。

- a (27~31) : 口縁端部が内傾する面を成すもの。
- b (32・33) : 口縁端部内面に内傾する段を成す、あるいは凹線を巡らせるもの。
- c (35~37) : 口縁端部が丸く取まるもの。
- d (38~42) : 口縁端部は丸く取まり、ヨコナデにより口縁部内面が凹状を呈する。



土師器杯Bの径高分布

aとb、cとdは個体差と捉えたほうがいいかもしれない。口縁a形態の30・31は、体部から屈曲して立ち上がる口縁部という特徴から、平城碗Cである可能性がある。

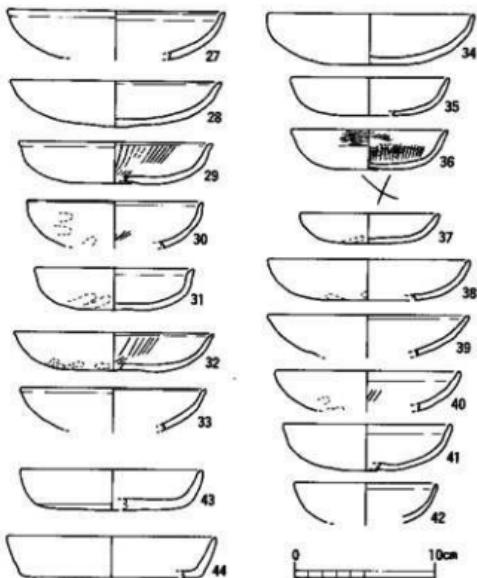
径高指数の平均値は22.4で、口縁形態別では、a-24.1、b-21.6、c-24.0、d-24.0となる。調整はa0手法がほとんどで、30・34・41がb0手法、35がb1手法の可能性がある。36のみ3手法で、底部外面に一定方向のヘラミガキを施し、「十」のヘラ記号がある。暗文を施すものは図示した5点、施さないもの2点(33・41)で、他は不明である。内面一段の放射状暗文で、36のみ二段である。色調・胎土は杯Aと同様のことがいえる。口縁形態との関係をみると、口縁c形態のものは精良な胎土、d形態のものは砂粒を含む胎土という傾向がある。

32の底部外面には黒斑が認められる。

・土師器杯C (43・44)

厚手で、平坦な底部から屈曲して短い口縁部が付くものである。皿に分類したほうがいいのかもしれない。

調整はa0手法あるいはb0手法と思われ、暗文は施していない。胎土は砂粒が多く含むものである。43の外面には黒斑が認められる。



第10図 SD 201出土遺物〈土師器杯B・C〉(S=1/4)

◆土師器皿 (45~72)

形態からA・Bの2類に分類できる。

・土師器皿A (45~68)

平坦な、あるいはやや丸みを帯びた底部から上外方に短く伸びる口縁部をもつ。平城皿Aにあたる。口径の分布からI~IVに、また形態からa・bに分類した。

I (45・58) : 口径24.9cm~23.8cm (径高指数11.3)

II (46~52・59~65) : 口径23.0cm~21.4cm (径高指数12.8)

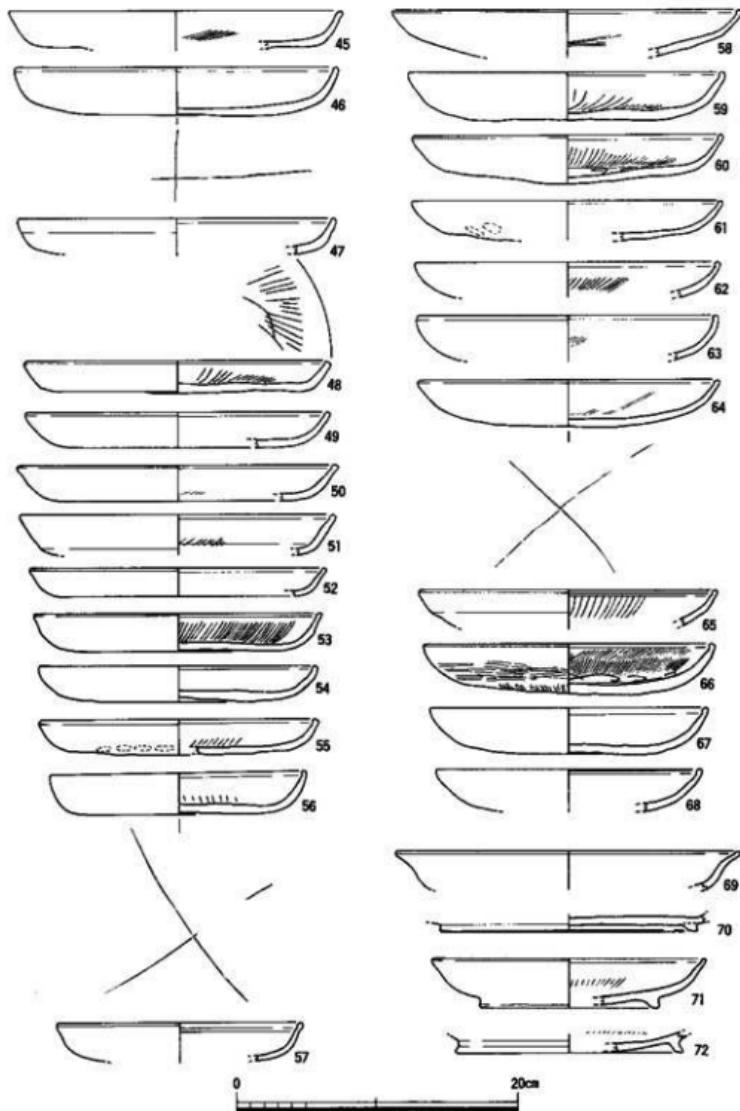
III (53~55・66・67) : 口径20.8cm~19.8cm (径高指数14.5)

IV (56・57・68) : 口径19.0cm~17.5cm (径高指数15.9)

(a) (45~57) : 平坦な底部から屈曲して口縁部に至るもの。

(b) (58~68) : 丸みを持つ底部から内湾して口縁部に至り、底部と口縁部の境が不明瞭。

口径ではIIのものが多数を占めているが、口径の分布からは杯Aのような明瞭な分化は認められない。径高指数の平均値は13.6であり、口径の大きいものは数値は小さくなる。形態別



第11図 SD 201出土遺物〈土師器皿〉(S=1/4)

では、a形態は器高2.9cm～3.5cm・径高指数15.5、b形態は器高2.0cm～3.4cm・径高指数12.6で、明瞭に分かれるようである。

口縁部の形態は杯Aのa～c形態がある。また口縁端部の形態も杯Aとほぼ共通し、端部を内側に巻き込むものと、わずかに肥厚する程度のものがある。45のみが異なり、端部がわずかに外反する。

調整技法は、明らかにb手法によるものは46・52の2点で、他は主にa手法と思われる。しかし、平滑に仕上げてはいるがヘラケズリの痕跡が確認できず、ナデによるものかヘラケズリによるものか判別しえないというものも多い。ヘラミガキは66のみ2手法が確認できる。

図化したもののうち表面剥離のため調整不明な9点を除くと、すべてに内面に暗文が施されている。暗文は、口縁部内面に放射状暗文を施すもので、66のみ二段である。そのうち底部内面に螺旋状暗文が確認できるものが4点あり（48・60・64・66）、58には圓線状暗文もみられる。また底部外面に「十」のヘラ記号を施すものが3点ある。（46・56・64）

66は1点のみ2手法によるもので、内面の暗文が緻密で、器壁も厚く、他のものとは趣を異にしている。

色調は杯と同様の分類ができるが、赤褐色系が多くを占め、淡灰褐色系は68の一点である。他に49が淡褐色を呈し、また63は煤が付着したためか黒褐色を呈している。

底部外面に黒斑のあるものは、底部が約半分以上遺存しているもの9点のうち4点にのぼる（46・53・56・66）。

・土師器皿B（69～72）

皿Aに高台を付したもので、平底皿Bにあたり、個体数は少ない。形態からa・bに分類できる。

a：平坦な底部の端に高台が付くもの。（69・70）

b：底部が丸みをもち、高台は底部端よりやや中心寄りに付くもの。（71・72）

口縁部は皿Aのa形態と同じであるが、69は外反がより強い。調整技法は皿Aと同様の理由でa手法またはb手法である。内面に放射状暗文を施すが、69は不明である。高台は外側で接地する。69と70は同一個体と思われる。色調はいずれも赤褐色系である。

◆土師器高杯（73～90）

形態と調整技法からA～Cの3類に分類できる。

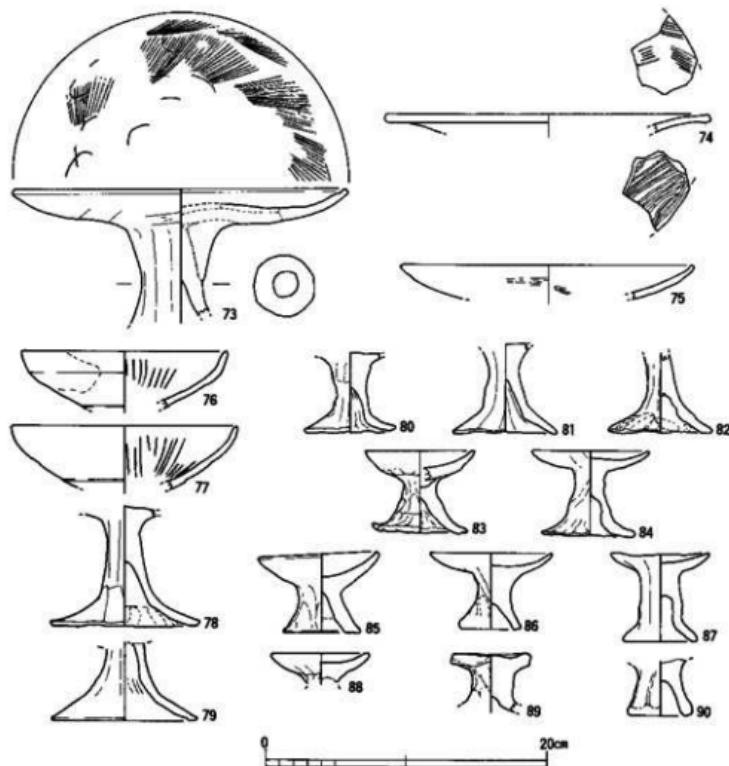
・土師器高杯A（73～75）

水平に近く開く皿状の杯部を有するものである。口縁部の形態は異なるが、杯部内面には二段の放射状暗文が分割して施され、73には螺旋状暗文も確認できる。74は口縁部外面を密に磨いている。73は脚柱部をヘラケズリにより面取りし、断面が13～14角形を呈する。75は外面に

ヘラミガキが確認でき、一応高杯にしたが蓋かもしれない。色調は赤褐色系である。

・土師器高杯B (76~79)

外上方に伸びた後内湾して口縁部に至る杯部を呈し、口縁端部は丸く収まる。杯部内面には一段の放射状暗文を粗に施す。杯部外面下位には粘土接合痕が溝状に(76)、あるいは段を成して(77)残る。78・79が高杯Bの脚部になると考えられる。調整は、78は脚柱部外面がヘラケズリにより面取りされ、内面はナデ。裾部外面も面を持ち、ヘラケズリと思われるが、ハケ状の工具痕がみられる。内面は指頭圧痕による凹凸が著しい。79はナデにより、裾部外面は78と同様の状況である。色調はいずれも赤褐色系である。76の外面には黒斑がある。



第12図 SD 201出土遺物〈土師器高杯〉(S = 1/4)

・土師器高杯C（80～90）

皿状の杯部をもち、ミニチュア製品と考えられる。手すくね成形とナデ調整によるもので、指頭圧痕やナデにより器表に凹凸を残すものが多い。脚柱部内面の調整で分類でき、未調整でしはり目を明瞭に残すもの（80・81・83）、ナデるもの（85・86・87・90）、脚柱部内面をナデするもの（82・84）がある。81の脚柱部の面取りはナデによる。89は杯部が円盤状を呈する。80・81の裾部内面には布目が残っており、製作方法を知る手がかりとなろう。82・84・85・87は外面に黒斑を有する。色調は赤褐色系と淡褐色系の両方がある。90は他と異なり胎土中に砂粒を多く含むもので、他器種の把手等と考えたほうがいいかも知れない。

◆土師器盤（91・92）

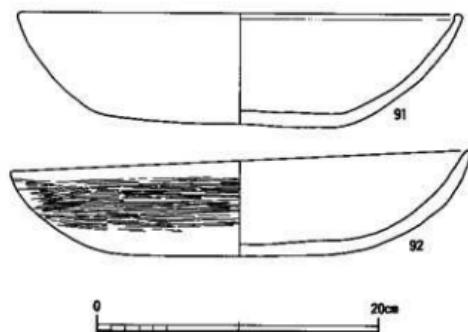
形態と調整からA・Bの2類に分類できる。口径はほぼ等しい。色調・胎土は杯類と同様である。

・土師器盤A（91）

平坦な底部と内湾しながら開く口縁部からなり、口縁端部は内側に巻き込まれる。調整はナデで、口縁端部はヨコナデである。

・土師器盤B（92）

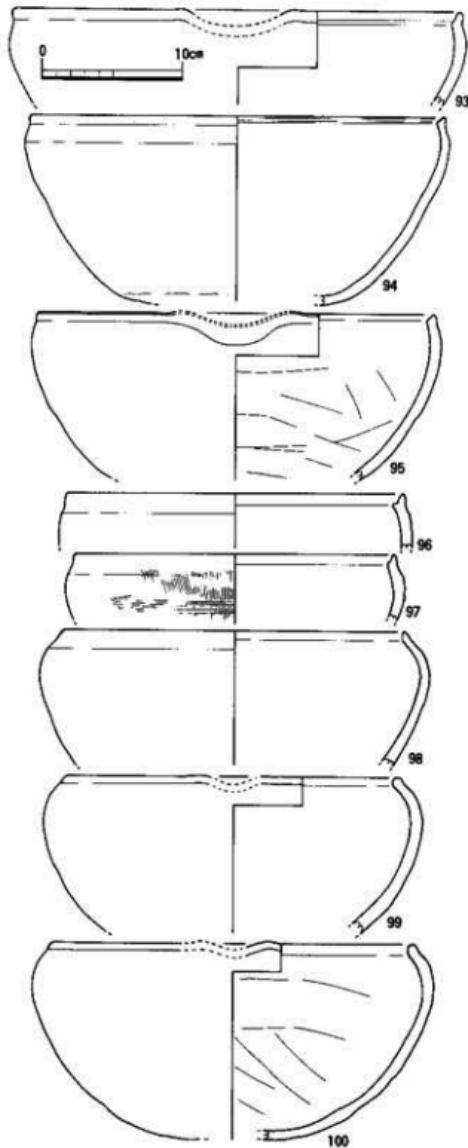
盤Aに比して底部と口縁部の境が不明瞭で、口縁端部は丸く収まる。調整は全面をヘラミガキしている。



第13図 SD201出土遺物〈土師器盤〉(S=1/4)

◆土師器鉢（93～108）

形態と調整技法からA～Dの4類に分類でき、A・Bが平底鉢Aにあたる。胎土・色調はAが壺類、B～Eが杯類と同じもので、調整技法からも前者が粗製品、後者が精製品といえる。



・土師器鉢 A (93~100)

体部から内湾して上内方に伸びる口縁部を持つもので、底部は平坦なものと、やや丸みをもつものがあると思われる。口径から I ~ III の 3 類に、口縁端部の形態から a ~ c の 3 類に分類できる。

- I (93~95) : 口径30cm前後
- II (100) : 口径26.0cm
- III (96~99) : 口径23cm前後
- a (93~97) : 口縁端部が内傾する凹面を呈するもの
- b (98) : 口縁端部が内傾する平面を呈するもの
- c (99・100) : 口縁端部が肥厚気味に丸く収まるもの

口縁 a 形態のものは、b・c 形態に比して体部から口縁部への内湾が弱く、口縁部は直立に近い。4 点には片口がある。調整は口縁部ヨコナデで、体部は内面を不定方向のナデにより平滑に仕上げ、外面は成型時の凹凸を残したままである。口径の小さい97は外面にハケを施している。c 形態の100を除いていずれにも内面に煤が付着しており、煮沸用の鉢と思われる。

第14図 S D 201出土遺物〈土師器鉢 A〉(S = 1/4)

・土師器鉢B (101・102)

101は体部と口縁部の境が不明瞭で、全体の形態が球形を呈する。口縁端部形態は、内面が剥離しており不明であるが、鉢Aのaあるいはb形態と思われる。鉢Aと異なり体部外面下位がヘラケズリされ器壁は薄い。鉢Aの口径分類ではIIに含まれる。底部のみの102は色調等が101に類似しており、調整も底部外面から体部下位をヘラケズリしている。黒斑のため底部から体部の外面は一面に黒色を呈する。

・土師器鉢C (103・104)

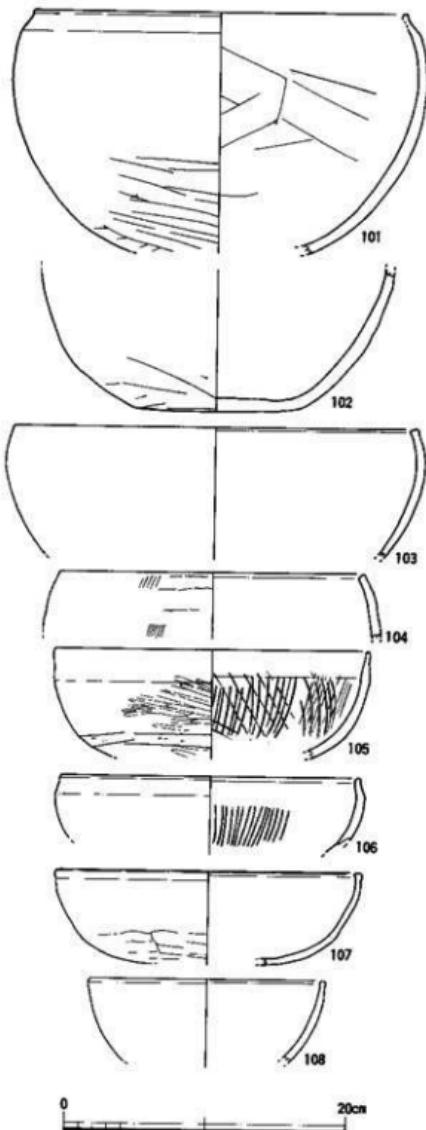
形態はAと同様であるが、薄手で口縁端部が方形を呈する。104は外面にハケを施す。

・土師器鉢D (105・106)

内面に暗文が施される精製品である。105の調整は杯類のb1手法によるもので、内面には交差する二重の放射状暗文を施している。106は内面に一段の放射状暗文が施される。

・土師器鉢E (107・108)

杯A aに類似するが、底部と体部との境が不明瞭で、器高が深いものを鉢Dとした。口縁端部は内側に巻き込まれる。107の調整は杯類のb0手法あるいはb1手法による。



第15図 S D 201出土遺物〈土師器鉢B～E〉(S=1/4)

◆土師器壺 (109~152)

全容を知れるものは少ないが、口径と体部最大径との関係からA~Cの3類に分類した。

・土師器壺A (109~132)

口径が体部最大径よりも小さいもので、口径からI~IVに、また口縁端部の形態からa~cに分類できる。

- | |
|---------------------------------|
| I (109~111) : 口径36.6cm~35.2cm |
| II (112~121) : 口径32.4cm~29.0cm |
| III (122~124) : 口径25.8cm~24.0cm |
| IV (125~132) : 口径21.4cm~16.0cm |

- | |
|---|
| a (112・113・122・123・125~130) : 口縁端部をつまみあげる、あるいは上方に肥厚する |
| b (109・110・114・115・124・131) : 口縁端部が上下に肥厚するもの |
| c (111・116・117・132) : 口縁端部が丸く、あるいはやや方形に収まるもの |

口径Iのものには口縁a形態ではなく、III・IVではa形態が多い。

調整は口縁部ヨコナデで、内面ハケのものもある。体部は外面縦方向のハケで、111は上位をナデしている。内面はナデ・ハケ・ヘラケズリがあり、ハケ後ナデ(112)やヘラケズリ(130)のものもある。113は上位ヘラケズリ、下位がナデである。口径Iのものは体部内面はナデに限られる。

111・113・114の内面には炭化物が厚く付着している。117は灰白色を呈する。118・129は淡灰赤色を呈し、砂粒の少ない密な胎土である。

調整や胎土・色調から、把手119は123と、120は112と同一個体の可能性がある。

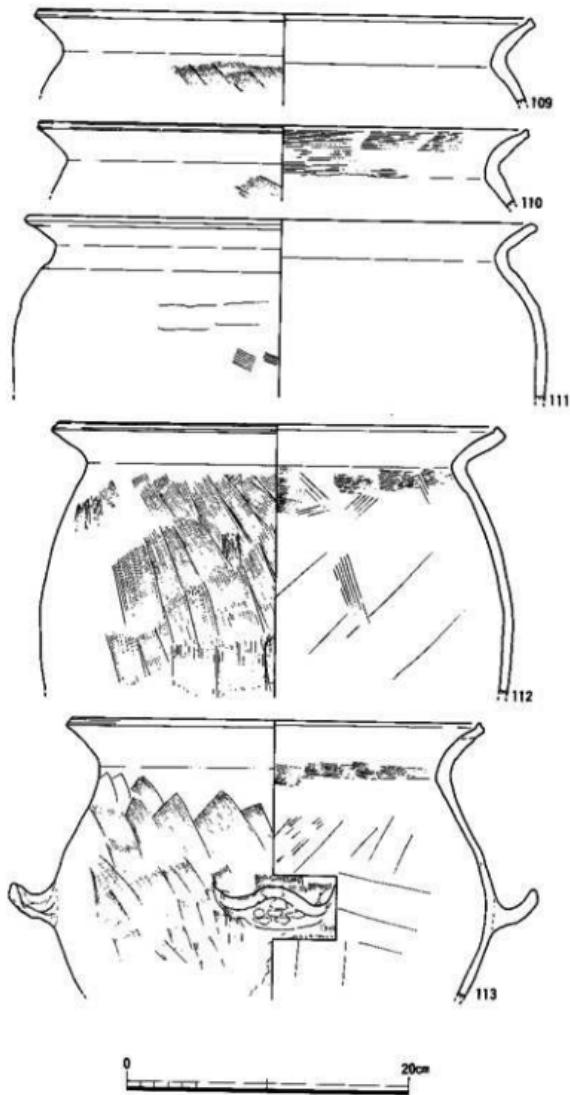
・土師器壺B (133~148)

口径が体部最大径よりも大きいもので、口径からI~IVに分類できる。また口縁端部の形態については、壺Aと同様の分類ができる。

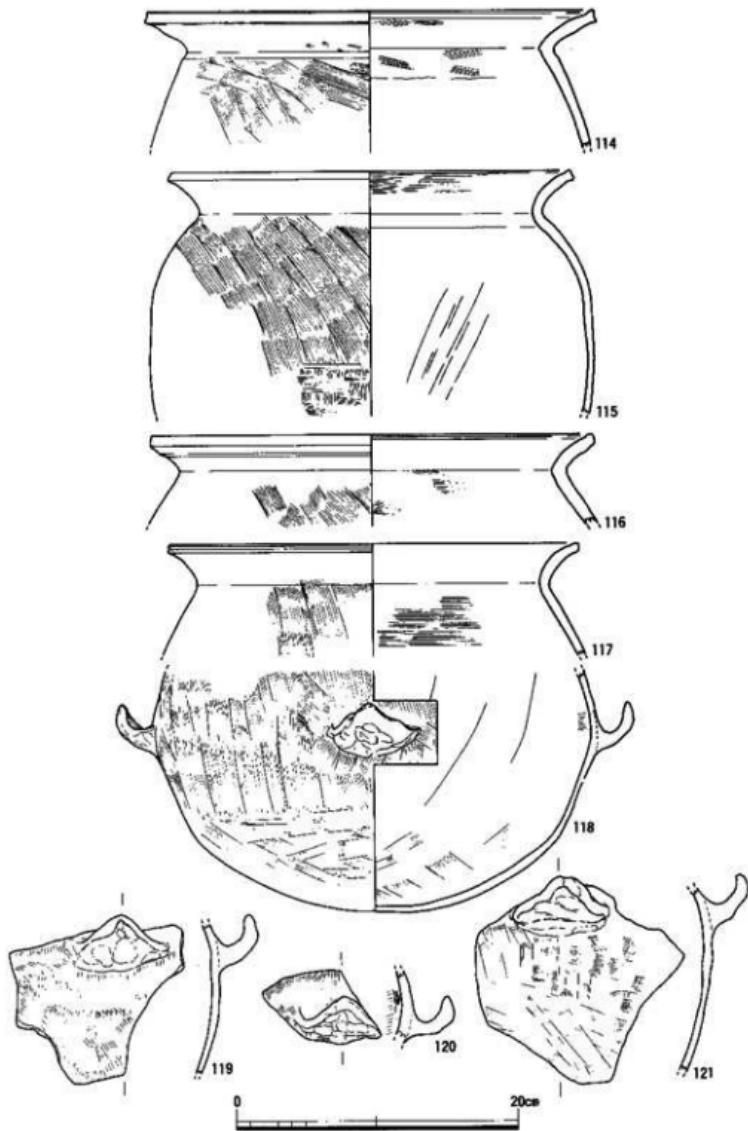
- | |
|---------------------------------|
| I (133~135) : 口径26.2cm~24.0cm |
| II (136・137) : 口径21.6cm~20.0cm |
| III (138~146) : 口径17.8cm~15.0cm |
| IV (147・148) : 口径13.0cm~11.0cm |

口径ではIが壺A IIIに、II・IIIが壺A IVに相当する。口縁a形態が多く、口径I・II・IVのものはすべてこの形態で、口径IIIではb形態が1点(143)、c形態が3点(144~146)ある。

調整は口縁部ヨコナデで、内面ハケのものもある。体部は外面ハケで、内面はヘラケズリとナデがあり、ハケのものはなく、口径IIIのものはすべてヘラケズリである。



第16図 SD201出土遺物〈土師器甕A①〉(S=1/4)



第17図 SD 201出土遺物〈土師器壺 A(2)〉(S=1/4)

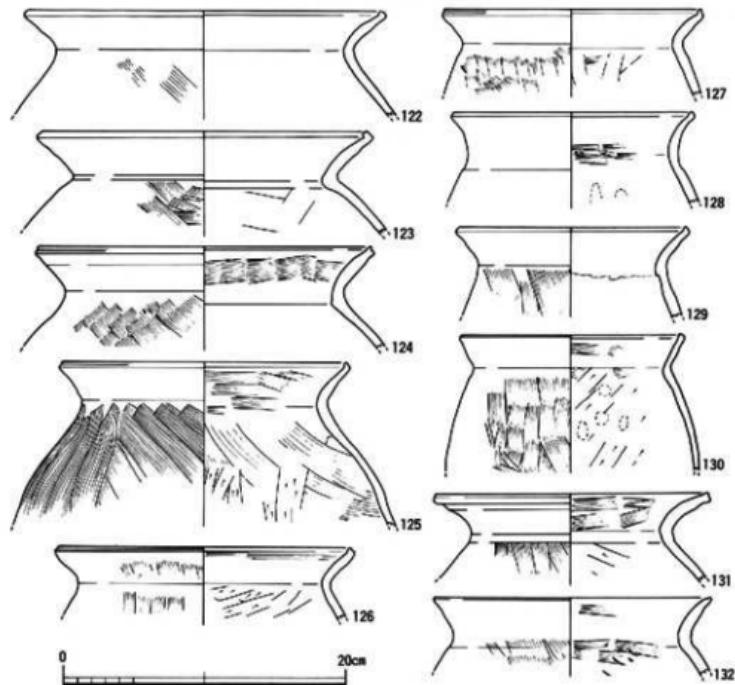
口径Iで、口縁部が水平に近く広がり肩の張らない133・135等が、長胴の平城壺Cにあたるものであろう。全容の知れるものは143のみで、体部最大径が下位に位置し、小笠原氏分類の河内型壺にあたるものであろう。

・土師器壺C (149~152)

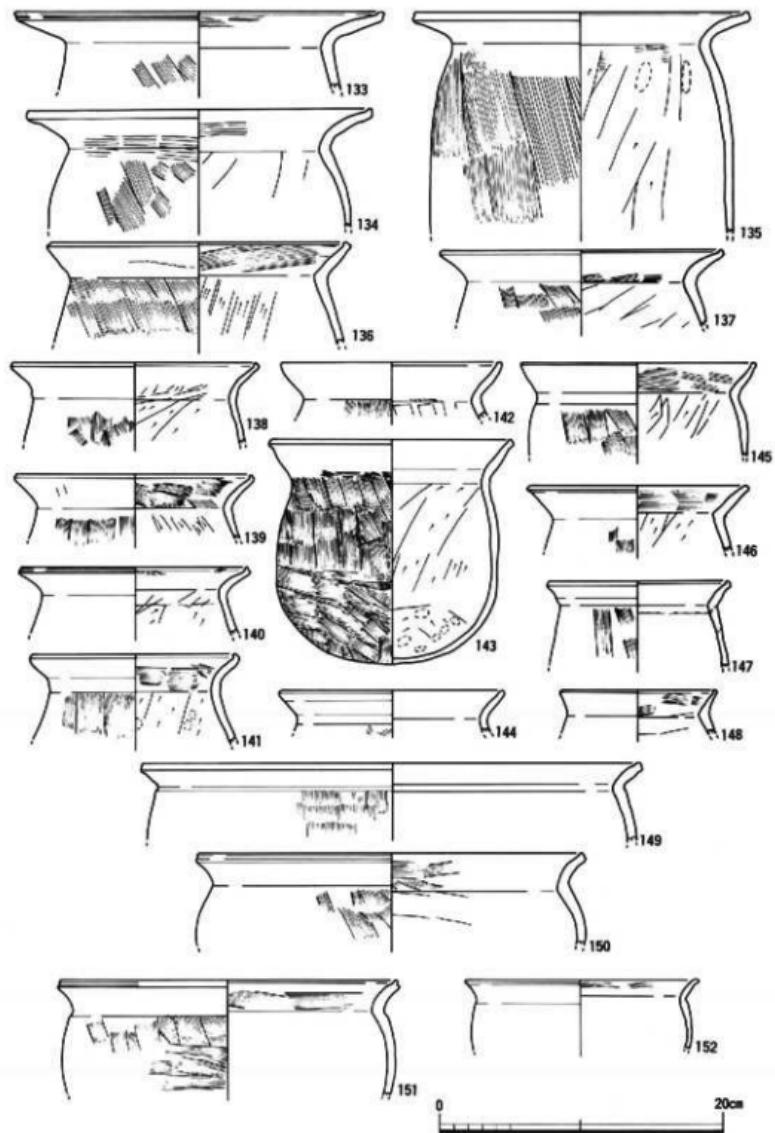
口径が体部最大径とほぼ同じもので、壺Aに比して口縁部が短い。口径からI~IVの4類に分類でき、これは壺AのI~IVに対応できる。

- I (149) : 口径35.9cm
- II (150) : 口径27.8cm
- III (151) : 口径24.4cm
- IV (152) : 口径16.6cm

壺Cは個体数も少なく、器種設定をするにはやや無理があり、後述する鍋Aの一種かも知れない。調整は口縁部ヨコナデで、150・151は内面ハケ。体部は外面ハケ、内面ナデである。口径IVの152は体部ナデで、色調・胎土が杯類に類似している。



第18図 S D 201出土遺物〈土師器壺A③〉(S = 1 / 4)



第19図 SD 201出土遺物〈土師器壺B～D〉(S=1/4)

◆土師器鍋（153～169）

全体の器形が逆台形を呈する広口のもので、平底鍋A及びBにあたる。形態からA・Bの2類に分類できる。

・土師器鍋A（153～167）

深目のもので、口径からI～IIIの3類に分類できる。

I (153～158)	：口径41.8cm～35.2cm
II (159～164)	：口径32.8cm～29.8cm
III (165～167)	：口径26.4cm～24.5cm

口縁部の形態は、端部が外側に引き出され、端面は水平な、あるいは外傾する面を成すものが多くを占め、他に丸く收めるもの（160）、やや肥厚するもの（166）がある。

調整は口縁部ヨコナデで、体部内面はナデ・板ナデ・ハケにより平滑に仕上げる。体部外面はナデ、主に横方向のナデで表面に凹凸の残るもの（162・164・167他）と、ハケを施すもの（157・160・165・166）がある。前者が小笠原氏分類の河内型鍋にあたるものであろう。口縁部内面をハケ調整するのは166のみで、他に比して口縁部が短い。153は体部外面を削っている。

三角形把手（おそらく一対）を有するものがあり、すべて貼付けによるものである。

154・156が砂粒をあまり含まない密な胎土で淡褐色系、他は褐色～赤褐色系である。

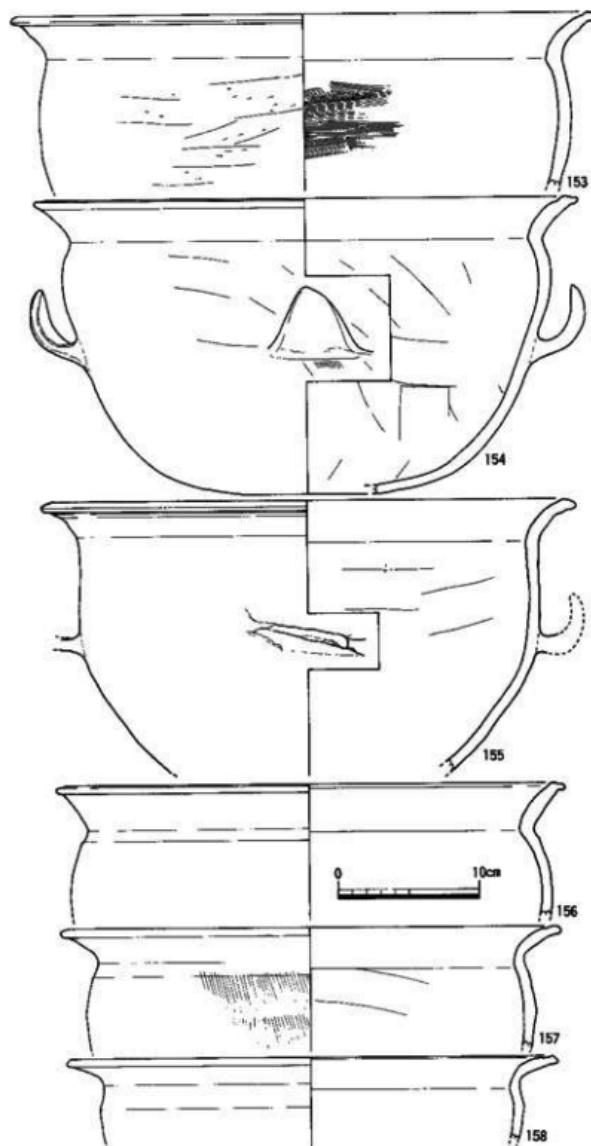
166は口縁部が全周遺存するもので片口を有している。約半個体部分の内面には炭化物が厚く付着しており、約7m離れて出土したもう半個体にはその状況は全くない。破損したのち半分を何かに再利用したものと思われる。

・土師器鍋B（168・169）

鍋Aに比して浅いもので、口径からI・IIの2類に分類できる。

I (168)	：口径42.0cm
II (169)	：口径34.0cm

口縁部の形態はいずれも端部をつまみあげるもので、壺のa形態にあたる。168は口縁部内面ハケで、体部外面のハケは上位が縱方向、下位が横方向である。体部内面は横方向に削っている。169は四方向に三角形把手を貼付けるもので、把手とその上方の口縁部～体部間に連続する上下方向の穿孔がある。体部内面はハケ後ナデである。淡灰褐色を呈する。



第20図 SD 201出土遺物〈土師器鍋A①〉(S = 1 / 4)

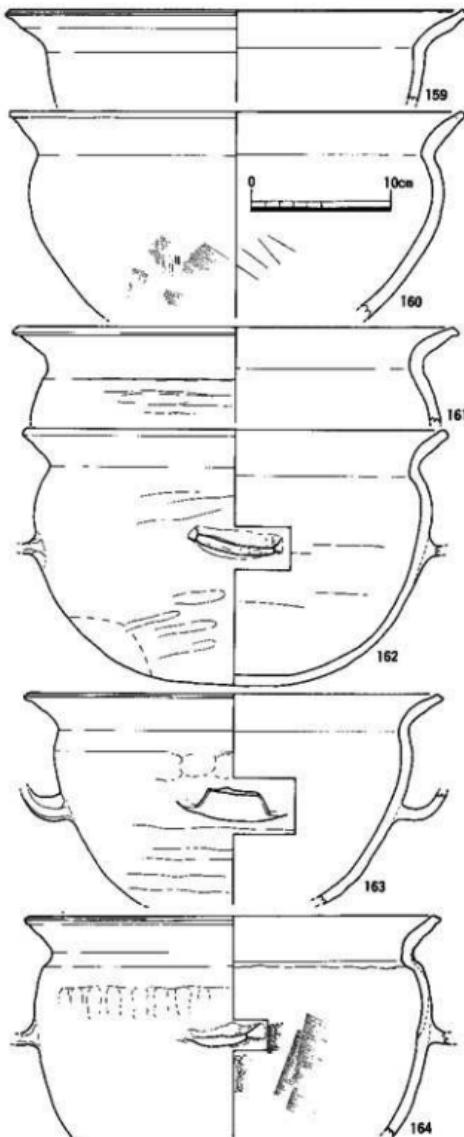
◆土師器羽釜 (170~190)

口縁部と体部の間に鉢を有する長胴の甕である。口径から I ~ IV の4類に分類できる。

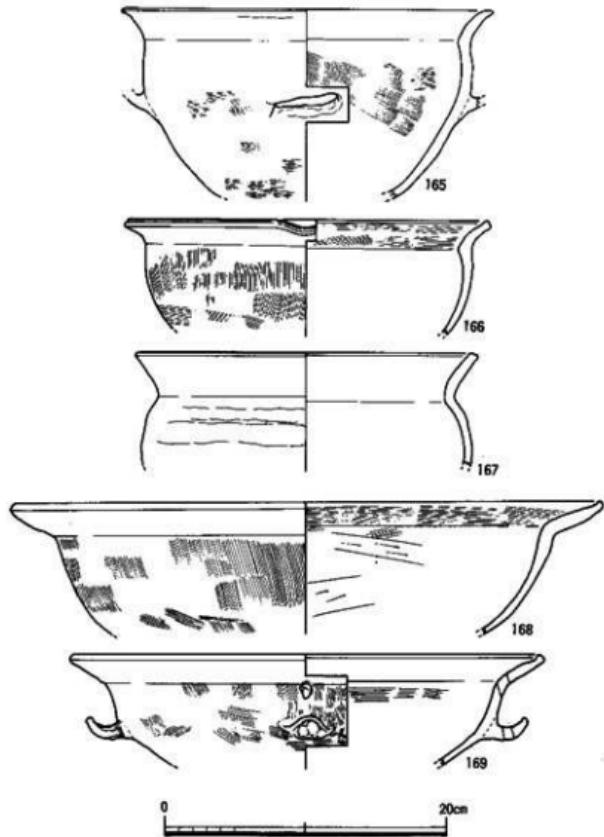
- I (170) : 口径約32cm
- II (171~184) : 口径約28cm
- III (185~189) : 口径約24cm
- IV (190) : 口径18.0cm

鉢径によって分類した場合、口径でIとした170はIIに含まれる。従って法量では3類に分類されると捉えてよいであろう。

形態は砲弾形を成し、体部にわずかに張りをもつものもある。調整はおおむね口縁部外面～鉢部ヨコナデ、体部は外面ハケ、内面はナデで、下半には指頭圧痕が残るというものである。口縁部内面はヨコナデとハケがみられる。口縁端部は丸く収められるもの、面を持つもの、肥厚するものと様々であるが、一個体中でも部分によって異なるものがみられ、分類はしていない。口縁部外面に粘土接合痕を残すものが多くみられる(177・181他)。色調では二種類に分かれるようで、170・172・175・176・184・188の6点が灰黄褐色系、他が褐色～赤褐色系を呈する。いずれもいわゆる牛駒西麓産の胎土のものと思われる。



第21図 SD 201出土遺物〈土師器鍋A②〉(S = 1 / 4)



第22図 SD 201出土遺物〈土師器鍋A③、B〉(S=1/4)

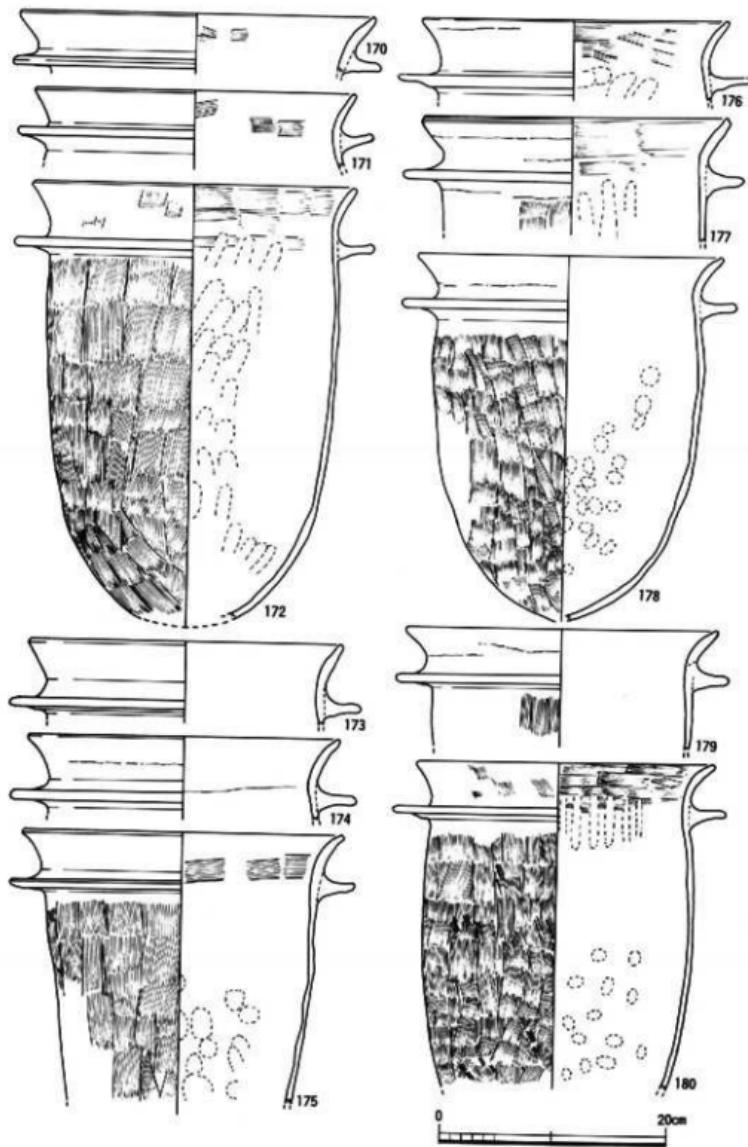
◆土師器板 (191)

調整は口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ナデで、口縁部内面下位にハケが残る。色調は淡灰褐色で、胎土中には砂粒を多く含む。他に精良な胎土をもつ別個体の底部がある。

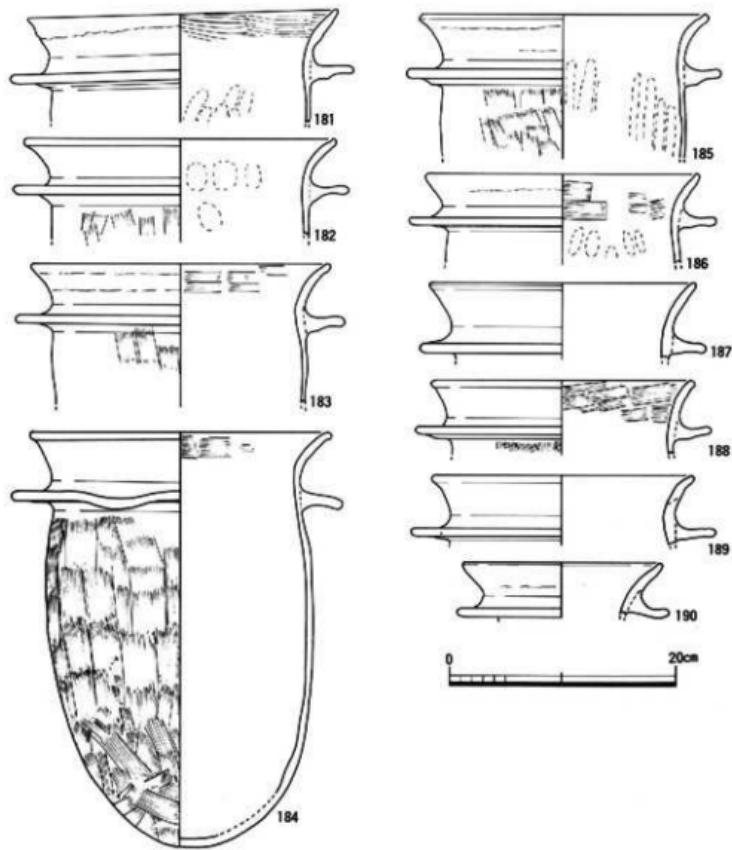
◆土師器竈 (192~195)

固化したもの以外に口縁部3種類、把手1種類がある。

192は口縁部外面ナデ、内面ヘラケグリ、体部外面ハケ、内面ナデ。195は焚き口に庇が付くタイプである。庇は内外面ハケ、口縁部は外面ハケ、内面ナデである。いずれも暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土のものと思われる。



第23図 SD 201出土遺物〈土師器羽釜①〉(S = 1 / 5)



第24図 SD 201出土遺物〈土師器羽釜②〉(S = 1 / 5)

◆土師器壺 (196~209)

形態と調整からA~Dの4類に分類できる。

・土師器壺A (196・197)

おそらく球形の体部を持つ精製の直口壺で、平城壺Aにあたる。196は口縁端部が肥厚し、調整は、口縁部ヨコナデ後外面に暗文状の縱方向ヘラミガキ、体部は外面ハケ後横方向のヘラミガキ、内面不明である。内面には煤が付着している。同一個体とも考えられる体部の197は、

挿入法による三角形把手を有し、外面ハケのち粗なヘラミガキ、内面縦方向のヘラケズリである。把手に黒斑がある。鍋の可能性もあるが、外面のヘラミガキ調整や、把手が鍋のもののように扁平でないことから壺とした。両方とも色調は赤褐色系で、砂粒の少ない密な胎土であり、杯類に類似する。

・土師器壺B (198~205)

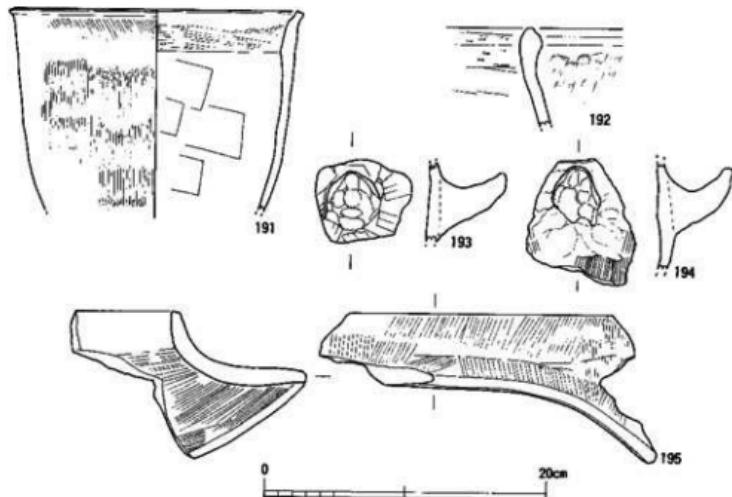
球形の体部と外反する口縁部からなり、肩が張り棱を成すものが多い。口径は7.6cm~13.6cmを測る。調整は主に口縁部ヨコナデ、体部ナデで、200・201は口縁部外面にハケを施す。199の体部外面は荒いハケであるが、タタキの可能性もある。赤褐色系で、202のみ暗褐色を呈する。199の外面には黒斑がある。

・土師器壺C (206)

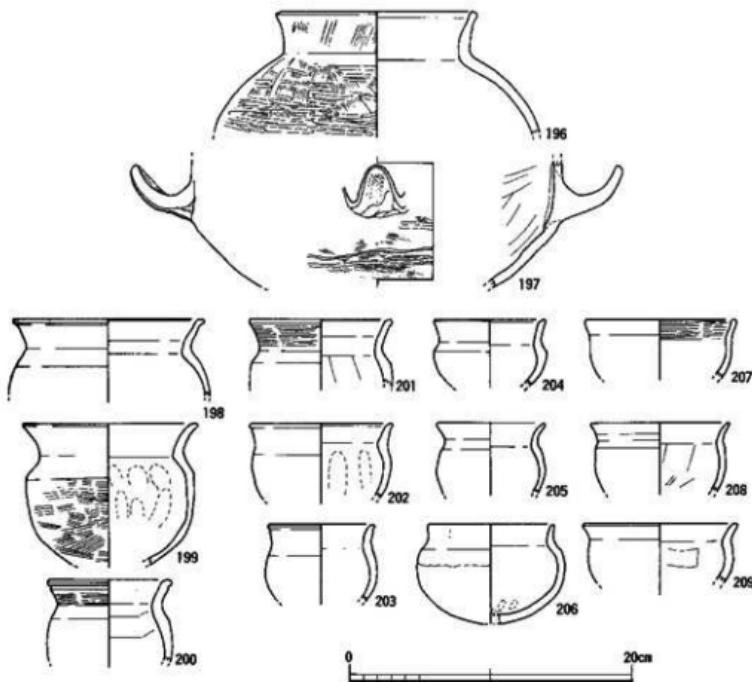
壺Bと同様肩が張るが、体部径が器高より大きい広口短頸のもの。調整は口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。赤褐色系。

・土師器壺D (207~209)

半球形の体部から口縁部が短く外反する広口の鉢状のもの。口径は10.0cm~11.2cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部ナデで、207は口縁部内面にハケを施す。207が淡褐色系、208・209が赤褐色系である。



第25図 SD 201出土遺物〈土師器瓶、壺〉(S = 1 / 4)



第26図 SD 201出土遺物〈土器器壹〉(S = 1 / 4)

◆須恵器杯身 (210~262)

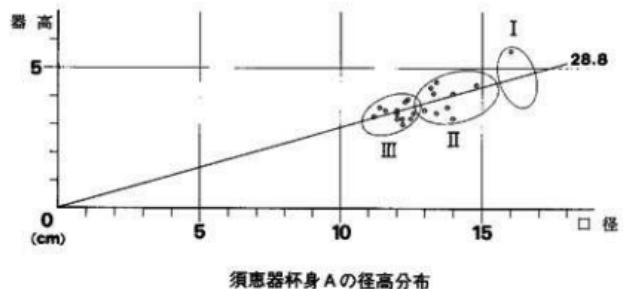
形態からA~Cの3類に分類できる。

・須恵器杯身A (210~233)

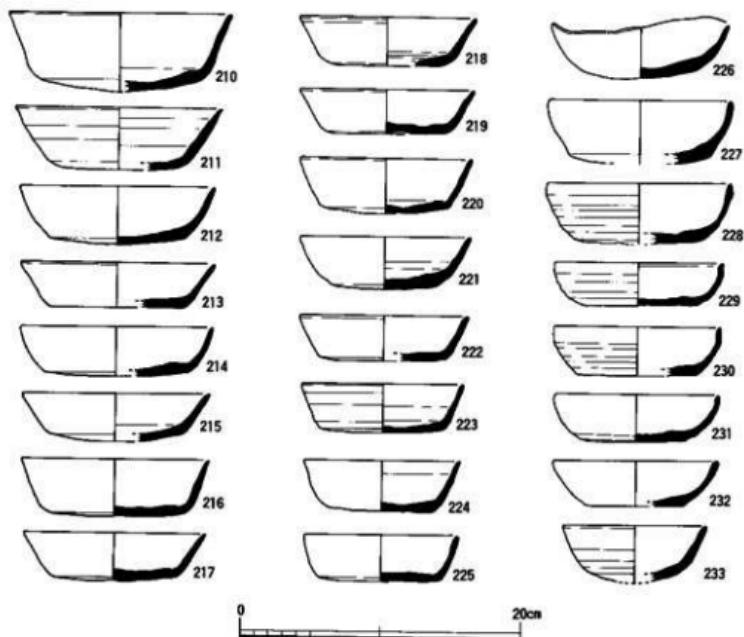
平坦な、あるいはやや丸みを帯びた底部から上外方に伸びる口縁部を持ち、平城杯Aにあたる。口径からI~IIIの3類に、形態からa~cの3類に分類できる。

- | | | |
|--------------------------|-------------------|---------------------------|
| I
(210) | : 口径16.0cm | (径高指数35.0) . . . 平城杯A II |
| II
(211~217・226~228) | : 口径14.8cm~13.0cm | (径高指数28.6) . . . 平城杯A III |
| III
(218~225・229~233) | : 口径12.6cm~10.4cm | (径高指数28.4) . . . 平城杯A IV |
- a (210~225) : 口縁部が直線的に伸びるもの
- b (226~232) : 口縁部がやや内湾するもの
- c (233) : 底部が丸く、口縁部との境が不明瞭なもの

口縁c形態とした233は7世紀前半の平城杯II蓋かもしれない。また226は歪みが大きく正確な法量は不明である。この2点を除くと、口径は11.2cm～16.0cm、径高指数は23～35に取まり、平均値は28.8である。径高分布からは後述する杯Bのような明確な分化は認められない。なお器高をみると、器高3.6cm前後を境に分けることが可能で、これは平城IIの段階で確立するとされる器高の高低による分化とも捉えられる。



須恵器杯身Aの径高分布



第27図 S D 201出土遺物〈須恵器杯身A〉(S = 1 / 4)

b 形態のものは口径約13.3cm・指指数33のもの(227・228)と、約12cm・径高指指数27のもの(229~232)との二種類に分けられる。そのうち228~230は、口縁部外面に回転ナデによる凹凸が明顯である。

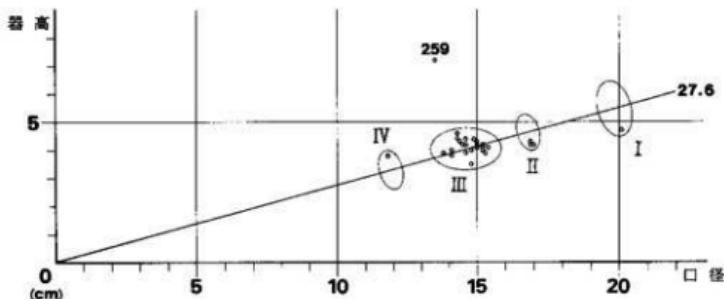
調整は回転ナデで、のちに底部内面にナデを加えるものがあり、中央部を一方向にナデるものは211・214・219・220・223・225・227・230・231の9点で、210は底部内面全面を乱方向にナデている。底部外面は、前記した口縁部門凹を成す3点(228～230)がヘラ切り未調整である。他はナデであるが、ヘラ切り痕を残すものが多く半数以上の11点ある。210は平城報告区のSD1900A出土土器にある『灰白色の・・・底部がやや尖り、底部内面を必ず乱方向になでつける特色を持った一群』に類似しているようである。

色調は大まかに、色調1：灰色～青灰色、色調2：灰色～淡灰色、の2種類に分けられ、後者が多い。色調1は6点(211・222・223・224・225・231)あり、焼成良好の硬質なもので、223・224は断面赤褐色を呈する。224は他とは様相が異なるもので、全面に灰がかぶり、内底面には一部自然釉がたまる。色調2のものにはやや焼成不良のものが多く、特に212・232は土師器の様相を呈している。210・225の外面には火捺が認められる。

· 夏商周器物篇 B (234~260)

杯身Aの底部に高台を付したもので、平城杯身Bにあたる。高台は底部端からやや内側に付される。口径からI~IVの4類に分類できる。

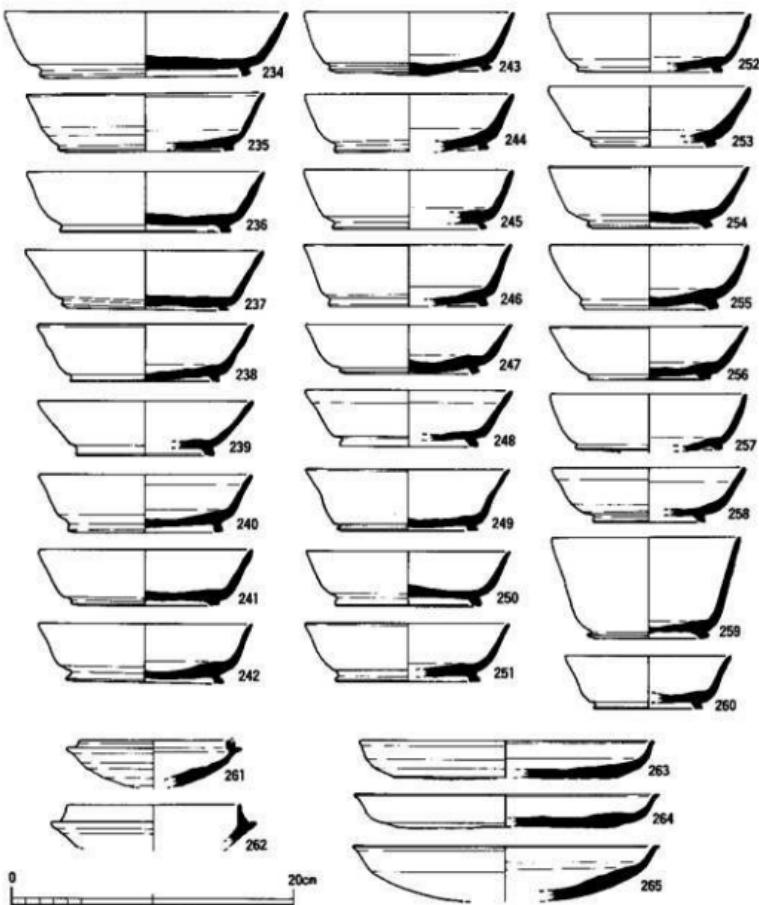
I (234)	口径20.1cm (径高指数23.4)	平城杯B I
II (235~237)	口径17.0cm~16.9cm (径高指数25.0)	平城杯B II
III (238~259)	口径15.4cm~13.5cm (径高指数28.0: 259を除く)	平城杯B III
IV (260)	口径11.8cm (径高指数32.2)	平城杯B IV



須恵器杯身Bの径高分布

径高指数は23~32に收まり、平均値は27.6で、口径の大きいものほど数値は小さい。口径の分布は杯Aとは異なり分化が明確である。数量的には口径Ⅲのものが突出して多い。なおⅢに分類される259は径高指数53.3を測る特殊なもので、計算には含んでいない。平底椀Bにあたるものかもしれない。

口縁部の形態は杯身Aのa形態のみで、b形態にあたるものはない。高台は内側で接地するものが約半数の13点、外側で接地するものが5点、ほぼ水平な端面のもの9点となる。



第28図 SD 201出土遺物（須恵器杯身B・C、皿）(S = 1/4)

調整は杯身Aと同様で、底部内面のナデは、中央部を一方向にナデるものが4点(248・249・257・259)、全面を乱方向にナデるものが8点(234~239・241・247)で、杯身Aに比して後者の割合が高く、また口径の大きいものに後者が多いといえる。底部外面ナデで、ヘラ切り痕をナデ消しているものは4点(234・243・248・254)、他は未調整あるいは、ヘラ切り痕が残るものである。250の底部外面中央には平行タキ状の工具痕が残る。

236・245・252の内面には煤が付着しており、使用方法が注目される。

色調は、杯身Aの色調1にあたるものが12点、色調2が15点であるが、区別がつけ難いものが多い。色調2のうち焼成不良のものは234・243・259の3点である。全体的にみて杯身Aより焼成が良好なものが多いといえる。

・須恵器杯身C(261・262)

古墳時代から続く形態で、平城杯身日にあたる。261は7世紀初頭、262は6世紀後半のものであろう。

◆須恵器杯蓋(266~285)

口縁部の形態からA・Bの2類に分類できる。また2類共通で口径からI~Vの5類に、天井部の形態からa~cの3類に分類できる。口縁部出土総数でみると、口縁A形態が55%となり、ほぼ同数といえる。なお天井縁部で屈曲する平城杯蓋A形態のものは出土していない。

- | | | |
|---------------|-------------------|--------------|
| I (266~268) | : 口径19.9cm~18.6cm | ··· 平城杯B II |
| II (269~272) | : 口径17.1cm~16.8cm | ··· 平城杯B III |
| III (273~279) | : 口径16.4cm~14.3cm | ··· 平城杯B III |
| IV (280) | : 口径13.2cm | ··· 平城杯B IV |
| V (281~285) | : 口径11.7cm~10.6cm | ··· 平城杯B V |

- | |
|--|
| a : ほぼ水平な天井部から外下方に傾斜して口縁端部に至る(266~267・269~273・284~285) |
| b : 水平な天井部で、aに比して器高が低く、天井部中央内面がほぼ接地する(268~274) |
| c : 天井部から口縁部が全体に丸い(275~283) |

・須恵器杯蓋A(266~274)

口縁端部が下方に屈曲するもので、端部は短く伸びるもの(266~271他)と、わずかに下方に肥厚させたようなもの(270~274他)がある。口径はI~IIIの3類があり、天井形態cのものはない。

・須恵器杯蓋B(275~285)

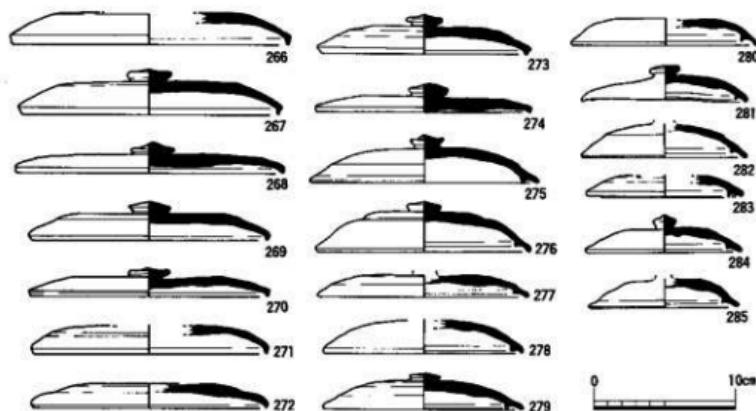
口縁部内面にかえりを有するもので、かえりの形態には断面三角形のもの(275~284他)とやや下方に屈曲するもの(279~282他)がある。口径はIII~Vの3類があるが、分布をみるとIII~IVは杯蓋Aのように明確には分かれない。完形品は281の1点のみである。

杯蓋 A・Bについて口縁部形態と口径の関係をみると、口径 I・IIはA形態に、口径IV・VはB形態に限られる。また天井C形態は口縁B形態のものに限られる。

杯蓋の口径から、それとセットとなる杯身の口径を推定した場合、口径I=杯身BⅡ、口径II・III=杯身BⅢ、口径IV=杯身BⅣというセット関係がおおむね考えられる。しかし杯蓋の口径分布をみると、約1cm刻みの分布となり、杯身Bのそれに比べてばらつきが大きく、分化が明確ではない。大は小を兼ねるというふうに、杯蓋の規格があいまいであったのかもしれない。なお口径Vの杯蓋B Vには対応する杯身Bがない。このことから杯蓋B Vは平城杯G蓋にあたる可能性があり、284のつまみが宝珠形を呈しているということもそれを示唆するものである。この場合杯身Aとしたもののうち口径約11cmを測る224・225が平城杯Gにあたるのかもしれない。

調整技法は口縁部回転ナデ、天井部は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。276の天井部外面はヘラ切り未調整である。杯身と同様内面にナデを加えるものが多く、加えないものはAでは1点(273)、Bでは4点(276・278・280・281)である。ナデには中央部のみを一方に向にナデるものと、広範囲を乱方向にナデるものがあり、前者はAに1点(270)、Bに4点(277・279・284・285)でBに多く、後者はAに5点(267・268・269・272・274)、Bに1点(275)でAに多い。

色調は大まかに、杯身の色調1にあたるものが14点、色調2が6点である。形態別にみるとAでは色調1が4点、色調2が5点、Bでは色調1が10点、色調2が1点である。焼成はおお



第29図 SD201出土遺物〈須恵器杯蓋〉(S=1/4)

むね良好で、暗灰色を呈する285は特に硬質で、275・282・285は断面赤褐色を呈する。278のみがやや焼成不良である。

外面に灰をかぶるものがA・B両形態に3点づつあり（268・270・274・276・281・285）、またB形態には内面にかぶるものが3点（275・282・283）ある。

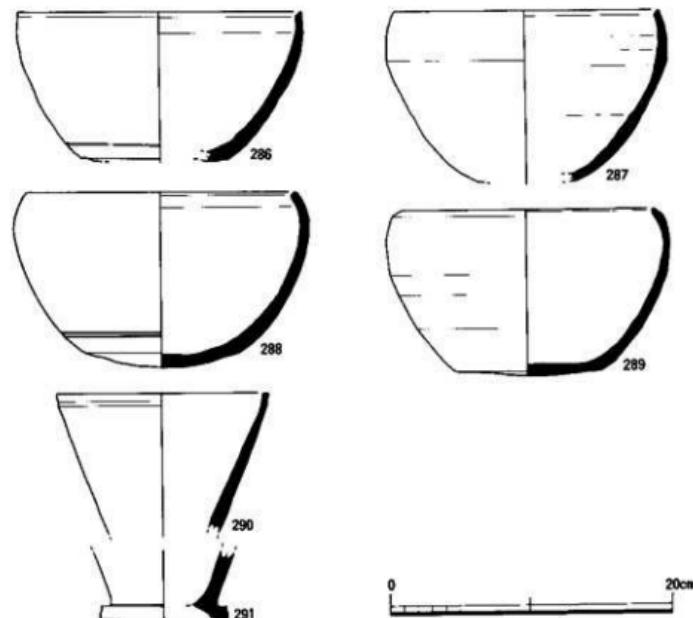
◆須恵器皿（263～265）

底部の形態からa・bの2類に分類される。口縁部の形態は共通で、口縁端部が外方に短く引き出される。平底皿Cにあたる。なお高台を有するものは出土していない。

a（263・264）：底部が平坦なもの。

b（265）：底部が丸いもの。

263は底部と口縁部の境が稜を成し、264は凹状を呈する。調整は口縁部回転ナデ、底部は外面回転ヘラケズリ、内面ナデである。b形態の265は焼成がやや不良である。図化したもの以外にa形態の底部が2点ある。



第30図 SD201出土遺物〈須恵器鉢〉(S=1/4)

◆須恵器鉢 (286~291)

形態からA・Eの2種に分類できる。

・須恵器鉢 A (286~289)

土師器鉢Aと同じ形態のもので、平城鉢Aにあたる。口縁部の形態も共通しているようだ、A bとA cがあり、A cの方が口縁部への内湾が強い。口径18.0cmから20.2cmにおさまり、ほぼ同じ規格のものといえよう。なおこの口径はいずれも土師器鉢Aより小さいといえる。調整は回転ナデで、体部外面下位～底部は回転ヘラケズリ、底部内面ナデである。286・288・289は外面の色調が上半と下半で異なり、上半が灰褐色が強い。286・288は焼成不良で、286は灰白色、288は淡灰褐色を呈する。

・須恵器鉢 E (290・291)

外方に張りだす円盤状の底部をもつ鉢で、平城鉢Fにあたる。2点は同一個体の可能性が高い。調整は回転ナデ。焼成不良で瓦質に近いものである。

◆須恵器壺 (292~306)

形態からA・Bの2類に分類できる。(306)は体部の破片であるが、須恵器杯蓋Bが窯壁と共に付着している。

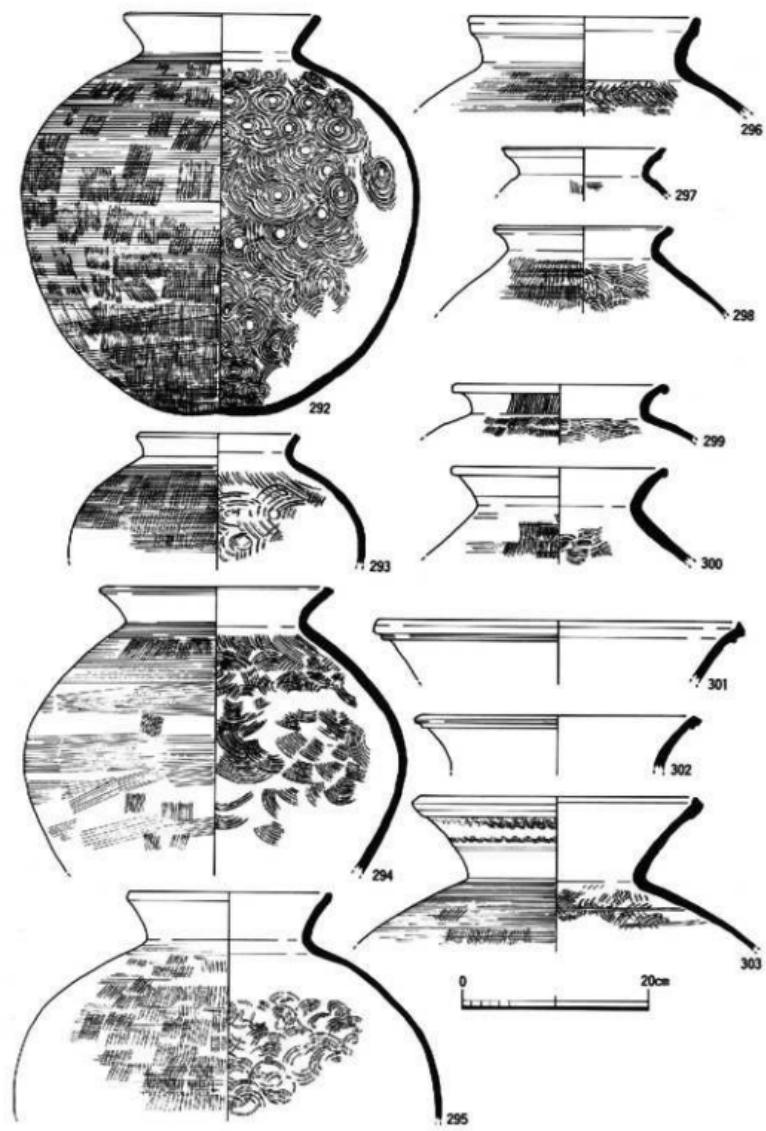
・須恵器壺 A (292~304)

全容を知れるものは少ないが、球形の体部から外反する口縁部が付くもので、平城壺Aにあたる。口縁部の形態にはa～fの6種類がある。

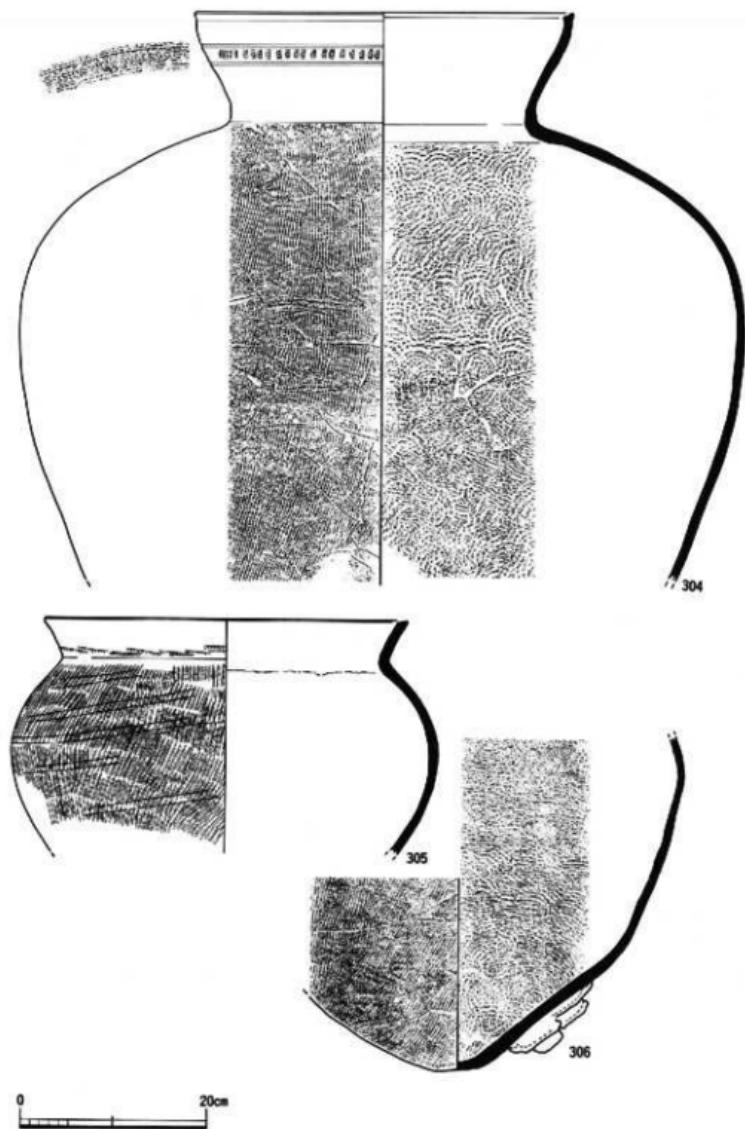
- | | |
|-------------|------------------------------|
| a (292) | : 口縁端部が丸く収まる |
| b (293・294) | : 口縁端部が外傾する面を持つ |
| c (295~298) | : 口縁部上位で外面に稜を成し、端部は短く上方に屈曲する |
| d (299・300) | : 口縁端部が玉縁状を成す |
| e (301~303) | : 口縁端部が外側に方形に肥厚し、外面には凹線を施す |
| f (304) | : 口縁部上位で内湾し、端部は内傾する凹面を呈する |

口縁部形態と口径との関係をみると、a～d形態が口径約25cm以下、c形態が約30cmと約40cm、f形態が約40cmとなり、関連性が窺える。

調整はいずれも、口縁部回転ナデ、体部は外面縦方向の平行タタキ後カキ目、内面円弧あるいは同心円タタキというものである。カキ目は密なものと粗なものがある。内面は後にナデするものがあるが、完全にはナデ消されていない(295・297)。299は口縁部外面に平行タタキの痕跡が残る。口縁部外面に装飾を施すものがあり、303は波状文、304は二条の凹線間に櫛による刺突文を施している。293・295は焼成がやや不良である。304は口縁部と体部の一部がかなり離れて(約5m)出土している。



第31図 SD 201出土遺物〈須恵器壺A～E〉(S=1/6)



第32図 SD 201出土遺物〈須恵器壺F・G〉(S=1/6)

・須恵器壺B (305)

おそらく口径が器高より大きくなる広口の壺で、平城壺Bにあたる。口縁端部はやや内傾する凹面を成す。調整は壺Aと異なり、体部内面はナデであり、タタキを完全にナデ消したものであろう。

◆須恵器壺 (307~322)

形態からA~Fの6類に分類した。

・須恵器壺A (307~315)

肩が張って稜を成す長頸壺で、平城壺Kにあたるものである。底部の高台の有無は不明であるが、平城壺Kでは両方が認められ、312~315を壺Aの底部とした。

口部は回転ナデで、308の颈部内面下位は未調整である。外面にカキ目を施す307は平瓶の口縁部かもしれない。いずれにも灰がかぶる。

底部は回転ナデで、314の体部外面下位は回転ヘラケズリ、315の底部内面は不定方向のナデである。310の肩部には凹線が巡る。高台はいずれも肥厚して内側で接地するもので、313の高台上位には3方向に穿孔が施され、藤原宮S E1105出土品に類似がある。315は胎土中に黒色粒を多く含み、これが焼成の際に発泡している。313・315を除いて灰がかぶる

・須恵器壺B (316)

肩が張って稜を成す広口短頸壺で、平城壺Bにあたる。肩部には壺A (310) と同様に凹線が巡る。口縁端部は内傾する平面を成す。調整は回転ナデで、底部端はヘラケズリにより余分な粘土を削り取ったような状況である。底部外面はヘラ切り未調整で、ロクロから切り離す際にヘラを差し込んでこじた痕跡が認められる。このため安定が悪い。灰色~灰褐色を呈し、灰がかぶり、肩部には緑色の自然釉がたまる。

・須恵器壺C (317)

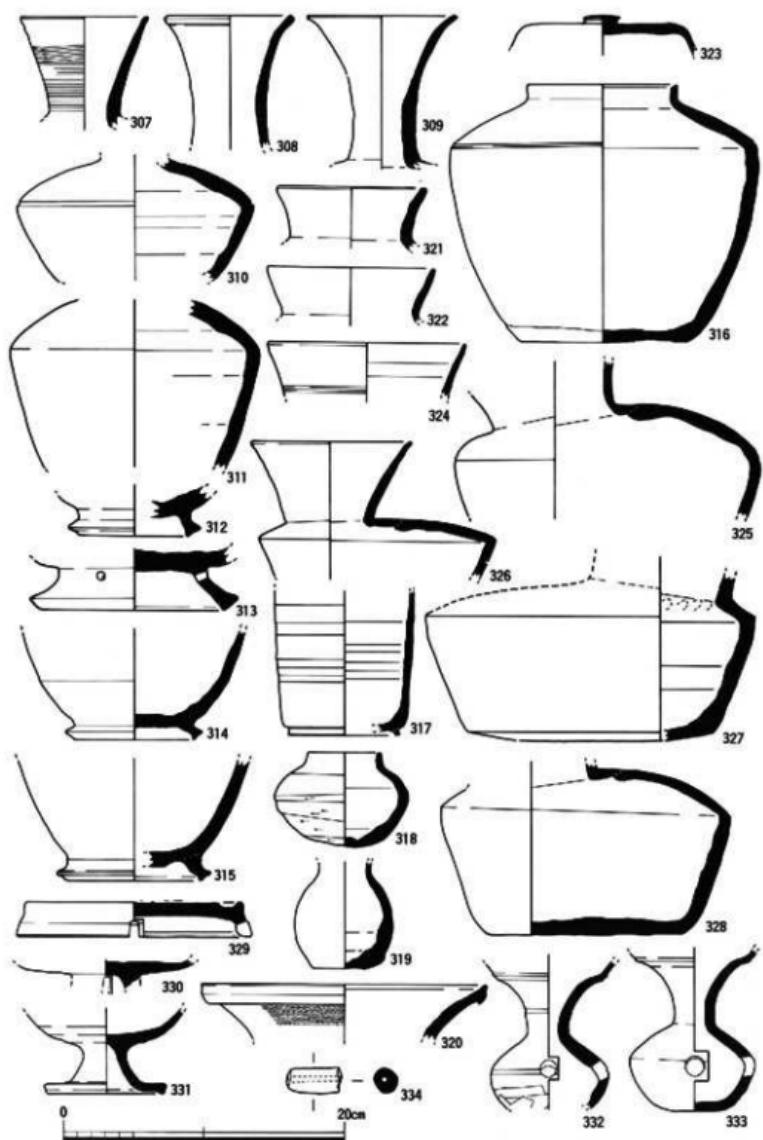
全容は不明であるが、筒形の体部に小さな高台を付すもので、薄手の精製品である。調整は回転ナデで、体部外面最下位のみ回転ヘラケズリである。胎土密で、外面淡褐色、内面淡灰色を呈し、外面に灰がかぶる。

・須恵器壺D (318・319)

小型品で、平城壺Cにあたるものである。調整は、318は回転ナデで底体部外面回転ヘラケズリ、319は外面ナデ、内面回転ナデで、318には灰がかぶる。318は暗灰色、319は青灰色を呈し、両方とも焼成は良好である。318は完形品である。

・須恵器壺E (320)

広口壺で、口縁部外面に細かい波状文が施される。暗灰褐色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。古墳時代のものであろう。



第33図 SD 201出土遺物（須恵器壺、他）(S = 1 / 4)

・須恵器壺F (321・322)

口縁部のみで器種は不明である。321は頸基部内面に円弧タタキらしい工具痕が認められ、横瓶の可能性がある。322は飛鳥壺Fに類似する。灰青色を呈し、322には灰がかぶる。

◆須恵器壺蓋 (323)

平坦な天井部から内湾して下外方に伸びる口縁部に至る。口縁端部の形態は不明であるが、平城壺A蓋にあたるものである。調整は回転ナデで、外面には灰がかぶり、内面には火拂が認められる。

◆須恵器平瓶 (324~328)

325は肩に丸味を持ち、326~328は棱を成す。天井部の扁平な326が平城平瓶bに、他のが平城平瓶aにあたるものであろう。提梁を持つものは出土していない。天井部の中央閉塞口の直径は326が約2cm、325が2.5cm、328が4cm、327が7cmで、326は頸部取付け部が閉塞口まで及んでいない。調整は回転ナデで、底部端は壺Bと同様ヘラケズリ、底部外面はナデである。いずれにも灰がかぶる。

◆須恵器硯 (329)

器高2.5cm・底径16.9cmを測る背の低いもので、円面観のうち無堤式の低圓足硯に分類されるものである。²周縁と陸部がほぼ同じ高さで、海部は浅い。硯面はわずかに凹状を呈する。圓足端部は内側がヘラケズリで面取りされ、端面はわずかに傾斜し外側で接地する。圓足には端部までおよぶ長方形スカシが4方向に切り込まれる。圓足端面を除いて全面に灰がかぶる。

◆須恵器高杯 (330・331)

形態からA・Bの2類に分類できる。

・須恵器高杯A (330)

平坦な底部に脚部が付き、脚部には4方向にスカシが施される。口縁部は欠損しているが、杯部は皿状の形態が考えられる。杯底部外面回転ナデ、内面不定方向のナデ。焼成は不良で淡灰褐色を呈する。

・須恵器高杯B (331)

底部の丸い杯に短い脚部が付くものである。調整は回転ナデで、杯底部内面はナデ。淡灰青色を呈する。

◆須恵器甌 (332・333)

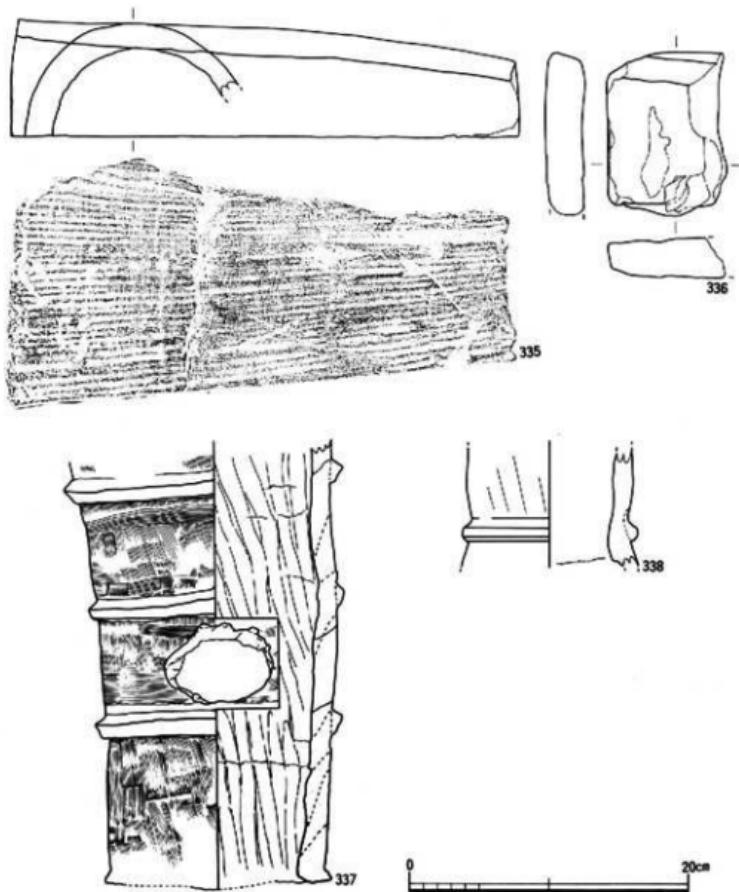
ほぼ同じ形態のものが2点あり、332は体部に凹線が巡る。底体部の調整が異なり、333は回転ヘラケズリ、332は静止ヘラケズリである。332は淡灰色、333は青灰色を呈し、332には灰がかぶる。332は口縁部に波状文を施しているようであるが明確ではない。甌の最終段階にあたるものであろう。

◆不明須恵器 (334)

管状のもので、土錐かもしれない。直径約3.5mmの棒に粘土を巻き付けて製作されたものと思われ、表面はナデである。

◆提瓶

図化しえなかったが提瓶の体部が1点ある。ボタン状の把手を付すものである。



第34図 SD 201出土遺物（瓦・埴輪）(S=1/4)

◆瓦（335・336）

335は行基葺き丸瓦で、暗灰色を呈する。法量は全長36.8cm・幅約16.3cm・高さ8.3cmを測る。凹面は布目で、中央やや前方に布の縦目が認められる。凸面は縱方向のナデで、後端部は横方向ナデ。端部はヘラケズリ。平瓦（336）は焼成不良で遺存が悪く、調整は不明である。端部はヘラケズリである。圓化しなかったが平瓦がもう1点出土している。335と同様、暗灰色を呈し、焼成も良好で、凹面布目、凸面ナデのものである。

◆円筒埴輪（337・338）

337は上部と基底部1/2を欠く。基底部径16.1cmを測る。二段目と四段目に一对のいびつな円形スカシを有する。外面調整は一次タテハケ、二次は二・三段目に粗にヨコハケを施す。内面は縱方向ナデで、粘土接合痕が明瞭に残る。淡褐色を呈し、器壁は摩滅しているが、須恵質に近いもので、黒斑は認められない。全体に雑な造りで、川西氏編年のV期にあたるものである。338はナデ調整で、径が小さく形象埴輪の基部かもしれない。

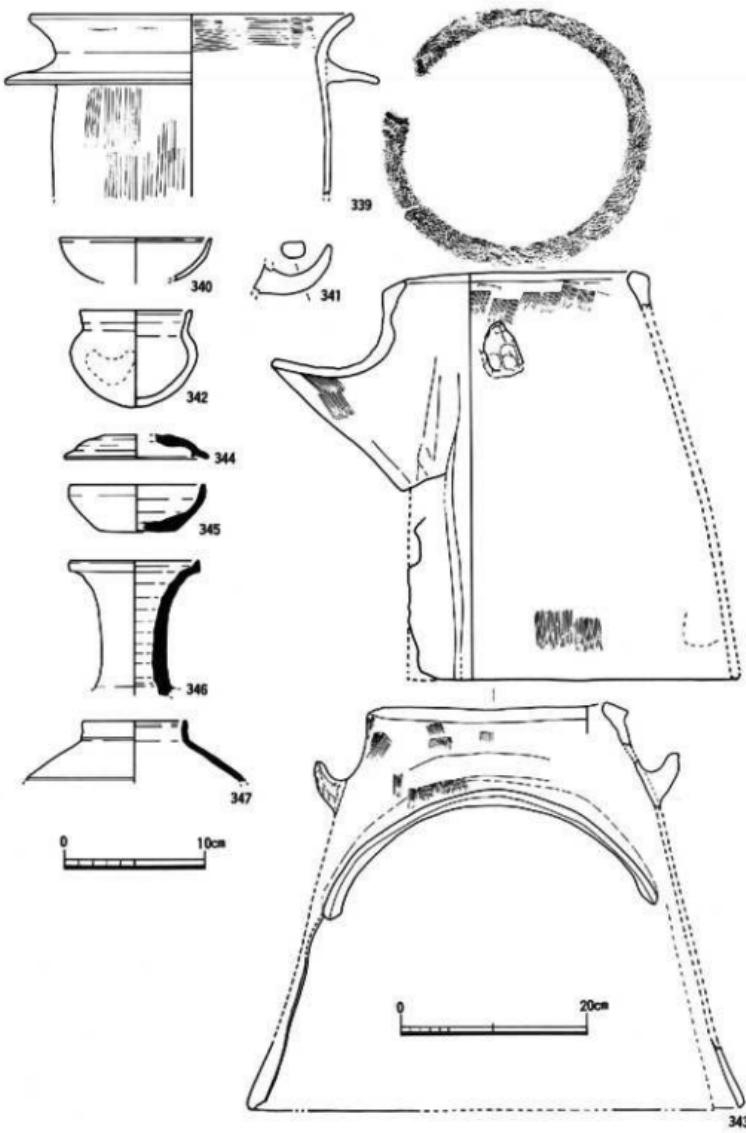
2) S O201出土遺物（339～347）

出土遺物には土師器の羽釜・杯B・把手付椀・壺A・甕、須恵器の杯身A・杯蓋B・壺A・壺Bがあり、他に弥生時代後期～布留式期の土器片が出土している。

土師器杯B（340）は口縁b形態で、平城杯Cにあたる。径高指数は約30で、暗文は不明である。壺A（342）は口縁部ヨコナデ、底体部ナデで、体部外面に黒斑を有する。羽釜（339）は長めの鋸がやや下向きに伸び、これはS D201出土品にはみられなかった形状である。甕（343）は体部中位の破片が少なく、図上で復元したものである。なお圓化しなかったが焚口裾部の下方への突起部も出土している。法量は復元器高43.2cm・口径28.5cm・口縁部内径23.6cm・底幅53.5cmである。把手の向きの上下は定かではない。外面は縱方向のハケ調整で、口縁部上面には青海波文（円弧タタキ）を施している。褐色を呈し、生駒西麓産の胎土のものである。

須恵器杯蓋B（344）は天井部内面中央をナデしており、暗灰色を呈し、外面に灰がかぶる。杯身A（345）は口縁b形態で、口径9.8cm・器高3.3cmを測り、径高指数は34である。S D201出土品より口径が小さく平城杯Gである可能性が高い。底部は外面ヘラ切り未調整で、内面は中央をナデしている。壺B（347）は蓋を被せて焼成しており、肩部のみに灰がかぶる。

出土遺物は少量であるが特徴としては、土師器では杯Aが無い、杯Bの径高指数30、把手付椀の存在、羽釜の形態がS D201のものより古相を呈する。また須恵器では杯蓋がB形態であることなどが挙げられる。これらのことから、造構の時期はS D201より古く、飛鳥Ⅲ（7世紀第3四半期）頃にあたるものと思われる。



第35図 SO201出土遺物 (S=1/4、1/6)

第3章　まとめ

今回の調査では、溝 S D 201からコンテナ箱に約30箱に及ぶ飛鳥時代～奈良時代の遺物を検出した。これらの遺物は溝の西岸から底部にかけて積み重なるように出土している。この出土状況からこの土器は、西側から溝に投棄されたものと考えられ、西側に集落域が広がっていたのは確実であろう。

これらの土器の年代であるが、編年の確立されつつある藤原宮・平城宮土器と比較すると、
・杯類の径高指数をみると、土師器杯A=26.3、土師器杯B（平城杯C）=22.4、須恵器杯A=28.8、須恵器杯B=27.6であり、平城Iの資料に非常に近似している。

・土師器では、杯の技法はほとんどb1手法で、口縁端部の巻き込みが小さく、また平城IIで盛行する連弧暗文を施すものが認められない。さらに平城IIでなくなるとされる小型の杯A IIIがまだ存在している。

・須恵器では、杯身はB IIIが多くを占める。杯蓋では口縁端部が下方に屈曲するAと、かえりを有するBが共存し、平城IIで出現する縁部が屈曲する平城A形態のものがみられない。また平城Iで出現する提梁を持つ平瓶がなく、平城IIで出現する尖底の鉢Aがない。

これらの特徴からこの土器群は、やや古相の土器を含むものの、平城Iの資料として捉えられ、7世紀末から8世紀初頭の年代が与えられよう。

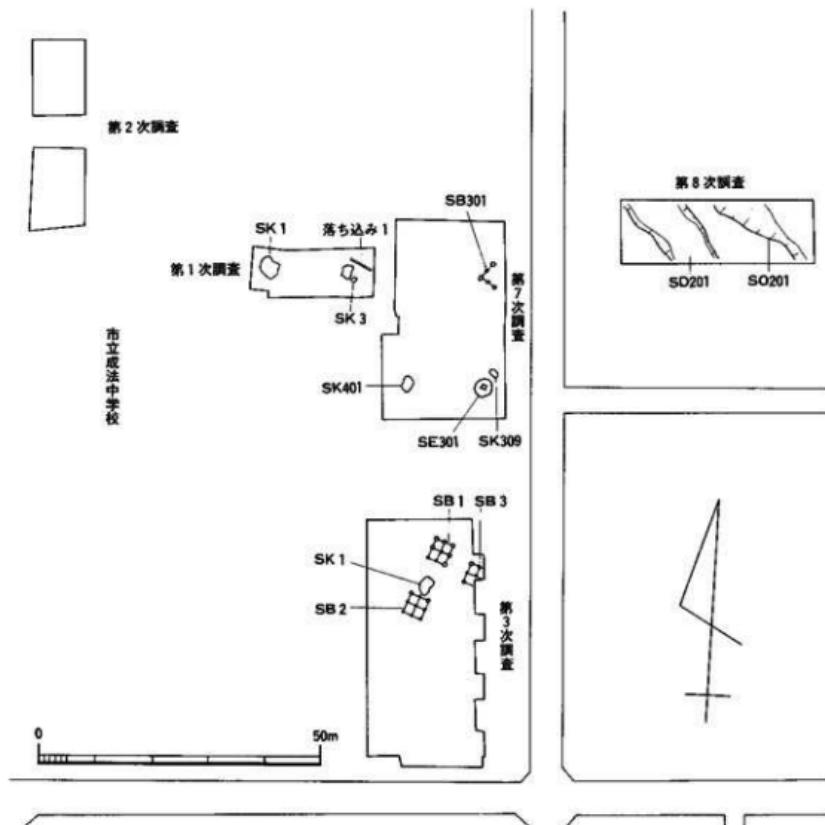
今回の調査地西方の市立或法中学校敷地内では5度の発掘調査が実施されており、そのうち第1・2・3・7次調査（以下、第_次）で、飛鳥時代～奈良時代の遺構・遺物が検出されている。今回の第8次も含めて、遺構や包含層からの出土遺物の年代をみると次のようになる。

- ・第1次（SK 3・落ち込み1）、第7次（SK 309・包含層）—飛鳥時代。
- ・第8次（S O 201）—飛鳥III頃。
- ・第3次（SK 1）—飛鳥III～IV
- ・第7次（SE 301）—奈良時代初頭頃
- ・第2次（包含層）、第8次（S D 201）からは、積極的に平城IIまで下らせうる土器は出土していない。
- ・第1次（SK 1）、第3次（包含層）—平城IIまで。
- ・第7次（包含層）—奈良時代末頃。

これを時代順にまとめると、第1・3・7・8次（飛鳥時代～平城I）→第2・7・8次（平城I）→第1・3・7次（平城II）→第7次（奈良時代末）となる。遺構の資料のみではなくやや無理があると思われるが、以上のことから飛鳥時代から奈良時代における集落域の変

遷を概観すると、平城IIの段階には縮小し、奈良時代末頃には移動、あるいはさらに縮小したことが推察できる。この場合、第8次(SD201)の多量の平城Iの土器は、西側への集落移動、あるいは縮小に際して廃棄されたものと捉えられる。なお、SD201の東に位置するSO201は飛鳥III頃と思われ、この調査地内でも西への集落の移動が窺える。

第8次の北方約280mでは、中世以前に埋没した大規模な河川の存在が確認されている。この河川は南北方向の流路が想定されており、第8次はこの河川流域に位置するものと考えられる。そしてこうした集落の移動や縮小は、この河川の氾濫の影響によるとも考えられよう。



第36図 成法寺遺跡における飛鳥～奈良時代の主な遺構 (1/1000)

今回の調査では、成法中学校一帯の飛鳥～奈良時代の集落域の拡がりが確認できた。ここから北へ約500mの地点は、古代より難波と大和を結ぶ東西主要古道である立石嶺道から、信貴越道が分岐する地点にある。そして信貴越道は南東方向に伸びて、調査地の北約300mを通り、この集落は街道沿いに展開されていたものと推定される。

またSD201からは、6世紀代に入ると考えられる円筒埴輪が一点出土している。口縁部を欠損しているが残存状態は良好で、付近に古墳時代後期の古墳が存在したことが推測される。この時期では、当遺跡内北西部100m・300mで、掘立柱建物や溝からなる居住域が確認されているが、この円筒埴輪は周辺に墓域が存在することを示唆するものとして注目される。

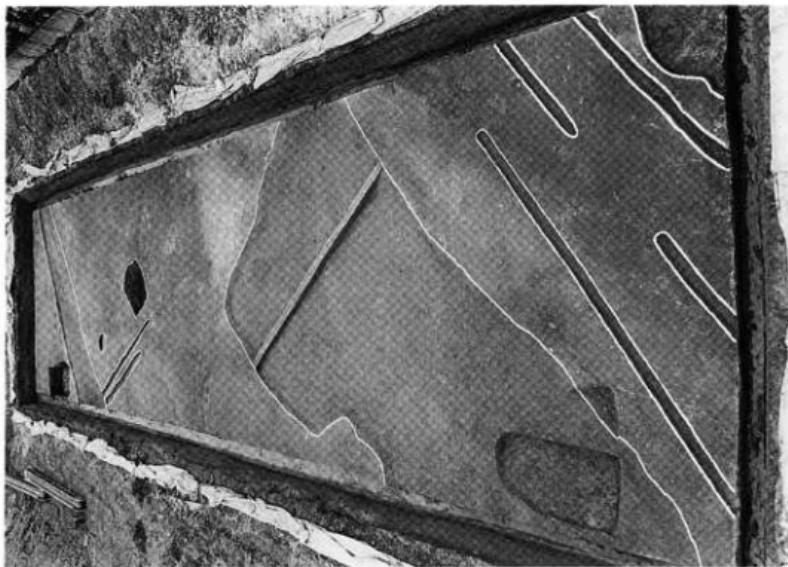
註

- 註1 八尾市教育委員会「8. 成法寺遺跡(91-014)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』
1992.3
註2 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター「陶磁関係文獻目録」『埋蔵文化財ニュース41』1983
この時点の統計では低窓足裏は全国で21例あり、陶鏡全体からみた割合は数パーセントにすぎない。

参考文献

- ・奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ」1980
- ・奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」1978
- ・奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅸ」1977
- ・奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅷ」1975
- ・古代の上器研究会編「古代の土器I 郡城の上器集成」
- ・小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」(考古学研究会「考古学研究106」1980年9月)
- ・中西克宏「生駒山西麓産の羽釜」(財団法人東大阪市文化財協会「東大阪市文化財協会ニュースVol.4 No.1」1988.11)
- ・(財)八尾市文化財調査研究会「成法寺遺跡」1991年(財)八尾市文化財調査研究会報告33
- ・大阪府教育委員会「奈良街道」『歴史の道調査報告書 第四集』平成元年3月
- ・中村 浩「和泉陶邑窯の研究」柏書房1981

図 版



第1次面（西から）



第2次面（西から）



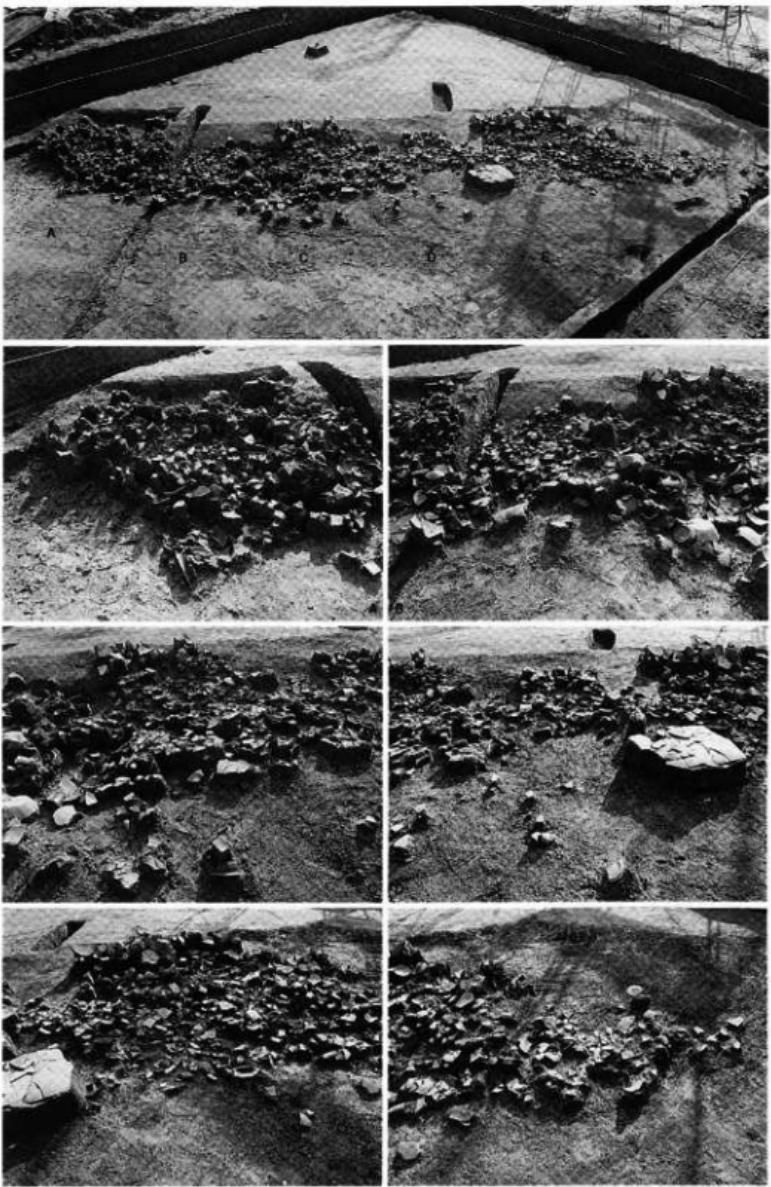
SD 201遺物出土状況（北西から）



SD 201遺物出土状況（南東から）



SD 201遺物出土状況（東から）



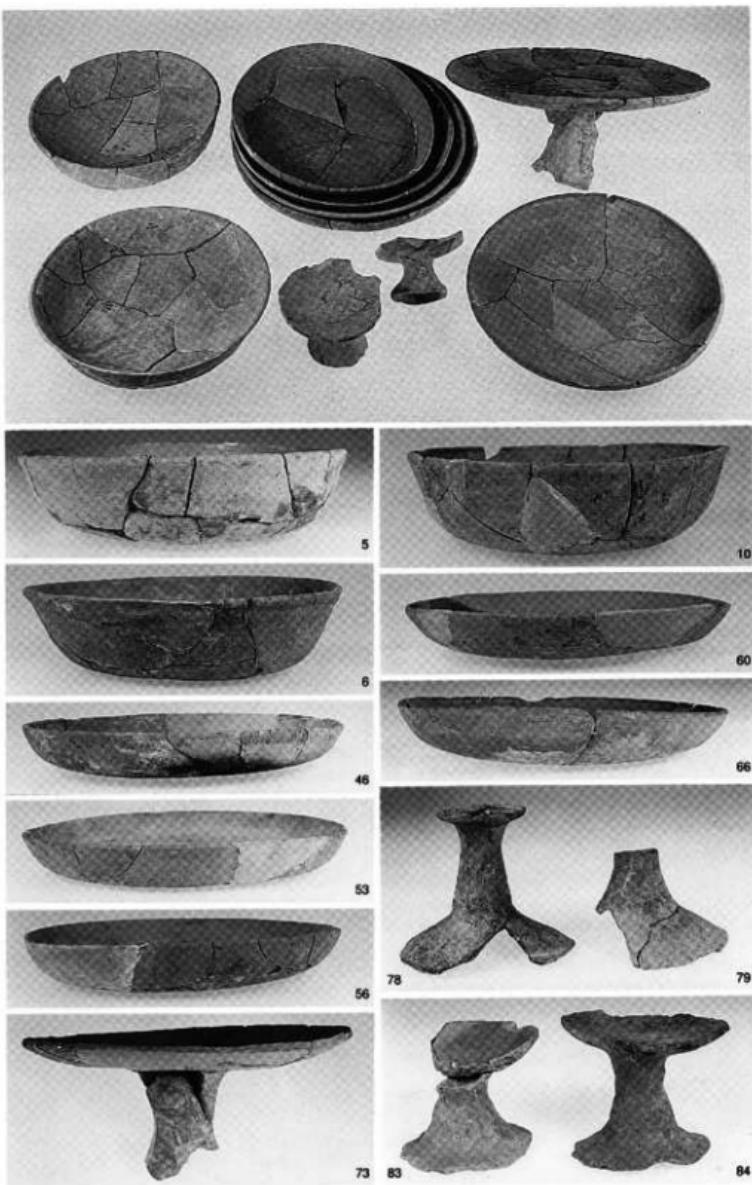
SD201遺物出土状況（北東から）



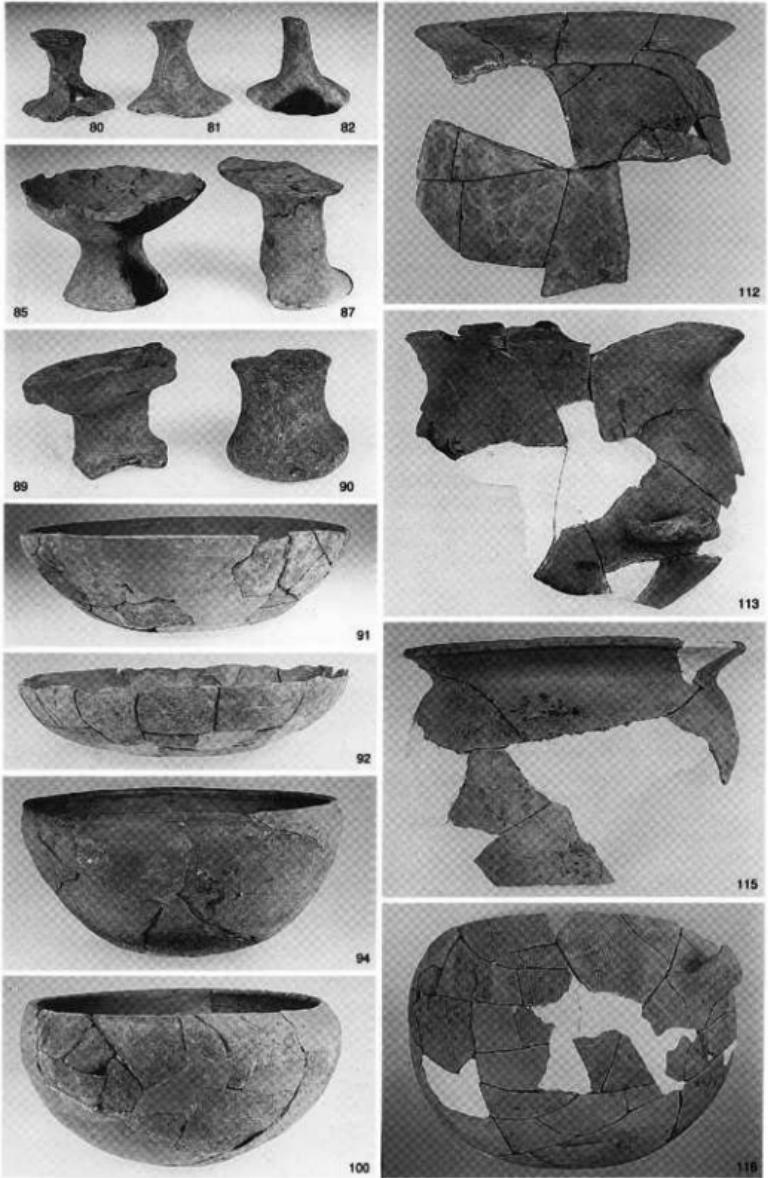
SD 201北西部（図版3-E）下層遺物出土状況（北東から）



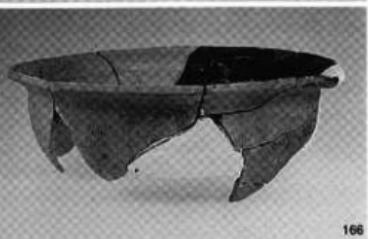
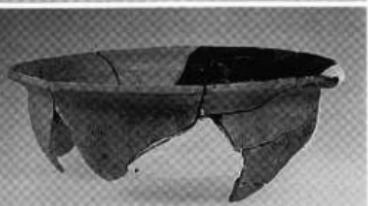
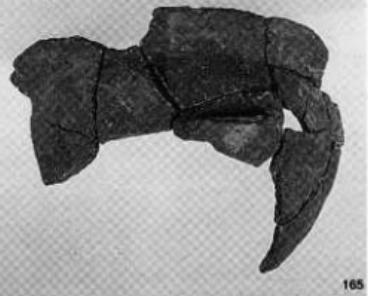
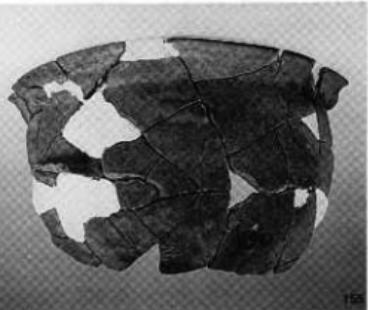
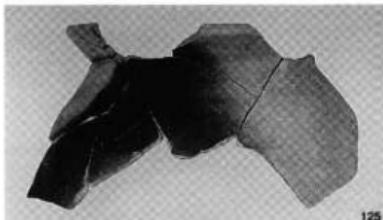
SD 201遺物（343）出土状況（東から）

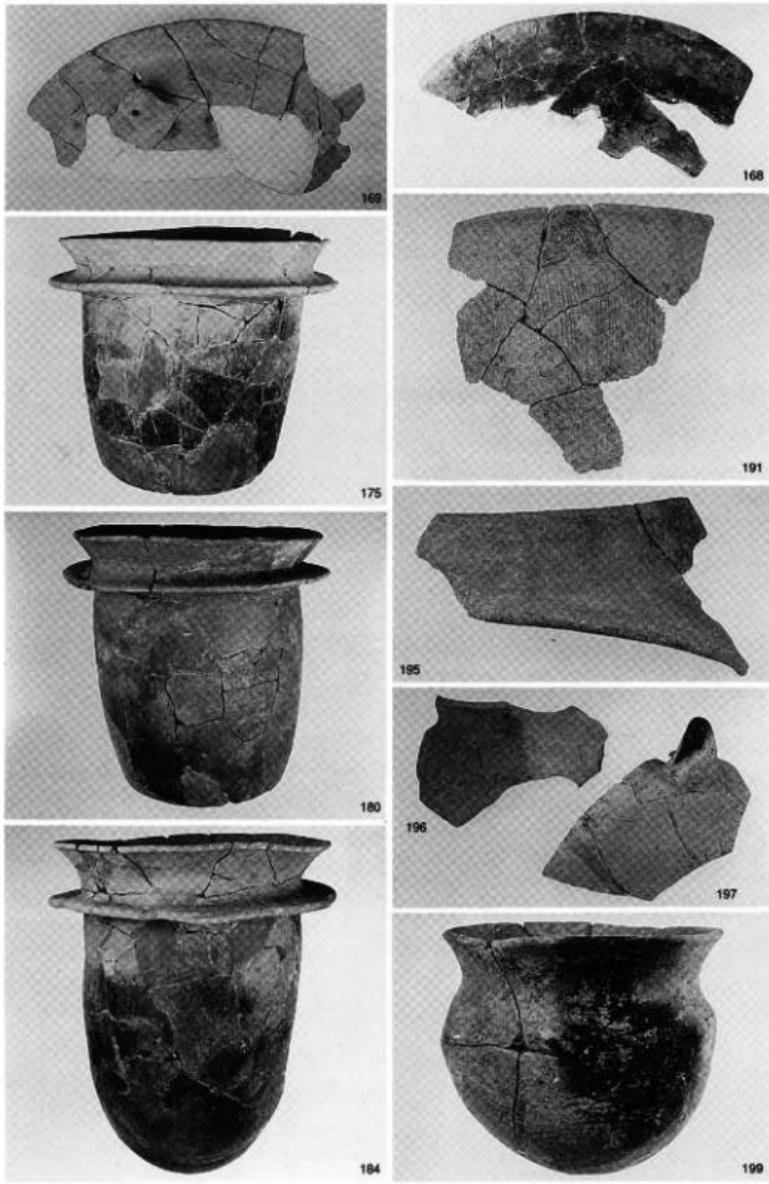


SD201 (土器)

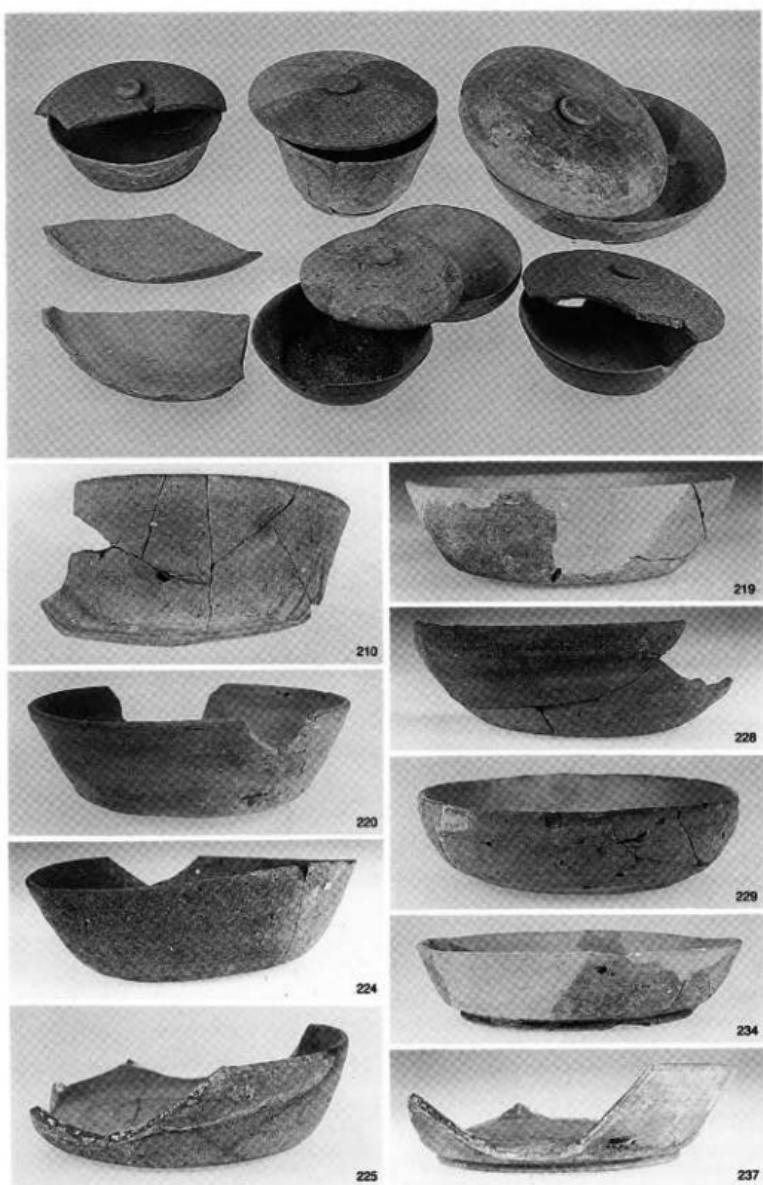


S D201 (土師器)

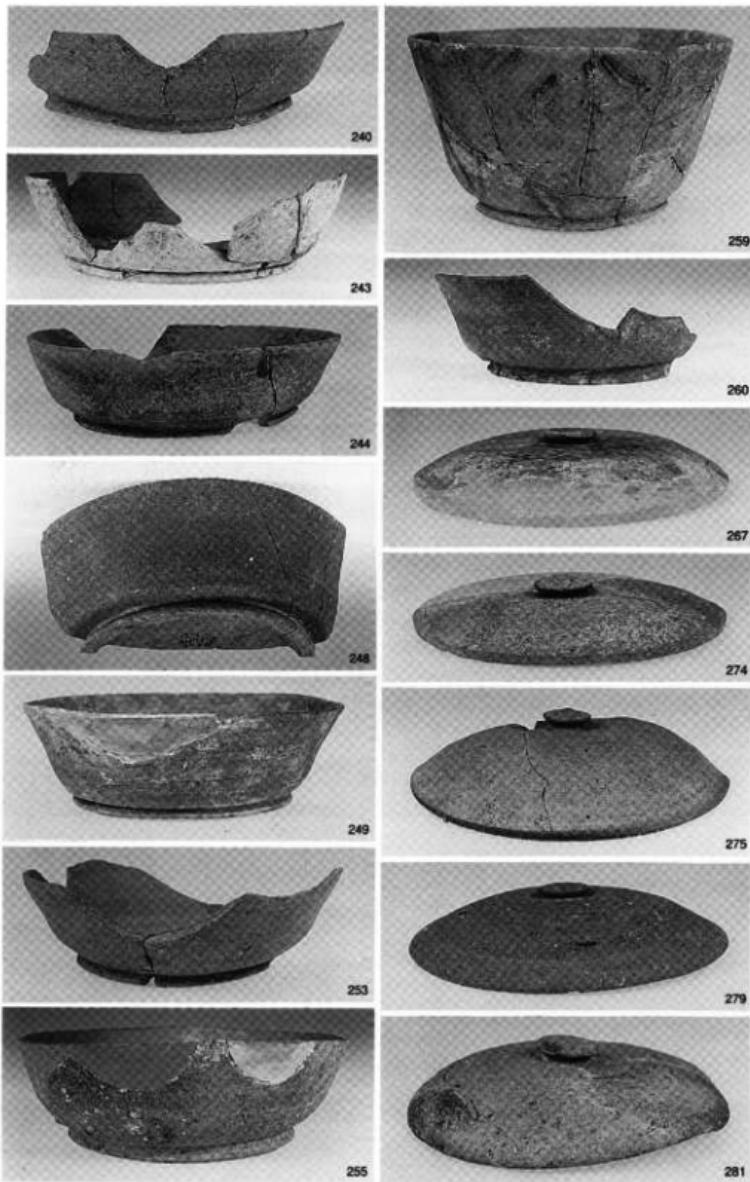




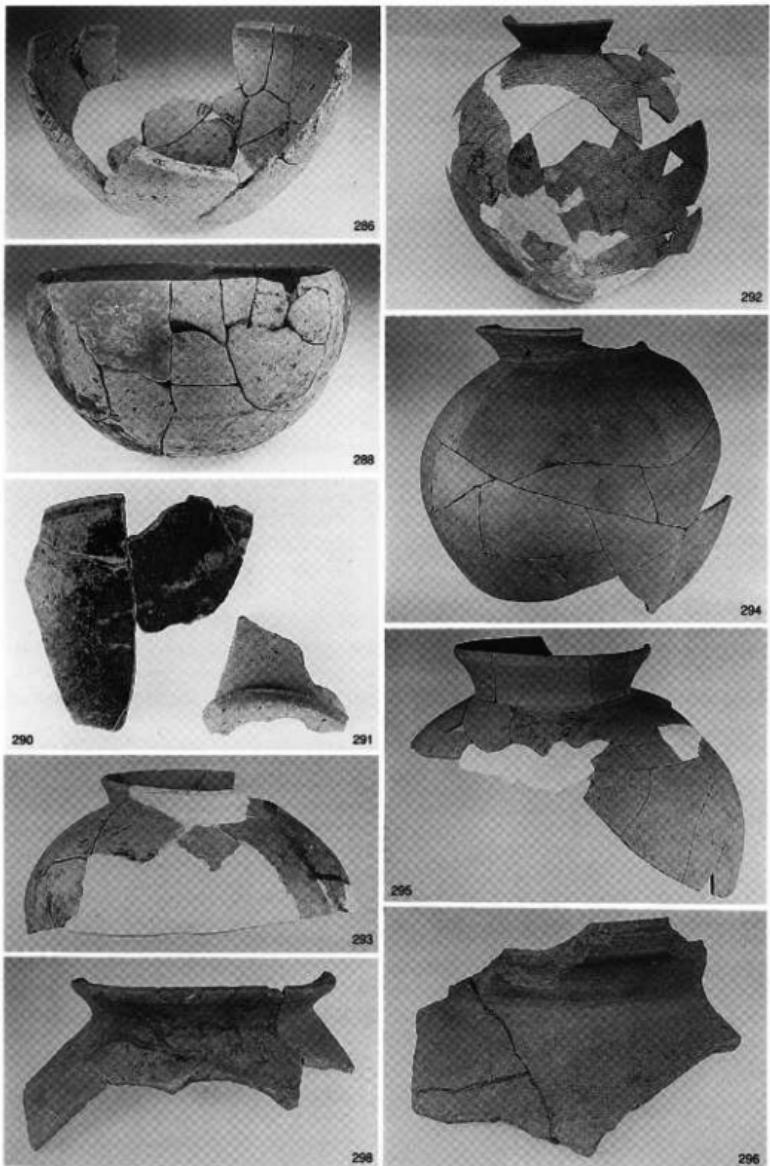
S D 201 (土師器)



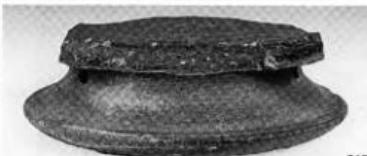
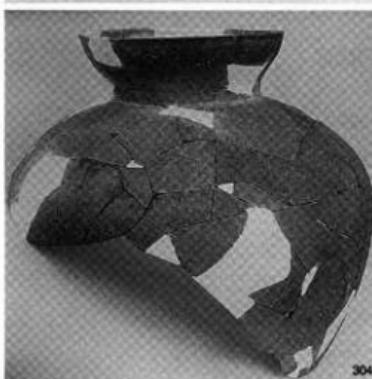
SD201 (須恵器)



S D 201 (須恵器)



S D201 (須恵器)



S D201 (須恵器)



318



319



323



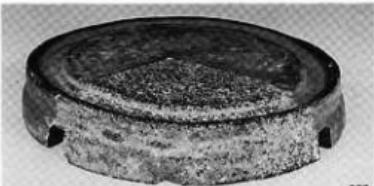
326



325



328



329



334 332



333

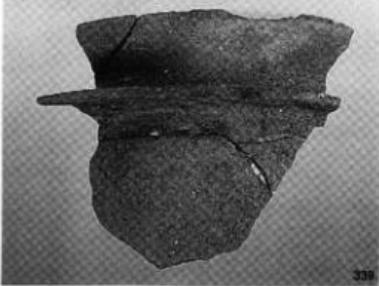
S D201 (須惠器)



335



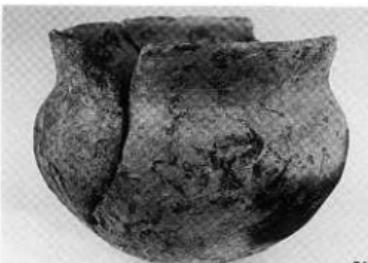
337



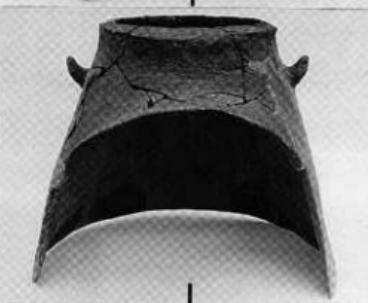
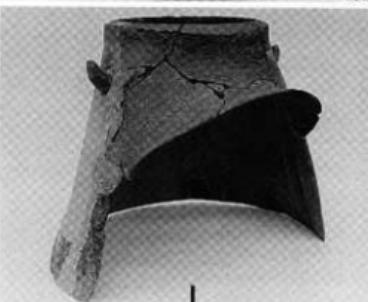
339



341



342



343

S D201 (335・337), S O201 (339~343)

III 成法寺遺跡第14次調査（S H94-14）

例　　言

1. 本書は、八尾市高美町2丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第14次調査（SH94-14）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理191-3号 平成6年8月9日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成6年11月11日から平成7年1月20日（実働14日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は124m²を測る。調査においては大兄康裕・垣内洋平・岸田靖子・辻野優子・富永勝也・西田真紀が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成7年10月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測—北原清子・沢村妙子、図面トレース—北原、遺物写真—成海佳子が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本文目次

第1章 調査経過.....	83
第2章 調査概要.....	84
第1節 調査方法と経過.....	84
第2節 基本層序.....	84
第3節 検出遺構と出土遺物.....	85
第3章 まとめ.....	96

挿図目次

第1図 調査地周辺図.....	83
第2図 調査地設定図.....	85
第3図 SK-1 遺物出土状況.....	86
第4図 検出遺構半断面図.....	87・88
第5図 SK-1 出土遺物実測図.....	89
第6図 NR-1 出土遺物実測図.....	93
第7図 1区埴輪類出土状況.....	94
第8図 SD-3・1区包含層出土遺物実測図.....	95

図版目次

図版 一 1区全景（南から）	2区全景（東から）
1区埴輪類出土状況（西から）	
図版 二 3区全景（西から）	4・5区全景（西から）
5区SK-1 遺物出土状況（北から）	
図版 三 6・7区全景（西から）	7区NR-1 検出状況（東から）
図版 四 SK-1 出土遺物	
図版 五 SK-1、NR-1 出土遺物	
図版 六 NR-1、SD-3、1区包含層出土遺物	

第1章 調査経過

成法寺遺跡は、八尾市のほぼ中央部に位置する光南町1～2丁目・清水町1～2丁目・南本町1～4丁目・高美町1～2丁目・松山町1丁目・明美町1丁目・陽光園1丁目に所在する弥生時代中期から室町時代に至る複合遺跡である。

地理的には、河内平野内を北西方向に流下する長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上の海抜9～10mに立地している。当遺跡周辺では、このような安定した地理的条件を背景として多くの遺跡の存在が知られており、当遺跡の東に小阪合遺跡、南東に中田遺跡、南に矢作遺跡、西に久宝寺遺跡、北に東郷遺跡が接している。

当遺跡内では、昭和56年度以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会により発掘調査が継続的に実施されており、弥生時代中期～室町時代に至る複合遺跡であることが確認されている。

今回、発掘調査を実施した八尾市高美町2丁目付近は、遺跡推定範囲の東部にあたる。この



第1図 調査地周辺図

付近では、当調査研究会が平成5年度に第10次調査（SH93-10）、第11次調査（SH93-11）、第12次調査（SH93-12）を実施しており、弥生時代後期、古墳時代初頭（庄内式期）、奈良時代後期、平安時代後期、鎌倉時代後期に比定される遺構・遺物が検出されている。今回の調査地点は、第10次調査地（SH93-10）の西側、第12次調査地（SH93-12）の南側に隣接している。

註記

- 註1 高萩千秋 1994「Ⅷ 成法寺遺跡第10次調査（SH93-10）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告42』
（財）八尾市文化財調査研究会
- 註2 高萩千秋 1994「Ⅸ 成法寺遺跡第11次調査（SH93-11）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告42』
（財）八尾市文化財調査研究会
- 註3 岛田真一 1994「Ⅹ 成法寺遺跡第12次調査（SH93-12）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告42』
（財）八尾市文化財調査研究会

第2章 調査概要

第1節 調査方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道管埋設工事に伴うもので、下水道管が埋設される部分の幅1.75m、長さ65mを調査対象とした。調査面積は約114m²を測る。調査対象地は、東西方向に伸びる部分（55m）と、西端から屈曲して南北方向に伸びる部分（10m）がある。南北方向に伸びる部分を1区とし、東西方向の部分は西端から10m毎に区切り2区～7区と呼称した。

調査前における鋼矢板打設および覆銅板設置に伴い、表土下1m前後までに存在する盛土および旧耕土が掘削を受けていた。したがって、調査ではそれより下層部分を機械掘削と人力掘削を併用して0.3mにおよぶ範囲で遺構・遺物の検出に努めた。

その結果、表土下1.3m前後（標高7.7m前後）に存在する第3層上面で、弥生時代後期の土坑1基（SK-1）、溝4条（SD-1～SD-4）、古墳時代中期の土坑2基（SK-2・SK-3）、溝1条（SD-8）、小穴3個（SP-1～SP-3）、奈良時代後期～平安時代前期の自然河川1条（NR-1）と時期不詳の溝3条（SD-5～SD-7）を検出した。出土遺物の総量はコンテナ箱4箱程度である。

第2節 基本層序

調査地の層序については、遺構検出面である第3層以下が河川堆積層であり、さらにその上部の第2層についても、後世の耕作による改変を受けていたため、全体に不安定な層相であった。

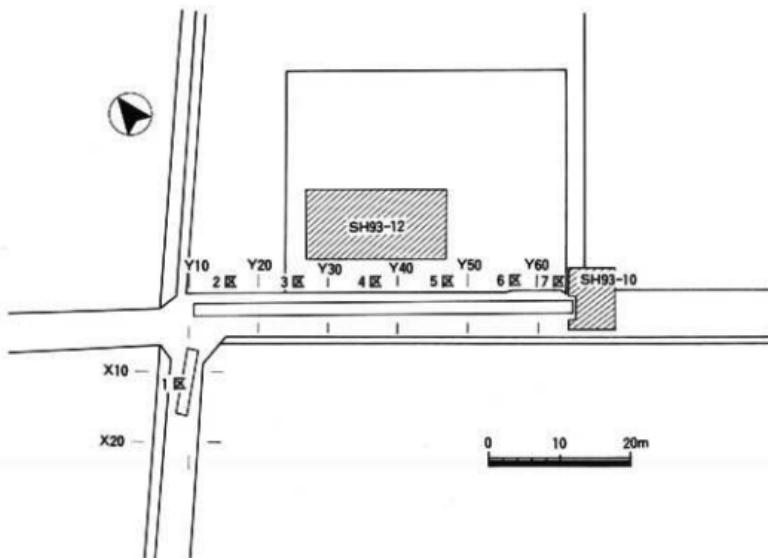
第0層は調査前に掘削が完了していた土層で、盛土および旧耕土層である。層厚は1m前後で、上面の標高はT.P.+9.0m前後を測る。第1層は5YR5/2にぶい赤褐色粘土質シルトで酸化鉄、マンガンが斑点状に沈着している。調査前の掘削により大半が削平を受けており、部分的に遺存するにすぎない。層厚は0.1m前後を測る。第2層は大半が10BG6/1青灰色極細粒砂であるが、西部の2区付近ではN6/灰色極細粒砂である。層厚は0.1~0.3mを測る。上面から切り込む掘溝が確認されている。弥生時代後期から中世に至る遺物が含まれている。第3層は10YR5/1褐色ないしは10GY7/1明緑灰色の色調で、土質は河川の洪水に起因する堆積土層であるためシルト～小砂礫の多種に及ぶ。弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代前期の遺構構築面である。第4層は10YR6/2灰黄色中粒砂～粗粒砂で河川堆積土層である。層厚は0.7~0.9mを測る。第5層はN8/灰白色中粒砂～粗粒砂で層厚は0.5m以上を測る。第4層と同様、河川堆積土層である。

第3節 検出遺構と出土遺物

土坑（SK）

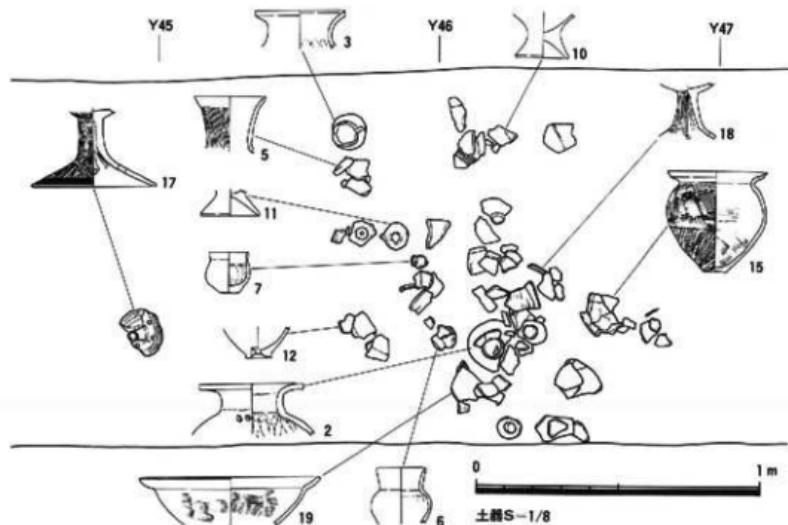
SK-1

5区で検出した。検出部分では南北方向に伸びるもので、西端はSD-1に切られている。検出部分で東西幅4.0m、深さ0.2mを測る。断面の形状は浅い皿状で、底部はほぼ水平である。

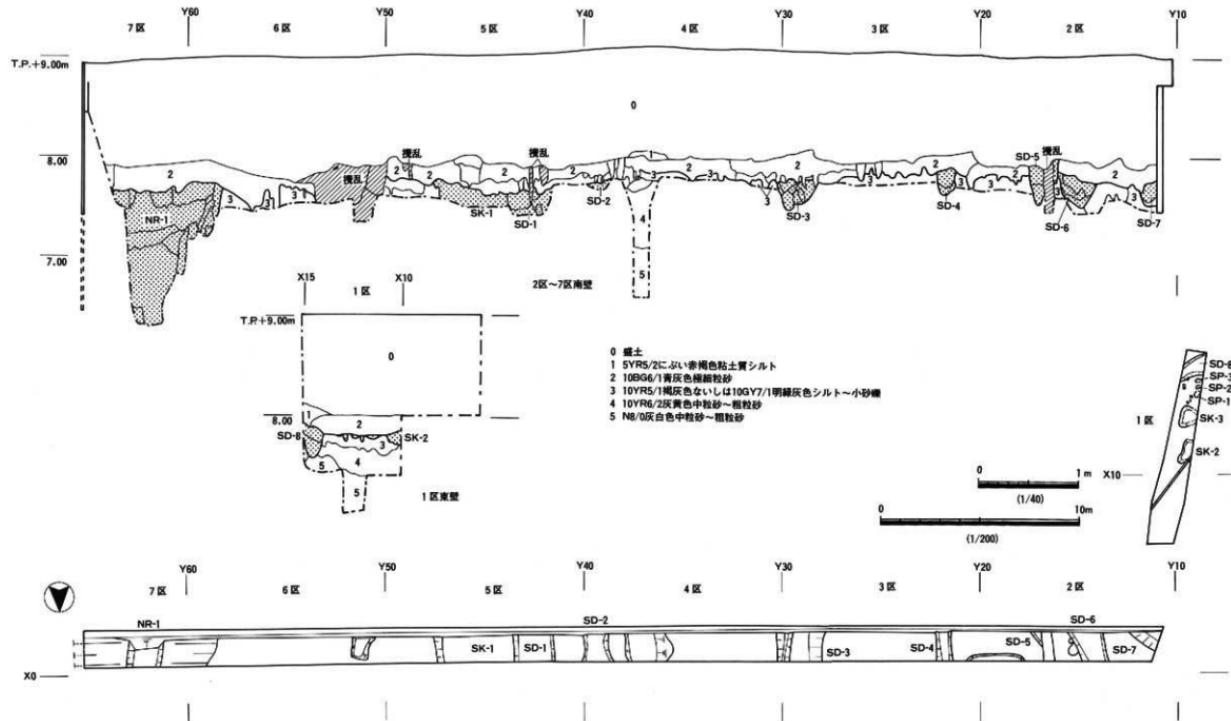


第2図 調査地設定図

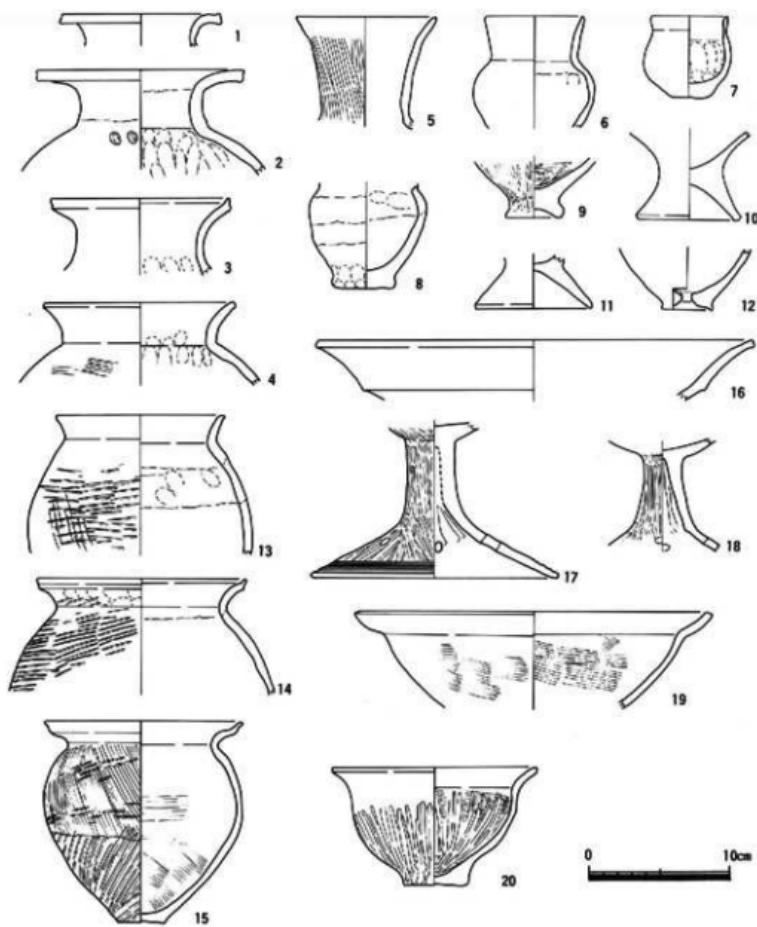
埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。遺物は、弥生時代後期に比定される土器類がコンテナ箱に約半分程度出土しており、特に遺構の東部で土器が集中する部分が認められた。図化したものは20点（1～20）である。その内訳は、広口壺4点（1～4）・長頸壺1点（5）・短頸壺3点（6～8）・台付壺2点（10・11）、壺3点（13～15）、高杯3点（16～18）、鉢3点（9・19・20）、有孔鉢1点（12）である。広口壺は4点（1～4）図化した。（1・2）は頸部が直上に直線的に伸びた後、口縁部が強く屈曲するもので、端部は水垂な面を有する。（1）は口径11.6cm、（2）は口径14.8cm、頸部径9.5cm、頸部高2.7cmを測る。（2）の体部上半には先端の丸い棒状工具による刺突文が2ヶ所認められる。ともに生駒西麓産である。（3）は頸部からゆるやかに外反した後、上方に立ち上がる小さな口縁部を有するもので、端部は尖り気味で終わる。口縁部は完存しており、口径12.7cm、頸部高3.2cmを測る。生駒西麓産である。（4）は口縁部が外反して伸びるもので、口縁端部は丸味を持って終わる。復元口径13.8cmを測る。色調は赤灰色で、胎土中に長石・石英・赤色酸化土粒が含まれている。（5）は長頸壺の口頸部である。復元口径10.1cm、頸部高7.0cmを測る。生駒西麓産である。（6～8）は短頸壺である。（6）は小型品で口径7.1cm、頸部高2.8cmを測る。（7）は手づくね成形のミニチュアの小壺である。口縁部の一部を欠損している以外は完存している。口径5.5cm、器高5.7cmを測る。



第3図 SK-1 遺物出土状況



第4図 検出造構平断面図



第5図 SK-1出土遺物実測図

(8) は (6) と同様小型品である。(8) は灰白色の色調で、胎土中に長石・石英粒が多量に含まれている。(10・11) は台付き壺の脚部である。(10) が裾部径7.5cm、脚部高3.6cm。(11) が裾部径8.4cm、脚部高3.3cmを測る。生駒西麓産である。壺は3点(13～15) 図化した。(13) は一般的な壺に比して体部の張りが弱い点や口縁部の立ち上がりが短い等の違いがある。(14) は口縁端部が斜上方に拡張され受口状口縁を有する壺で、弥生V様式後半期にあたる上

六方寺期に通有の形態を示している。(15)は中型の甕で1/2以上が遺存している。口径14.3cm、器高14.2cm、体部最大径14.3cm、底径3.3cmを測る。口縁部は(14)と同様受口状口縁である。体部外面のタタキ調整の方向は、上位が右上がり、中位が平行、中位以下が右上がりである。さらに、上位には左上がりのハケナデが施されている。(13~15)は生駒西麓産である。高杯は3点(16~18)圓化した。(16)は杯部の1/6程度が遺存している。復元口径31.2cmを測る。(17)は脚部が完存している。裾部径17.8cm、脚部高9.6cmを測る。裾部端に4条の凹線が巡る。スカシ孔は5孔である。(16・18)が生駒西麓産。(17)が淡赤灰色の色調で、胎土は精良である。他地域からの搬入品である。鉢は3点(9・19・20)圓化した。(9)は台付き鉢である。裾部径4.0cm、脚部高1.3cmを測る。(19)は二段に屈曲する口縁部を有する大型の鉢である。口径25.0cmを測る。(20)は球形状の体部に外反して伸びる口縁部が付くもので、底部は突出した平底である。口径14.8cm、器高8.4cm、底径4.4cmを測る。3点ともに生駒西麓産である。(12)は有孔鉢と推定される。底部中央部に径0.8cmを測る穿孔が焼成前に穿たれている。生駒西麓産である。

SK-2

1区で検出した。西部が調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西幅0.45m、南北幅1.1m、深さ0.06mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

SK-3

1区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.6m、南北幅1.0m、深さ0.07mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

溝(SD)

SD-1

5区の西部で検出した。南北方向に伸びるもので、東部でSK-1を切っている。東西幅2.0m、深さ0.25mを測る。埋土はシルト・粘土質シルトを主体とする4層から成る。遺物は弥生時代後期に比定される土器類が少量出土している。

SD-2

4区の東端で検出した。東西方向に伸びるもので、幅1.3~1.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘土の單一層である。遺物は弥生時代後期に比定される土器類が少量出土している。

SD-3

3区の東端から4区の西端で検出した。二段の掘方を有し、南北方向に伸びるもので、幅2.3m、深さ0.5mを測る。埋土は7層から成る。遺物は朝顔形埴輪片と須恵器片の2点が出土し

ている。そのうち、朝顔形埴輪1点（38）を図化した。（38）は口縁部と頭部を区画する部分が段で表現されている。口縁部内外面はハケ調整が施されている。色調は黄橙色で胎土中には長石・黒雲母が含まれている。

SD-4

3区の西部で検出した。南北方向に伸びるもので、幅0.8m、深さ0.17mを測る。埋土は灰色極細粒砂の單一層である。遺物は出土していない。

SD-5

2区で検出した。第3層上面で検出したが、本米の構築面は第2層である。北西-南東に伸びるものであるが、西側が攪乱されており詳細は不明である。検出部分で幅0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は下層の灰色極細粒砂と上層の灰色粘土の2層がほぼ水平に堆積している。遺物は出土していない。

SD-6

2区で検出した。北西-南東方向に伸びるもので、幅1.3~1.9m、深さ0.3mを測る。埋土は3層から成り、上層は極細粒砂で最下層は灰色粘土がレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

SD-7

2区の南西隅で検出した。南部および西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、幅0.85m、深さ0.25mを測る。埋土は2層から成り、下層は粘土を主体とした土層が堆積している。遺物は出土していない。

SD-8

1区の南端部で検出した。東西方向に伸びるもので、北側のラインから推定すれば、西端付近で北方向に屈曲するようである。検出長1.1m、幅0.8~1.0m、深さ0.32mを測る。埋土は2層に分層が可能で、上層が黒褐色粘土質シルト、下層が暗青灰色粘土である。遺物は上層から埴輪片が3点出土している。なお、本遺構の北部を中心に埴輪類の小片が比較的まとまった形で出土していることから、古墳の周溝であった可能性が高い。出土した埴輪類については、包含層出土遺物として第8図に掲載している。

小穴（SP）

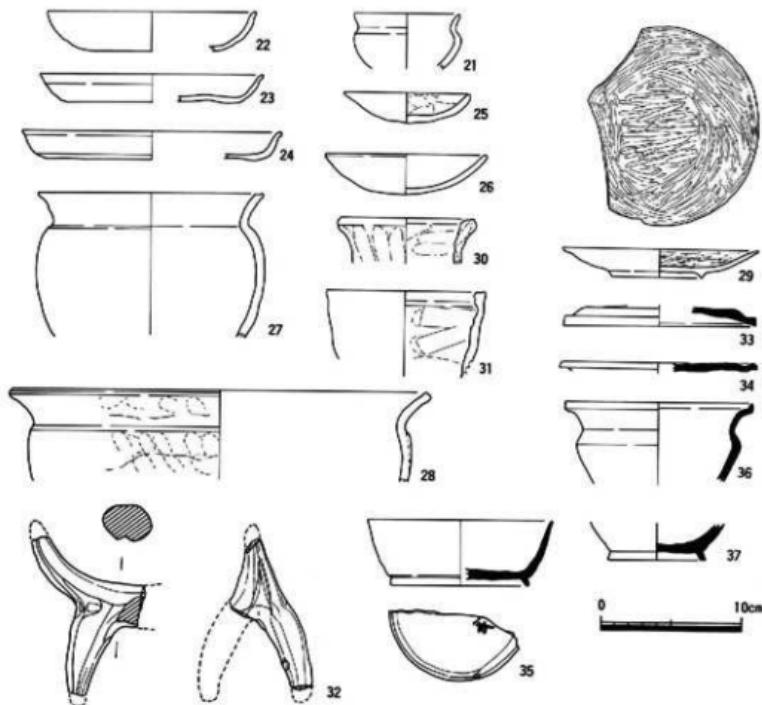
1区の南部を中心に3個の小穴（SP-1~SP-3）を検出している。3個の小穴は、近接して南北方向に並ぶ形で検出されているが、いずれも、西部が調査区外に至るため全容を知り得たものはない。検出部分からみて、円形ないしは橢円形を呈していたものと推定される。径は0.2m前後、深さは0.05m前後を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトの單一層である。遺物はSP-3から埴輪片が1点出土している。

自然河川 (N R)

N R - 1

6区の東部から7区にかけて検出した。南北方向の流路を持つ。東西幅については、7区の東部が既設の埋設物のため調査不能であったが、7区の東端に隣接する地点で平成5年度に当調査研究会が実施した第10次調査 (SH93-10) で、この遺構の東肩が検出されており、それらを総合すれば、9.3m程度の川幅が想定される。深さについては、検出部分で1.35mを測る。埋土は河川の断面に沿って細粒砂～粗粒砂が中位まで堆積した上に、シルトないしは粘土層が堆積している。遺物は、中位以下に堆積する灰白色細粒砂～粗粒砂を中心に、奈良時代後期～平安時代前期に比定される土器類がコンテナ箱半分程度出土している。そのうちの18点を図化したが、小片でローリングを受けたものが大半であった。その内訳は、土師器杯1点(22)・皿2点(23・24)・椀2点(25・26)・壺1点(21)・甕2点(27・28)、製塩土器2点(30・31)、黒色土器皿1点(29)、土馬1点(32)、須恵器杯蓋2点(33・34)・杯身1点(35)・壺2点(36・37)である。

土師器壺(21)は半球形の胴部と短く外反する口縁部が付く小型の広口壺である。復元口径7.4cmを測る。色調は茶灰色で胎土中に石英・長石・チャートが多量に含まれている。土師器杯(22)は復元口径14.8cm、器高2.8cmを測る。遺存率は1/8程度である。色調は黄橙色で、胎土は精良である。土師器皿(23・24)は水平な底部から体部が上方方に直線的に伸びるもので、口縁端部は外反気味に終わる(23)と外側に小さく肥厚して終わる(24)がある。遺存率は1/6程度である。(23)が復元口径15.7cm、器高2.0cm、(24)が復元口径18.4cm、器高2.0cmを測る。色調は(23)が褐色、(24)が灰白色である。胎土はともに精良である。(25・26)は半球形の体部を有する土師器椀である。(26)は完形品で、(25)は3/4以上が遺存している。とともに体部の成形は丁寧であるが、口縁端部の成形は雑で器肉幅が一定でない。(25)は口径8.9cm、器高2.1cm、(26)が口径11.4cm、器高2.85cmを測る。色調はともに茶灰色である。胎土はともにやや粗い。(27・28)は土師器甕である。球形状の体部に強く外反する口縁部からなる広口の甕である。復元口径は(27)が15.9cmで中型品、(28)が30.0cmを測る大型品である。(27)の体部外面は火熱のため器面が剥落している。色調はともに淡赤灰色である。胎土中に石英・長石・チャート粒が散見される。(29)は黒色土器皿である。皿状の体部に断面が三角形の高台が付くもので、内黒のA類に分類される。口径14.0cm、器高2.5cm、高台径0.5cmを測る。(30・31)は製塩土器である。手づくね成形によるもので、ともに口縁端部付近で器肉が漸増する点で共通している。(31)は火熱による器壁面の剥離が認められる。色調は浅黄橙色である。胎土は(30)が長石・石英・チャート、(31)が長石・石英・赤色酸化土粒が含まれている。(32)は土馬である。馬具が省略された裸馬である。右後脚から尻尾が遺存しているが、



第6図 NR-1出土遺物実測図

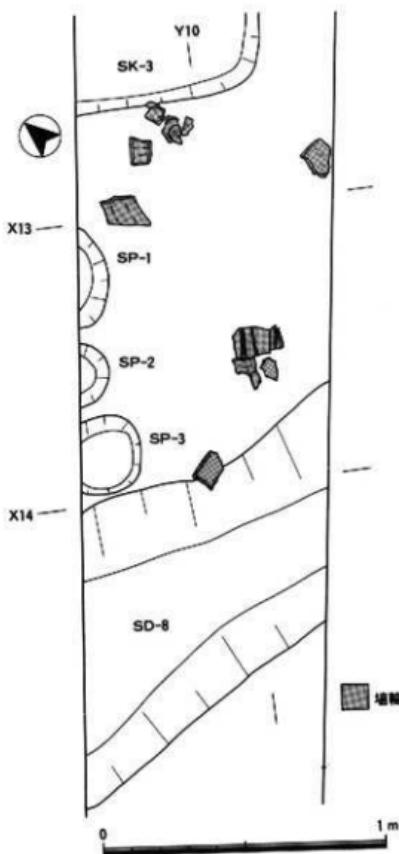
ともに先端部分は欠損している。尻尾は裏面左右の粘土端を内側に折り曲げ、先端にいくに従つて細く成るようになされている。色調は淡灰白色である。胎土中に石英・長石・チャート粒が含まれている。(33・34)は須恵器杯蓋である。ともに1/8程度の小片である。色調は青灰色である。(35)は須恵器杯身である。口径13.1cm、器高4.6cm、高台高0.6cmを測る。底部外面に墨書きで「家」と記されている。灰白色の色調で、須恵器としては焼成はややあまい。(36)は須恵器壺である。肩部に稜を有する胴長の体部に、大きく外反する広口の口縁部が付くものである。完形ならば高台を有する器種で、本例はこの器種の中では小型に分類される。復元口径13.5cmを測る。色調は灰白色である。(37)は須恵器壺の底部である。上部が欠損しており器種の特定はできない。高台径7.0cm、高台高0.6cmを測る。

包含層出土遺物

第2層を中心に弥生時代後期から近世に至る土器類が出土したが大半が小片であった。ここでは、1区の第2層から出土した埴輪類(39~46)を図化した。8点図化した。全て小片でしかも整地等による二次堆積の可能性が高いが、小範囲の中に集中して出土する傾向が見られることから、至近距離にこれらの埴輪類を樹立した古墳の存在が想定される。

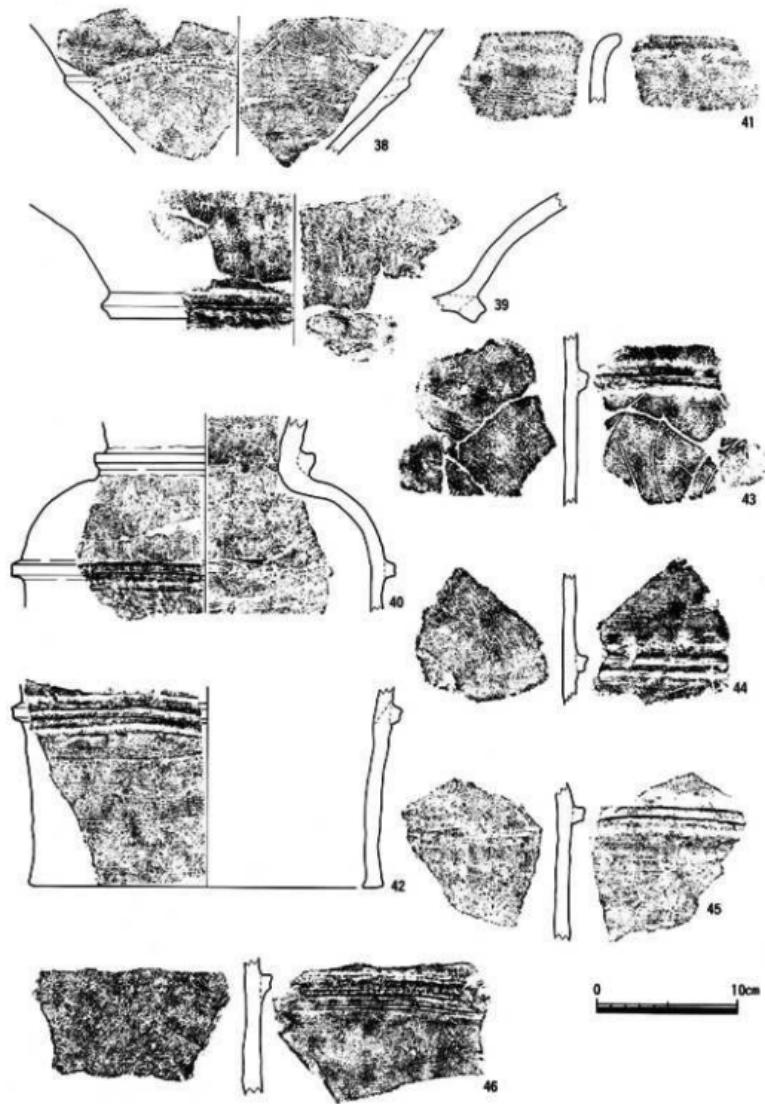
(39・40)は朝顔形埴輪で同一固体の可能性がある。内外面のハケ調整は、(39)の口縁部外面がタテハケ、内面が中位がタテハケ、上位がヨコハケである。(40)は最上段がタテハケ、第3段がヨコハケ、内面はタテハケである。色調は黄橙色で胎土中に石英・長石のやや大粒の砂粒が多量に含まれている。(41~46)は円筒埴輪片である。(41)は最上段の資料で、外折する口縁部を有する。内外面の調整はともにヨコハケである。色調は淡橙色で、胎土中に石英・長石・赤色酸化土粒が多量に含まれている。(42)は最下段の資料である。タガは断面が「M」字形である。外面は1次調整がタテハケ、2次調整がヨコハケである。半須恵器の焼成で、色調は淡灰色からにぶい赤褐色を呈する。胎土中に石英・長石の大粒の砂粒が含まれている。

(43)の外面にはヘラ書きによる直弧文装飾が施されている。(44~46)はタガが「M」字形を呈する(44・46)と台形を呈する(45)がある。外面調整では、1次調整がタテハケ、2次調整がB種ヨコハケである。内面の調整は、(44・45)がタテハケ、(46)がナデである。色調は(44)が淡橙色、(45)が橙色、(46)が灰白色で、焼成は(45)が半須恵器で他は土師質である。これらの埴輪類の特徴を列記すれば、外面調整においては1次調整のタテハケ、2次調整のB種ヨコハケ、タガの形状においては台形、「M」字形のほか無黒斑である等の特徴を備えている。以上の特徴を川西宏幸氏の円筒埴輪編



第7図 1区埴輪類出土状況

施されている。(44~46)はタガが「M」字形を呈する(44・46)と台形を呈する(45)がある。外面調整では、1次調整がタテハケ、2次調整がB種ヨコハケである。内面の調整は、(44・45)がタテハケ、(46)がナデである。色調は(44)が淡橙色、(45)が橙色、(46)が灰白色で、焼成は(45)が半須恵器で他は土師質である。これらの埴輪類の特徴を列記すれば、外面調整においては1次調整のタテハケ、2次調整のB種ヨコハケ、タガの形状においては台形、「M」字形のほか無黒斑である等の特徴を備えている。以上の特徴を川西宏幸氏の円筒埴輪編



第8図 SD-3 · 1区包含層出土遺物実測図

年に照らしあわせれば、タガの形状において「M」字形を呈するものが存在していること以外においては、Ⅳ期の特徴に共通している。Ⅳ期の実年代としては、5世紀中葉～後葉に位置づけられており、本資料はやや古い形態を示す「M」字形のタガの存在からみて、Ⅳ期の中でも古い段階に比定できよう。

第3章　まとめ

今回の調査は、公共下水道管理設工事という線的な調査であったにも拘らず、弥生時代後期、古墳時代中期、奈良時代後期～平安時代前期に比定される遺構・遺物が検出された。

弥生時代後期の遺構は4区および5区で土坑・溝が検出されている。同時期の遺構が調査地の北側で実施された成法寺遺跡第12次調査（SH93-12）でも検出されており、今回の調査の結果、この時期の遺構が南北方向に広がることが確認された。また、遺構構築面である第3層以下は埋没河川と推定される粗粒砂が優勢な層相であることが確認されており、これらの河川の埋没時期を推定するうえでこれらの資料が一助となろう。

古墳時代中期の遺構は、調査地西部の1区で検出されている。土坑・溝・小穴等が検出されているが、なかでも、SD-8および第2層からは円筒埴輪・朝顔形埴輪の小片が多数出土している。これらの埴輪片は、細片化しているものの器壁面の調整等が比較的良好に遺存していることから、SD-8を周溝とする小型の古墳が存在した可能性が高い。なお、北部で検出したSD-7と同じ古墳の周溝と考えた場合、約10m程度の規模を持つ方墳が想定される。

奈良時代後期～平安時代前期の遺構としては、6区・7区でNR-1を検出している。この時期の遺構としては、調査地の北側で実施された成法寺遺跡第12次調査（SH93-12）^{註1}で、墨書き人面土器等が出土したSE-201があり、これらの遺構と有機的な関係を持つものと考えられる。

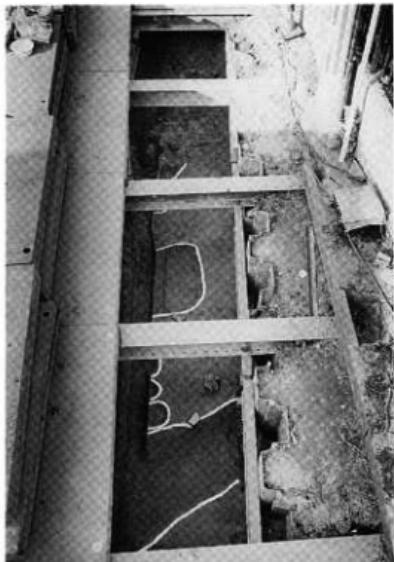
註記

- 註1 岛田真一 1994「区 成法寺遺跡第12次調査（SH93-12）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告42』（財）八尾市文化財調査研究会

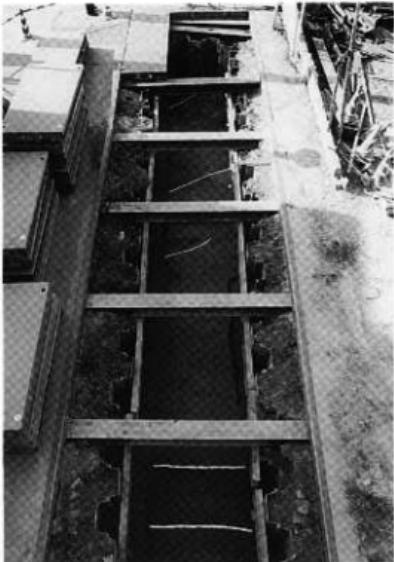


写真1　調査風景

図 版



1区全景（南から）



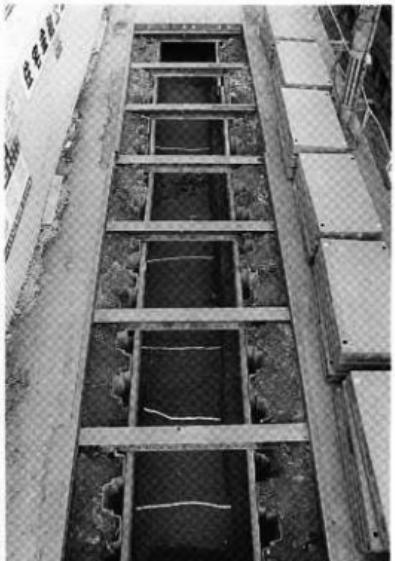
2区全景（東から）



1区埴輪類出土状況（西から）



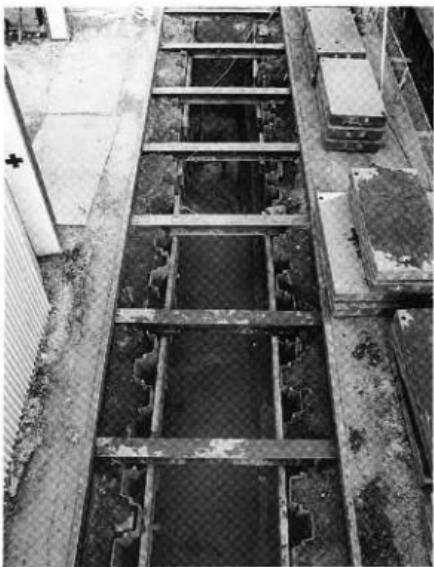
3区全景（西から）



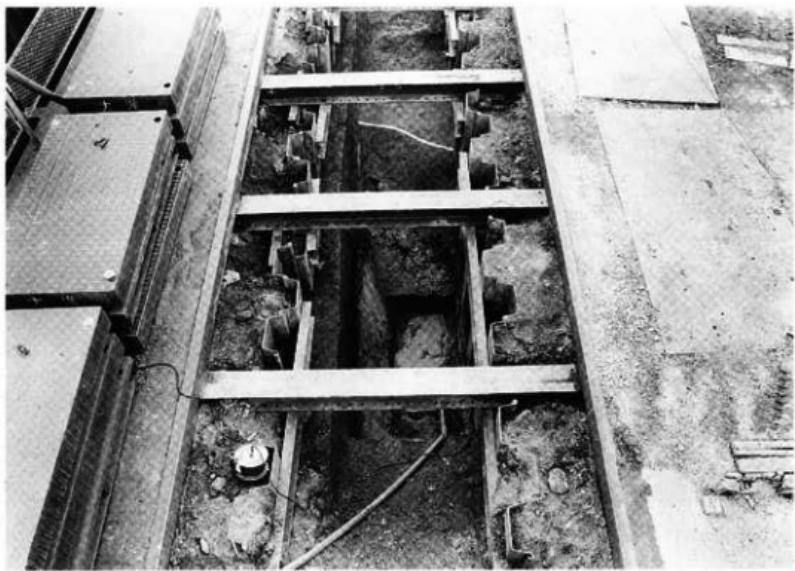
4・5区全景（西から）



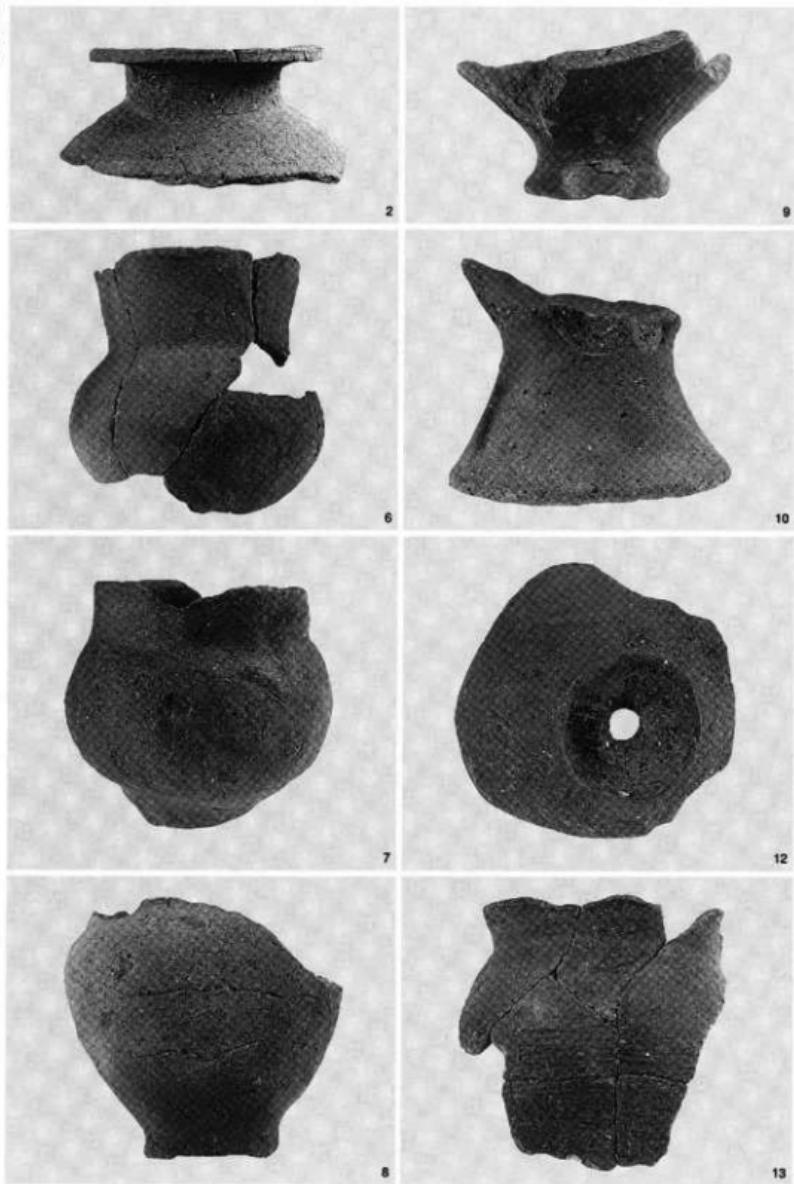
5区SK-1遺物出土状況（北から）



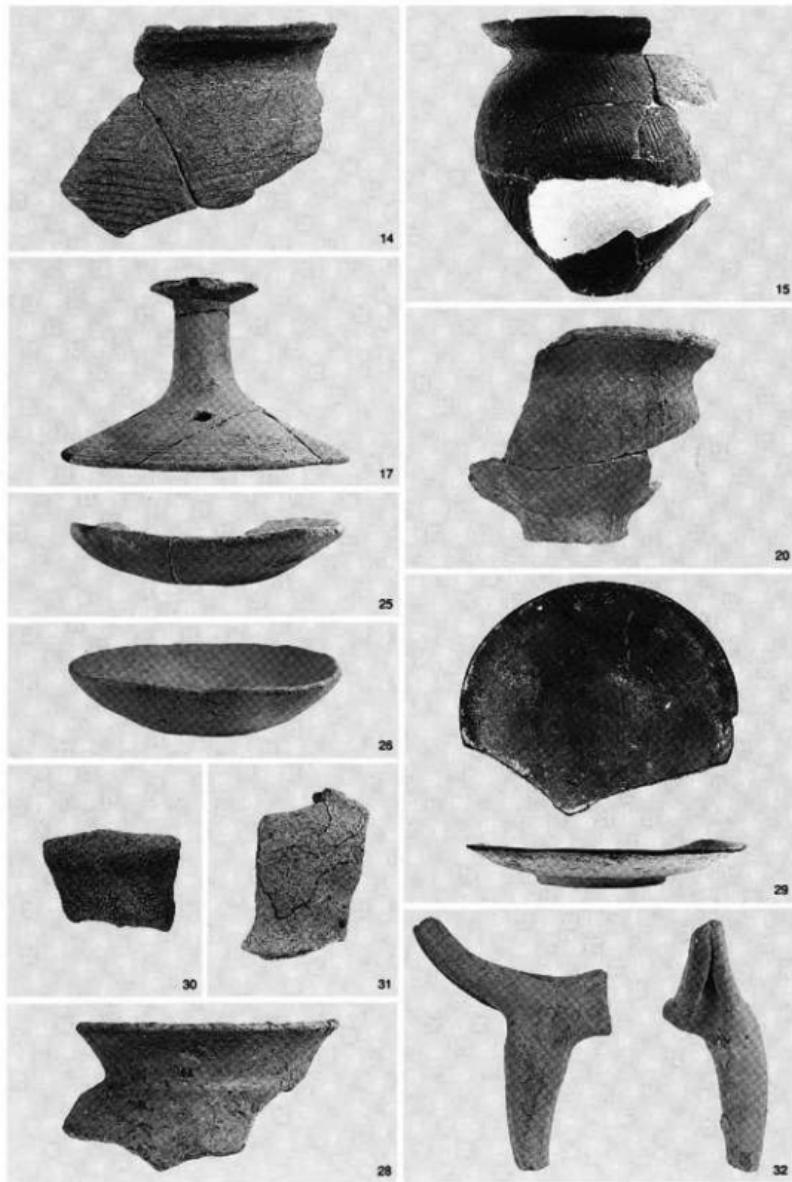
6・7区全景（西から）



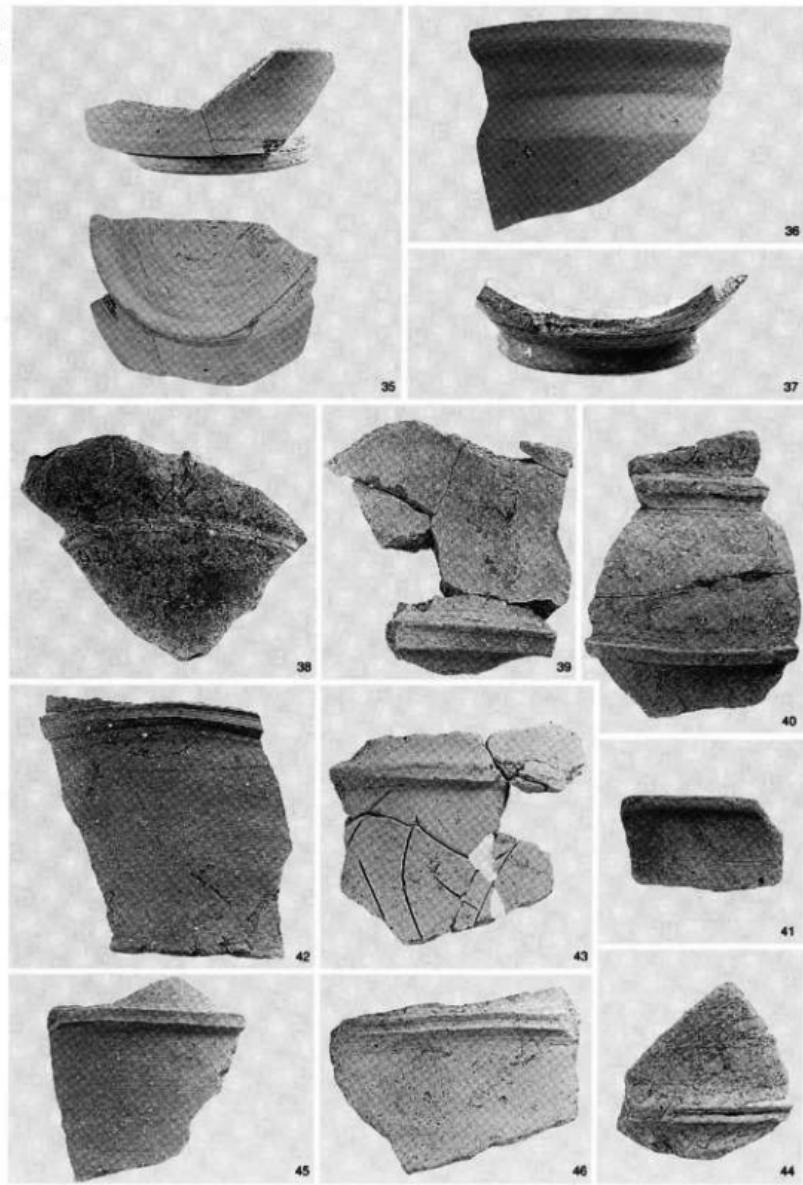
7区NR-1棟出状況（東から）



SK-1出土遺物



SK-1 (14·15·17·20)、NR-1 (25·26·28~32) 出土遺物



NR-1 (35~37)、SD-3 (38)、1区包含层 (39~46) 出土遗物

報告書抄録

ふりがな	じょうほううじいせき						
書名	成法寺遺跡						
調査名	T 第7次調査 Y 第8次調査 E 第14次調査						
巻次							
シリーズ名	(府)八幡市文化財調査研究会報告						
シリーズ番号	31						
著者名	原田昌樹・坪田尚一						
発行機関	財団法人 八幡市文化財調査研究会						
所在地	〒881 大阪府八尾市青山町4丁目4番18 TEL 0729-94-4790						
発行年月日	西暦 1996 年 3 月 31 日						
ふりがな 所調跡名	ふりがな 所調跡名	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	(m) 調査面積	報告事項	
成法寺遺跡 (第7次調査)	大阪府八尾市池田町2丁目2~5	27212	34度 35分 11秒	135度 36分 19秒	19910801~ 19910907	640	プール建設
成法寺遺跡 (第8次調査)	大阪府八尾市内本町2丁目97番地の1	27212	34度 37分 11秒	135度 36分 20秒	19910917~ 19911006	350	共同住宅建設
成法寺遺跡 (第14次調査)	大阪府八尾市高畠町2丁目9番	27212	34度 37分 11秒	135度 36分 41秒	19941111~ 19950120	124	公共下水道工事
所調跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
成法寺遺跡 (第7次調査)	集落遺跡	古墳時代後葉 飛鳥~奈良時代 中世~近世	土坑・溝 副立石遺物・井戸 墓	布雷式土器 上器	飛鳥~奈良時代の聚落域の私が りを確認		
成法寺遺跡 (第8次調査)	集落遺跡	飛鳥~奈良時代 中世	墓・墓ち込み 土坑・溝	十数 土器	飛鳥~奈良時代の溝から、特徴 的高い多様の土器が出土		
成法寺遺跡 (第14次調査)	集落遺跡	奈生時代後葉 古墳時代中期 奈良~平安時代	土坑・溝 古墳 自然河川	奈生土器 埴輪 土器	占墳時代中期の古墳を検出		

成法寺遺跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告51

I 成法寺遺跡（第7次調査）

II 成法寺遺跡（第8次調査）

III 成法寺遺跡（第14次調査）

発行 平成8年3月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市青山町4丁目4番18号

TEL0729-94-4700

印刷 (株)近畿印刷センター

表 紙 レザック66 <260kg>

本 文 ニューエイジ<90kg>

図 版 マットアート<135kg>

見返し 上 質 <90kg>

色トピラ 色 上 質 厚口

